
男で女な神の使者

瀬見尾津凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男で女な神の使者

【著者名】

N1659R

瀬見尾津凪

【あらすじ】

神様の手違いで転生した俺は救世主になっていた。しかも胸は膨らみ、男のそれも付いているという状態で。宫廷魔女のネネルに説明を受け、徐々にこの世界での暮らしに慣れていく俺だが……。今でもとんでもない魔力を持っているのに、傷や病気を癒す古の超高度魔法を蘇らせることに!しかし魔物が世界に現われ、その一方で俺は変態魔術士に迫られて不安だらけ。これでいいのか、俺。見方によつては、BLにもGLにもなるのでご注意ください。

1 僕は記憶喪失

目が覚めると、そこは異世界だつた。いや、異世界というか……新世界？

何故つて、俺の身体にはあるはずのないものがくつついていたから。一つの柔らかい感触……そう、胸だ。しかし、股間にはしつかりと自分の物もついていた。

「まさか、あんたが神の使い？ 早速下品なんだけど」

と、声がして顔を上げたら、そこには小さい割にナイスバディで赤毛のツインテールの女の子、否、女性がいた。

はつとして、股間を触っていた手をどける。唯一の救いは、自分がきちんと服を着ていたことだ。

「いや、だつて、つてゆーか……え？」

周囲をきょろきょろして、俺はそこが薄暗い部屋であることを知る。

「な、何なんすか？」

「何つて、こつちが聞きたいわよ。今朝、唐突に神様からのお告げが降りて、次元の扉を開けた途端にあんたが現われたんだから」

次元の扉？ つづーか、神つて何だ？ どうやら俺は神様の使者らしいが、その神様の顔を俺は知らないぞ。

俺が困惑している間に、また彼女が言つ。

「何、まさかあんた、記憶喪失なの？ はー、やつてらんない。確かに普通の人間は次元を通ると記憶を失うけど、神の使者ともあるう人が例に漏れないなんて」

何だか申し訳なくなつた。

でも、そうか……そういえば俺、自分が男だつたということくらいいしか覚えてないや。いや、でも今は男だけど女だぞ。

「ま、いいわ。説明は後でするから、とりあえず付いてきなさい」と、彼女が急に俺に背を向けた。置いて行かれないよう、すぐさ

ま彼女の後を追う。

薄暗い部屋を出ると、眩く輝く廊下へ出た。壁や柱がきらきらした装飾で彩られ、まるでおとぎ話のお城みたいだ。

「あたしの名前はネネル。アザリア王家に仕える宫廷魔女よ」

「ふうん……王家、つて、まさか」「……？」

「マジでお城かよ！？」

「静かにしなさい。それであんたの名前は……ああ、記憶喪失だつ

け」と、息をつくネネル。

「きつと姫様が素敵な名前を付けてくれるわ。それまで待つてなさい」

「……はい」

自分の名前をもう一つの人に待たされるなんて、不思議な気分だ。

それからは無言だつた。俺より頭一つ分小さなネネルは、顔パスで謁見の間へと入つていった。

その部屋はやけに広くて、奥に玉座が三つほど並んでいた。

「お待たせして申し訳ありません。神からの使者を連れて参りました」

と、ネネルが玉座に座つた王様らしき男性と、その隣の王妃と姫らしき女性達にひざまづく。俺もその隣で同じように頭を下げた。

「ご苦労であった、ネネル。神の使者よ、我々はそなたを心より歓迎致しましょう。して、お名前は？」

「それが、どうやら次元を通つた際に私たち人間がそうなるよつて、記憶喪失になつてしまつたようなのです」

ネネルがそう返すと、王様が目を丸くした。

「なんと言つことだ、まさかそんなことが……」

「どうやら、神の使者は普通の人間とは違つべきらしい。

「そうでしたの。ならば、このフイアンシーナが使者様にお名前を付けてあげますわ」

と、父親とは反対に目をキラキラさせるお姫様。言動に問題はあ

りそなが、見た目はとっても美少女だつた。白金の髪の毛は長くふわりとして、目は綺麗な一重で瞳が透き通るようになっていて、華奢で、惚れない方がおかしくらい可愛かつた。

「そうですね……マリアド、どうのはいかがでしょう？」

全員の視線が俺を見る。拾われた捨て犬のような気分だったが、こういう時つてどうしたらしいのだろう。

「それで良いと思います」

口にしてから後悔した。思いますつて何だよ、素直に感謝するべきだろ！

「お気に召したようでよかったですわ」

と、何事もなかつたかのように笑う姫。ああ、笑顔も可愛いなあ。ふいに王様が咳をして、みんなの注意を向けさせた。

「では、マリアドと呼ばせていただこつ。それで、今朝のお告げ通りに、そなたはこの世界を救つて下さる救世主となるはずだが……ネネル、そこはどうなんだ？」

「記憶喪失の状態なので神の言つ通りになるかは分かりませんが、記憶が戻れば何かしら力を發揮するでしょう」

「ふむ、そうだな……では、マリアドの面倒はネネルに任せよう。幸いなことに、今はまだ時間がある」

「ありがとうございます、陛下」

と、ネネル。どうやら、これから俺は彼女と共に生活していくことになるらしい。すると、姫とはあまり会えないのか……今の内にしっかり見ておこう。

「初めの期限は一週間後だが、あまり焦らないで良いぞ。終末にさえ間に合えば、きっとどうにかなるだろ」

「しかし、まだマリアドがどのような能力を持つているのか、判明してありません。出来る限り手は尽くさせていただきます」

ぱーっと話を聞いていると、ここが本当に異世界であることが分かる。何やら、この世界の人たちはピンチに陥っている様子だし、終末までに俺が何か力を發揮すればいいようだ。それにしても、終

「あー……え、それってまさか世界の終わり?」

「それもそうだな。では、任せたぞ」

「あの、一つ聞いて良いっすか?」

謁見の間を出てすぐ、俺はネネルへ尋ねた。

「何、姫様のこと?」

「いえ、そうじゃなくて。何で俺、両方ついてるんですかね?」

ネネルが怪訝な目を向けた。

「ついてるって、何が?」

「だから、胸があるのに、どうして下も

「は? 当たり前じゃない」

は!?

「別におかしい事じやないわよ。確かに両方きちんと着つてるのは珍しいことだけど、この国の人はだいたいみんな、両方ついてるものよ」

開いた口が塞がらなかつた。少なくとも俺の記憶じや、両方ついてるのが当たり前ではなかつたぞ。

「もちろん、王様にも王妃様にも、姫様にもね」

「……おかしいでしょ、それ」

「おかしいのはあんたよ、マリアド

と、ネネルが見下すように笑つた。

そして案内されたのはある部屋だつた。

「ここがこの城で最も価値ある客間よ。急なことだったから、まだ

メイドが中にいるかも」

と、ネネルが扉を開けると、先ほどの謁見の間に劣らない、広くて豪華な室内が目に入る。

「あ、これはネネル様! すぐに済ませますのでお待ちください」

と、中にいたメイドが慌ててベッドメイキングを済ませる。遠かつたのでよく分からなかつたが、仕事を済ませたメイドがこちらへ来て、初めて俺は目を疑つた。

「お部屋の準備が整いました。何かあれば、すぐにお申し付けください」

「別に気にしないで、フューリ。それで、こちらが神の使者であるマリアドよ」

と、俺を紹介する。頭を下げていたフューリが俺を見て、深々とお辞儀をした。

「メイドのフューリと申します」

どう見たって、それは男だつた。メイド服を着込んでいるが、俺よりも少し背が高く、銀縁の眼鏡をかけた姿は好青年だ。

「ま、マリアド、です」

言い慣れない名前を名乗る俺。

「そうだ、下がるついでに騎士たち呼んできつけつだい、フューリ」

「かしこまりました」

と、フューリが部屋を出て行き、ネネルの後について俺は部屋の中央まで歩いた。

アンティーク調の椅子に机、壁には絵画がかけられあり、何とも言えぬ雰囲気を醸し出している。

「どうしたの、何か聞きたそうな顔してるけど」

と、どかっと椅子に腰を下ろしたネネルが問つ。

「あー、えつと……この世界では、男性もメイドになれるんですか？」

「はあ？ 当たり前でしょ、メイドに男も女もないわよ。さつきも言つたけど、この国の人たちはみんな男であり女でもあるの。つまり、仕事だつて好きなものを選べるのよ」

分かりやすくて、ううつだ。この世界に男女なんでものはあるけれども、ない。よつて、男がメイドであることは不自然じゃない。たぶん、女性の執事も存在する。

何だか頭が痛くなつてきた。溜め息をついて、俺も適当な椅子に座る。

「それにしても、変ね。普通、記憶喪失になつても、基本的なこと
は覚えているはずなんだけど、」

「と、俺を見るネネル。

「知りませんよ」

俺がちょっと口を尖らせて返すと、宫廷魔女は笑つた。

「ま、それも悪くないけどね」

「意味が分かりません」

「良いのよ、あんたは記憶喪失なんだから」

それにしても……ネネルは本当にナイスバディだ。俺なんかより
豊満なバストを見ると、嫉妬のか性欲なのか、よく分からない何
かがわき起こつてくる。でも、それで下にも付いているわけだから
……想像したくないな。あの可愛らしい姫にもあるのだと思うと、
さらにやりきれない。

ふいにノックの音がして、誰かが力チャリと扉を開けた。

「失礼します」

と、先に入ってきたのは一人の女性だつた。腰に下げた剣が、彼
女を騎士だと表していた。

そしてその後ろには、黒髪の愛らしい少年。

「早かつたわね、ヴェルシニゼーシュ」

「たまたま近くにいたもので」

と、ヴェルシと呼ばれた女騎士がこちらへ歩み寄つてくる。後ろ
にいたゼーシュといふ名の少年は、おどおどした様子で彼女の後に
付いてきた。

「これが噂のマリアドよ」

先ほどとは違い、端的に俺を紹介するネネル。どうやら、話は伝
わっているらしい。

「私は宫廷騎士団第一部隊隊長、ヴェルシと申します」

と、俺の前でひざまづく、ヴェルシ、女性なのにかっこいい。明る
い茶髪はポニー・テールに結わえられてあつた。

「同じく宫廷騎士団所属、第一部隊隊長の側近で騎士見習いのゼー

シユです

と、少年。まだ声変わりしていないのか、やけに声が高かつた。

「ちはむしる、可愛い印象だ。

「ああ、これから説明をするから、あんた達も座つて。あ、マリア

ドはみちんと話、聞いてるのよ?」

四人で机を囲んでいた。

「まず、今朝の話からするわね。今朝、巫女の一人が神のお告げを聞いたの。次元の扉から現われし我が使者が世界を救う、つて」と、ネネルが説明をする。

「で、今この世界は、終末を迎えるとしている。それも、地下世界に住む黒妖精たちによつてね」

「黒妖精？」

「この世界は二つに分かれているのです。私たち人間の暮らす地上と、妖精族の住む地下。黒妖精というのは、その妖精族の中でも強い魔力を持った者たちの総称です」

ヴェルシが口を挟んだおかげで、何となく理解が出来た。

「その黒妖精たちは、あたしたち人間を遙か昔から憎んでいるの。それは神に選ばれなかつたからで、元々は人間も妖精も一緒に暮らしていたのよ」

「神はその昔、増えすぎた生命を減らすため、人間たちを陽の当たる地上へ残し、妖精たち全てを地下の世界へ閉じ込めてしまつたのです」

「でも、そんなの古い話でしょ？ なのに、黒妖精の奴らは目の敵にしてるの。彼らが言つには、一週間後に地上へ魔物を送り込むらしいわ」

「え、それつてやばいんじゃないすか？」

「やばいわよ。だからマリアドが必要とされてるんじゃない」

三人がじつと俺を見た。そういえば俺、神の使者だつた。

「でも、この国には優秀な騎士団がいる。魔物が来たつて、すぐにはやられないわよ」

だんだんと状況が飲み込めてきた。

「そして次の期限が三週間後、今度は黒妖精たちが地上を破壊しに

来るそうです

と、遠慮がちにゼーシュが言つ。

「そつなつた時は、あたしたち宫廷魔女と魔術師が迎え撃つ予定よ。問題はその次なの

「三度目の期限？」

「そり、三度目の期限は一ヶ月後。黒妖精たちが独自に編み出した魔法を使って、この世界を焼き尽くすそよ」

考えただけで恐ろしくなつた。焼き尽くすって、どうこうことだよ！？

「もちろん、その魔法が何だか分からないから、手を打とうにも策がない。そこでマリアドの出番つてわけ」

「神の使者であるマリアド殿に、この世界を救つていただきたいのです」

「彼らに対抗できるのはあんただけってことよ

「……そんなこと言われても」

と、俺は苦笑する。何が出来るのか、自分でも分からぬのにそんな大それたことを、俺は本当にやるのか？

「大丈夫よ、あたしたちが記憶を取り戻す手伝い、してあげるから」

「……ネネル、私はそんなこと聞いてないぞ」

「何言つてるの、一人でマリアドの面倒見きれるはずないじゃない」横目に互いを睨み合うネネルとヴエルシ。一人は喧嘩するほど仲が良さそうだ。

「……分かつた、今回は妥協しよう

「さすがヴエルシ、分かつてるわね！」

喜ぶネネルだったが、ヴエルシは溜め息をついていた。

「というわけだから、明日からさつそく始めるわよ

「え、何を？」

思わず首を傾げた俺に、ネネルは言つた。

「魔法の訓練に決まつてゐるじゃない。基礎からやり直していけば、あつと思つて出すはずよ」

「じゃあ、私の方では武術の訓練をしましょう。いかなる能力を持ついても、身体が伴わないので意味がありません」
訓練……その言葉に嫌な予感しかしないのは、何故だろ？。

夕食の後だつた。

「あまり元気がない」と様子ですが、どうかされましたか？」
と、メイドのフュエリが俺へ尋ねてきた。

「え、いや……何ていうか」

俺は思いを口にしようかどうか迷つた。口にしたところ、ネネルのように「当たり前」の一言で片付けられてしまつんじゃないと、不安だつた。

「私で良ければ、出来る範囲でお答えしますよ」

「う、うん……ありがとう」

フュエリはにこっと笑つてくれたが、俺は未だに慣れなかつた。
どうしてメイドなのに男なのだろう。

「あ、あの、聞いてもいい？」

「はい、どうぞ」

「えつと……フュエリは、どうしてメイドになつたの？」

彼はまた、にこっと笑つて答えを返す。

「メイドの仕事が好きだからです。料理洗濯、掃除に雑用。中でも王家の住まう城でメイドとして従事させていたくことは、幼い頃からの夢でしたから」

「へ、へえ」

「それに、城へやつて来る貴族の方々のお顔も見られるので、とっても満足しております」

「あ、貴族つているんだ。

「貴族の人たちって、そんなにすごいの？」

好奇心から尋ねてみたら、フュエリの目つきが変わつた。

「そりや、すごいですよ。どこを見ても美青年に美人に、そりゃあもう、毎日が目の保養です！」

意味が分からぬ。

「特に公爵様なんて、もう素敵すぎて本当に……マリアド様も、きっと一目見たら抱かれたいと思つはずですよー。」

「……え、遠慮しどくよ」

抱かれたいつて、そんな……ああ、そうだった。この世界には男も女もないんだった。つまり、言い換えるとこの世界には百合薔薇が咲き誇つて……うわあ、あんまり嬉しい。

「そうですか？　あ、もしかしてマリアド様は女性の方が好みでしたか？」

「え、ああ、うん」

フュエリはどうやら男性が好きらしい。

「そうでしたか。では、あまり話が合いそうにありませんね。ちょっと残念です」

と、明るく笑う。彼と話が合つたなんて、一生来てほしくなかつた。

「マリアド様の胸がもう少し小さければ、私的に結構好みなんですけれどねえ」

「あ、あはは

やばい、狙われてる。

フュエリはにこっと笑つと、俺から離れていった。その後ろ姿を眺めながら、俺は溜め息をつぐ。

なんて世界へ來てしまつたのだろう。それも、神の使者で救世主つて……不安しかないじゃないか。最も、今の俺にはここへ来る以前の記憶がないのだから、どうしようもなかつた。帰る場所もなければ、帰りたいと思える場所にも心当たりがない。

今は、この現実を受け止めて慣れていくことが最優先だろう。もし、記憶が取り戻せるならその方が良いけれど……ま、その時はその時だ。

翌朝、俺が部屋で朝食を終えた頃、唐突にネネルがやってきた。

「あんたに案内しなきゃいけない場所があること、忘れてたわ
「え？」

「ほり、さつさと行くわよ。早くしないと終わっちゃう
と、ネネルに腕を掴まれて部屋から連れ出される。フュエリが相
変わらずにつこりと俺を見送っていた。

「ちょ、どこ行くんすか？」

「聖堂よ」

「聖堂？」それってまさか、巫女さんのいるとかいう

「そう、それ。今は朝の礼拝が行われてる時間なの、これを逃した
ら夜まで中には入れないわ」

だから急いでるのか。

状況を理解した俺は、ネネルの隣に立つて足早に歩き出す。

「ついでに、巫女のジャスナも紹介するわね」

何故だか胸が高鳴った。巫女さんに会えるなんて、わくわくする。

「それとマリアド、言葉遣い変よ。あんたはもっと偉そうにしてて
良いんだから」

「え、そうつすか？　あー……がんばる、ます」

「普通に喋つて！」

怒られた。でも、みんな知らない人だし、俺つて結構人見知りす
るタイプだしな……いやいや、俺は神の使者。これから氣をつけよ
う。

聖堂は城の隣にあつた。一度外へ出て、青を基調とした清楚な建
物へ向かう。

「あちやー、出遅れた」

と、落胆するネネル。建物の周囲には人々が群がつて、それぞれ
に頭を下げて祈っていた。

「そうだ、裏口」

と、ひらめいたネネルが再び俺の腕を掴んで歩き出す。
建物の裏側へ回り込むと、そこは静かだった。ネネルが扉を慎重
に開けて、そつと中へ入る。

薄暗い廊下をしばらく行くと、祭壇が見えてきた。その祭壇では数人の巫女と思しき白い服を着た少女たちがひざまづいていた。その中心には比較的年のいった女性がいて、彼女が頭を上げると民衆の方を振り向いて言葉を放つ。

「今日も神の恵みに感謝をし、素晴らしい良き一日にいたしましょう」

人々が彼女へ向かって口々に感謝を伝える。少女たちも立ち上がって、民衆へ向かってにっこりと笑いかけていた。

「中央にいるのが巫女長のセリンよ」

と、ネネルが小さめの声で説明をした。

「それでジャスナがその右側にいる茶髪の子。すぐ大人しそうでしょ？」

「確かに、ちょっと守りたくなる感じがするな」

ネネルよりも背はあるはずだが、とても華奢で内気そうな少女だつた。姫とはまた違うタイプで、すごく可愛い。

そして人々が聖堂を後にし始めると、巫女長がこちらに気がついた。

「あら、またそんなどころから入つて」

と、俺たちの方へ寄つてくる。

ネネルも彼女の方へ歩み寄り、俺を指さした。

「ごめんなさいね、巫女長。でも、今日は紹介したい人がいるの」

「神の使者、マリアドです」

「急に偉そうになつたわね」

と、俺を睨むネネル。

「だつて、偉そうにしろつて言つたのはお前だろ」

「それはそうだけど、もう少し礼儀つてものを」

と、ネネルが言いかけたところで、ジャスナが巫女長の隣へ來た。

「あなたが神の使者様ですね。初めてまして、巫女のジャスナと申します」

と、丁寧に俺の前でひざまづく。

「あ、マリアドです」

「ジャスナは立ち上がるといつとまにかむよつて微笑みかけてくれた。

「私は巫女長のセリンです。この子、ジャスナが神のお告げを聞いた本人なのですよ」

「つまり、ジャスナのおかげであたしは次元の扉を開けたわけなるほど、と納得する俺。

「つてことは、俺がここにいるのもジャスナのおかげなんだね。ありがとう」

「い、いえ、とんでもない。わたしはただ、お告げを聞いて、それを皆様にお伝えしただけですので」

と、困惑するジャスナ。分かりやすく頬を赤らめている様子が可憐らしかった。

3 神の使者として

「では、少し聖堂内を」「案内しましょ「うか?」

セリンがそう言つと、ネネルが答えた。

「そうね、それが良いわ。マリアドは記憶を喪失してゐるから、何か
思い出すかもしれないし」

「分かりました。ではジャスナ、特別に時間をあげるから」「案内し
てさしあげて」

「は、はい」「

元気よく返事した彼女を見て、巫女長がその他の巫女たちに目を
向けた。

「それでは、私たちはこれで。皆さん、朝の清掃を始めますよ」
と、廊下の奥へ消えていく。

「では、まず初めに祭壇を」「案内しますね」

ジャスナに連れられて祭壇の前まで来る。それはとても大きくて、
階段の一番上に神らしき彫像が立つていた。

「あちらがわたしたちの父で神様の、ウインドリード様であらせら
れます。この世界を作った創世の神であり、マリアド様にとつては
主様にあたります」

けれども、やはりその顔に見覚えはなかつた。ただのあつさえんこ
しか見えない。

「次は地下の靈廟を」「案内しますね」

聖堂を一通り回つてジャスナと別れた後、ネネルが言つた。

「さあ、さつそく魔法の訓練をするわよ」

「え?」

「何、嫌なわけ?」

「じつと睨まれて怯んだ。

「いや、何ていうか……休みたいな、と思つて」

「甘えてるんじゃないわよ」

と、ネネル。俺は文句したかったが、やめた。いくら神の使者といえど、許されることとそうでないことがあるらしい。

彼女の後についてたどり着いたのは、城の中庭だった。すでに準備がされていたそこで、ネネルは一本の杖を箱から取り出した。

「はい、これ

「杖？」

「そうよ。その先端に付いてる水晶が、魔力を勝手に引き出してくれるの。まあ、初心者向けだけど」

受け取った杖の先には、小ぶりの透明な水晶玉が付いていた。初心者はこれを使って魔法を覚えていくらしい。

「で、それを両手で持つて」

と、ネネルが俺と同じ杖を持つてみせる。右手は水晶玉の下をつかみ、左手は真ん中より少し下に添えられている。

「いっ？」

「そりそり、それで呪文を唱えるの」

ネネルは息を吸うと、呪文の言葉を呴いた。

「イグニフエル！」

ぼわっと炎が飛び出して、足元の芝生を焼いた。すぐにネネルが足で踏み消し、俺を見る。

「やつてみて」

「ぐりと唾を飲み込んで、息を吸う。そして俺は叫んだ。

「……い、イグニフエル！」

出きたのは小さな火だった。足元に落ちるまでもなくかき消えてしまう。

ネネルは呆然としていた。

「うそ、それだけ？」

「……イグニフエル！」

悔しかつたのでもう一度やってみたが、結果は同じだった。

冷や汗が俺の顔から吹き出でくる。

神の使者ともあろう俺が、まさか魔法もろくに使いこなせないなんて……何てこった。

「おかしいわね、基本中の基本なにに」と、考え込むネネル。

杖を持ち直してやつてみたが、やはり小さな火が一瞬現われるだけ。すぐに消えてしまつて意味がない。

「いいわ、考えていたつて時間の無駄。次はこれよ……、ヴェントス！」

ネネルが出現させた風は俺を直撃して足元をよろめかせた。

それから周囲の葉っぱを巻き込んで空へ消え、俺は思わず尻もちをついてしまう。

「さあ、マリアド

「う、うん」

立ち上がり杖を握る。今度こそ、上手くいつてくれよ……。

「ヴェントス！」

ぶわわっと巻き起こしたのは小さな風だった。ネネルにぶつかった瞬間にはじけて消える。

苦い顔をして、ネネルは次の呪文を唱えた。

「アキュア！」

水が海のように波打つて辺りの芝生を刈り取つて消える。

「……アキュア！」

しかし、俺の場合は地面に吸い込まれて消えた。

ネネルが溜め息をついた。

俺は居心地が悪くなり、杖をもてあそぶ。

「きっと調子が悪いだけね、そうよ、きっとそれ」と、事実を否認するネネル。期待を見事に裏切つてしまつたよう

で、本当に申し訳ない。

俺も溜め息をついて杖を地面に突き立てる。

「今日はこのくらいにして、休憩に

「

と、ネネルが言いかけて目を見開いた。何かと思つて地面を見る
と、炎が水の上で風と舞つていた。

「杖から手を離して！」

と、ネネルが叫び、慌てて手を離す。

ぱたりと杖が地面へ倒れ、炎たちも姿を消した。

「……さ、さつきのは？」

「生成魔法よ。属性の違う魔法を組み合わせて、より強力な魔法を
生み出すの」

そんなの、した覚えがない。

「あたしでさえ習得中の高度な術よ。それをあんたは、無意識に…」

「何か、やばい感じ？」

「やばいわよ！ あんたに杖は持たせられないわ。そうだ、念のた
めにこれ羽織つて」

と、ネネルは箱から一枚の白いロープを取り出した。

「これは魔力を抑制するロープよ。普通は強い魔法を使う時に的確
な操作ができるよう、使う物なんだけど」

薄汚れたロープはずしっと重く、何か押さえつけられる感じがし
た。しかし、デザインは意外と悪くない。

「そうしたら、両手を前に出してみて」

「こうか？」

ネネルに言われたとおり、両手を前へ出す。その手をネネルによ
つて重ね合わせられる。

「何でも良いから、呪文を

「……えつと、ヴエントス！」

何となく被害が少なそうな風の魔法を唱えた。すると、先ほどネ
ネルが起こしたよつた強風が巻き起こり、周囲を荒らした。

「行けるわ！」

「え、これでいいの？」

「良いのよ！ あんたは何かを媒介にすることなく、自分の身一つ

で魔法が使えるってこと。わつきは水晶を媒介にしたせいで、魔法を生成しちゃったのね」

頭では理解していても、何となく納得がいかなかつた。

俺は自分が思うよりも、すごい能力を持つているらしい。

ネネルはそんな俺に気がついたのか、今度は落ち着いて説明をしてくれた。

「魔法には二つの種類があるの。あたしのようには杖を使う方法と、あんたみたいに身一つでやる方法。人間はその多くが杖を使うけれど、あんたは黒妖精と同じで何も道具を必要としないタイプなわけ。そしてそれは、下手に道具を使わると本来の効果を発揮できなかつたり、さつきみたいに暴発しそうになるの」

「ああ、なるほど」

「ついでに言つと、あんたがそのローブを脱いで本氣出したら、この世界を救う魔法だつて夢じやないわ」

「じゃあ、やつぱり俺……？」

「やつ、神の使者であたしたちの救世主よ」

昼食はネネルと一緒に前庭で食べた。

その後、ヴェルシとゼーシュがやつて来て、午後は武術の訓練をすると言つ。

「つていうか、何でこんな……城、でけんだよ」

「僕たちはこれを毎朝やつてるんですよ」

と、俺の隣を走るゼーシュ。

城の周りを三周しようと言われたのだが、一周したといひすでにくたくたになつていた。

「む、無理……ちょっと休ませて」

思わず立ち止まると、ゼーシュが俺の前へ来て言つた。

「怒らせる怖いんですよ、ヴェルシさん」

「……そんな脅しには乗らないぞ」

と、呼吸を整える。

ゼーシュは呆れた様子で俺を見ていたが、日陰になつている壁際
に移動し、腰を下ろした。

「ひつちの方が涼しいですよ」と、俺を手招きする。ひつちが分かってくれたようだ、良かつた。

隣へ座つて休憩に入る。

「今日は初日ですし、少しくらい許されるでしょう」「そうだな……にしても、本当にこの世界つて不思議だな」と、思つたことを口にした。

ゼーシュが首を傾げて俺を見る。

「そうですか？」

「ああ、だつて……男も女も、みんな平等に働いてるんだぜ。馬車を引く女もいれば、洗濯してる男もいて……新鮮だよ」

ゼーシュは顔を前へ向けると、遠くの空を仰いだ。

「確かに、外見から胸が小さい人は男と呼ばれます。女は逆に、胸が成長している人。けれども、そのどちらでもない人もいるんですよ」

「どちらでもないって？」

「……僕は、どちらに見えますか？」

聞き返されて、俺は彼を改めて観察した。

黒い髪はショートカットでさつぱりしていて、体つきは完全に男だ。顔立ちはまだ幼さを残していてあどけなく、よく見るとまつげが長かつた。

「男」

「……そうですよね」

「と、何故か溜め息をつくゼーシュ。

「え、女なの？」

「胸が成長しないので、飽くまでも精神的な意識だけですが。でも、騎士団に所属したからには男でいる方が楽かもしません」

「……そうか」

むしろ、男とか女とか、そういうことに拘るのはやめた方が良いのかもしれないな。ゼーシュもそうだけど、俺だって胸があるのに男のつもりで生きているわけだし。

「不思議だなあ、本当に」

「そういえば、マリアド様は、その……」

と、ゼーシュが俺をちらつと見た。

「胸の大きい方が、好みですか？」

「え？ いやー……どうだろ。確かに女の方が好きだけど、自分にもあるつて思うと、あんまり関係ないっていつていうか」

と、自分の胸を見下ろす。

走っている最中、たぶたぶ揺れて鬱陶しい一つの膨らみ。しかし、これが当たり前であるなら、性別の認識が怪しくなつてくるな。

「何つーか、男でも女でもない状態は、俺もそうだよな」

「……じゃあ、胸がなくても？」

とつさに頭に浮かんだのはフューリの姿だった。

「うーん……ないな。いや、でもたぶん、相手による」

そう、男は彼だけじゃない。いや、もちろん女の方が好きだけど。

「そうですか」

と、ゼーシュは納得した様子を見せた。

4 神様との遭遇

訓練といつも試練を終えて部屋へ戻ると、フュエリがお茶の用意をしていた。

「お疲れでしょう、マリアド様。夕食の時間までゆっくりおべつりきください」

と、にこりと笑う。

そんな彼の姿にも見慣れてきた俺は、素直に椅子へ座った。カップから香草の匂いが立ち上っている。

「甘い物はお好きですか？」

「あー、まあまあ」

フュエリが焼き菓子の載つた皿を俺の前へ置いた。色とりどりのそれは、とても美味しそうに見えた。

カップを持ち上げて、口を付けた。温かい茶が喉を潤して、気持ちがほつと安らぐ。

「先ほど、姫様がこの部屋に来られました」

「え？」

びっくりしてお茶をこぼしそうになつた。

フュエリは構わずにクローゼットをさして言ひ。

「姫様が衣装を用意して下さつたのです。あちらの衣装棚に入れておきましたので、ご確認くださいませ」

「衣装つて？」

見たい気持ちでつづつしたが、俺はとりあえず尋ねた。

すると、フュエリがまたにっこり微笑む。

「マリアド様のお身体に合つた、素敵な衣装ですよ」
何だか嫌な予感がした。カップを置いて、席を立つ。
クローゼットの前まで行つて、がしつと開けた。

「……うつわ」

皿の前に広がるのは、きらきら光る宝石のちりばめられたドレス

や、ふわふわしてひらひらなレースのあしらわれたワンピースなど、可愛い女の子が着るべきものばかりだった。つまり俺、完全に女扱いされている……マリアドット名前も女性名だつたりして。

嫌な考えを振り切つて、俺はクローゼットを閉めた。

「明日からはそれを着て生活して欲しいのだそうです」

「う、うん……ちょっと、無理かな」

強要されたら着るけれど、それまでは普通の動きやすい服を身につけようと思った。

「だつてほら、魔法の訓練とか、武術の訓練とかあるし。何もなければ良いんだけど、さすがにこれじゃ動きにくいし」「

と、無意識に言い訳をする俺、かつこわるい。

フュエリはそんな俺を怪しむことはせず、ただ頷いてくれた。

「そうですね。では、今日のように動きやすい服をご用意させていただきます」

「うん、ありがとう」

フィアンシーナ姫の気持ちは嬉しいけれど、やっぱり俺は、女にはなれそうにない。

翌朝、目が覚めた瞬間に俺は身体の痛みを覚えた。筋肉痛だ。

どうにか上半身を起こし、ぼーっとする頭で両目をしつかり開く。欠伸が出た。

室内にはまだ誰の姿もなく、俺はベッドを降りて伸びをした。背中が痛い。こんなで今日も城の周りを走らせられるのだと思うと、気が重かった。

一つ息を吐いて、近くの窓へ寄つてカーテンを開けた。

「あー、だる……」

眼下に広がる城下町。早くも人々で賑わって、その中でも聖堂を目指して歩いている人々の姿に目が行つた。

ぱーっとその列を眺めていると、部屋の外から音がした。誰かが扉をノックして、姿を見せる。

「おはよう」「やあ、マリアド様つ」
ジャスナだつた。

「おー、おはよつ」

と、軽い返事を返して彼女の方へ歩み寄る。

ジャスナは息を切らせていた。加えて、礼拝の時間なのに抜け出してきたといつとは、俺に大事な用があつたものと見られる。

「どうしたの？」

「あ、あのつ……わたし、やはり、あなたにどうしてもお伝えしたいことがあります」

と、俺を見上げるジャスナ。何やら必死な目だ。

「えーと、何？」

部屋に一人きり、といつシチュエーションにドキドキしていた。ジャスナは深く呼吸をすると、俺へ言つ。

「もしかしたらわたし、マリアド様の記憶を取り戻せるかもしれません」

……マジで？

はつとしたジャスナがあろおろと視線を逸らし、先ほどより落ち着いた声で説明をした。

「あの、わたしは昔から、神の領域に近いとされているんです。だからお告げを聞くことも出来たし、必要であれば神様の近くまであなた様の精神をお連れすることも可能で……それをすると、わたしはしばらく寝込んでしまうんですけれども」

「え、ジャスナってまさかすごい人？」

「す、すごいと言つたか……巫女になる為に生まれてきたようなもの、と言つたか……」

恥ずかしそうに両手をもじもじさせた、ジャスナはまた俺を見た。「なので、わたしだつたらマリアド様を神様の近くまで運べるかもしれないんです」

「神の近くつて……ちょっと待つて、落ち着こひ」

と、俺は彼女の肩に両手を置いた。びくとしたジャスナに構わ

ず、俺は中央の椅子を指さす。

「座つて」

「は、はい」

彼女を椅子に座らせて、俺もその向かいに腰を下ろした。

「それで、具体的にはどういうことなの？」

「あの、まず両手を出していただくんです。そしてわたしがその両手に手を重ねて、わたしの魔力を使って精神を神様の近く、遙か上空の世界へお連れするのです」

「でもそれをやつたら、君は寝込んでやうんだろ？」

「はい……それだけで魔力を使い果たしてしまって、三日は目を覚まさないと思います」

俺は溜め息をついた。何て良い子なのだろう、ジャスナは。

「ですが、マリアド様のお役に立てるなら

「分かっただ。まずはネナルに相談しよう

と、俺が席を立とうとすると、ジャスナがそれを止めた。
「いけません！ 礼拝が終わってしまったら、わたしは巫女長に連れ戻されてしまします」

そうだった。今は礼拝の時間、巫女が聖堂の外にいるなんてありえない。

「……でも、俺には判断が付かないことだし、ジャスナに無理はさせられないよ」

「良いんです、わたしは神に仕える身。神の使者であらせられるマリアド様のお役に立てるなら、どんなことだって出来ます」

ただの内気な少女かと思ったが、根は強い人らしい。その真剣なまなざしに、俺は折れた。

「そうだな……じゃあ、頼むよ

「はい！」

俺は立ち上がりと、両手をジャスナへ差し出した。立ち上がった

彼女がその手を取り、言つ。

「目を閉じてください」

「うん」

両手を開じると、扉の開く音がした。

「マリアド様！？ それあなたは巫女の……っ」

フューリの声だ。すぐにまた扉の開閉する音がして、彼が廊下を走つて遠ざかる。まさか、ネネルを呼びに行つたんじゃないよな？

「行きます」

と、ジャスナが静かに告げた。

俺は気を引き締めて、徐々に不安定な状態へ引かれていく感覚を覚える。

それは頭痛のよつで、呼吸したくても出来ない息苦しさに似ていた。

ふわっと急に身体が軽くなつたかと思つと、空の上にいるような映像が目に映る。

思わず周りを見渡すと、それはやはり空の上にしか思えなかつた。白い雲があつて、間近に太陽の光が当たり、その反対方向に真っ白な双子の月が見える。

「良く来たな、マリアド」

唐突に声がして、俺ははつと前を見た。

そこにいたのは灰色の長髪を風になびかせている中年のおじさんだつた。

「……まさか、あんたが神様？」

「そうだ。じつして顔を合わせるのは初めてだな」と、神様。マジで来ちゃつたよ、神の領域。

「あ、初めまして。えっと」

思わず挨拶をしてしまうと、神様が怒つた。

「そんな悠長なことしてると、お前にはきちんと説明をせねばならんのだ」

「うわ、ごめんなさいっ」

身体もないのに身を縮めた俺は、改めて神様の顔を見た。聖堂で

見た彫像より少し若く見えるが、『氣のせいかな。

「まず、お前には謝罪をする。本当に急なことで驚いただろ？、悪かつたな」

「……え、何が？」

「何故謝罪をされたのか、よく分からなかつた。

神様は少し目を丸くして、説明をする。

「ああ、そうだったな。お前は本来、別の世界へと転生するはずだったのだ。しかし、我的手違いである世界へ送つてしまつた」

手違い？

「意味が分かりません」

「そうか、ならそれでいい。幸いなことに、救世主としての能力もきちんと備わつているし、特に問題なく進められるだろ？」

「ちょっと待てよ！ だから、何で俺はあの世界に行つたんだよ！？」

？

しつかり説明してもらわなければ気が済まなかつた。

「うむ……我的手違いだ。いくつも世界を同時に管理していると、たまにミスを犯してしまつのが……お前はあの世界へ行く前、違う世界で一度死んでいたのだよ」

死んでいた？ 俺は一度、死んでいたつていつのか！？

「まさか！」

「魂は肉体から離れる、つまり死んでしまうと、それまでの記憶を失う仕組みになつてゐる。その証拠に、お前は自分のことを全く覚えていられないだろう？」

と、神様が俺を見据える。

「くつ……そんな、でも……じゃあ、何で俺は女になつてるんだ？」

「その世界に見合つた姿になるのは当然だろ？、郷にいれば郷に従え、言葉が通じるのもそういうことだ」

「そんなこと言われて、素直に頷けるわけねえよ！」

「あまり文句するでない、これは紛れもない事実なのだ。お前が救世主として仕事を終えた時は、お前の望む世界へ転生させてやるか

ら耐えてくれ

「やだ、絶対やだ！ つつか、マジで意味分かんねえよ！」

俺がどんなに文句を言つたところで、神様が何もしてくれないことは明らかだつた。俺は神の使者として世界を救うしかないのか。

「くそ、神とかマジでありえねえ。このクソじじい、地獄に落ちろ！」

と、無駄なことを叫ぶ俺。すると、ふいに俺の意識が飛んだ。

「あーもう、勝手にやるなつて巫女長にも言われてたはずなのに」
ネネルの声がして、俺ははつと目を覚ます。

「気づかれましたか、マリアド様」

「……あー、うん」

何故か俺は、フュエリに抱かれていた。嫌な目覚めだと思つたが、構わずに上半身を起こす。

見ると、ジャスナはネネルに抱かれて眠つていた。
「で、神様には会えたの？」

「うーん、会えたけど……不満が増えた」

「はあ？」

怪訝な顔をするネネルとフュエリ。俺は説明をしようとせず、ジャスナの寝顔を見つめた。

「彼女は大丈夫なのか？」

「ええ、すでに巫女長には連絡したから、その内に迎えが来るでしょう

「そつか」

前よりも気分がすつきりしていた。俺が記憶喪失なのは、一度、別の世界で死んだからなんだ。それなら、記憶を無理に取り戻す必要はない。

「ジャスナには感謝しなきやな」

俺のために魔力を使い果たしてくれて、本当に申し訳ない。それ

でも、俺に与えられた選択肢が一つしかないことがはつきりして良かった。

こんこんとノックされて、扉が開く。

「失礼いたします」

入つて来たのは二人の巫女だった。白い服の上に紺色のコートを羽織つており、すぐにジャスナの元へ来て頭を下げる。

「ジャスナがご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした」「次からはこんな事がないよう、厳重に注意しておきますので」その内の一人がジャスナを抱きかかえると、もう一人がネネルへ

言った。

「ネネル様、ご連絡、ありがとうございました」

「良いのよ、ジャスナは本当に何でかすか分からぬ子だもの。気にしないで」

「はい。それでは、失礼いたします」

そして巫女たちがジャスナを連れて部屋から出て行つた。

息をついてから立ち上がり、俺はネネルへ言つ。

「俺、記憶がなくて当然だつたみたいだ。だから、記憶を取り戻そ
うとしなくて良い」

「え？」

「その代わり、俺にもつとの世界のこと、教えてくれないか？」

後ろを振り返っても俺には過去がない。それなら、前向きになるしかないよな。

「まず、魔法には二種類の属性があるの。炎と風と水よ」
黒板にそれらを表す文字を書いていくネネル。その初めて見るはずの言語は、何故だか普通に読めた。俺は前の世界で、それとは違う別の文字を使っていたような気がするのだけれど、これも神の言う『郷にいれば郷に従え』効果だろうか。

「炎は水で消えるし、水は炎で消える。基本的に相容れない二つの属性だけれど、生成することでその良いところだけを取り出して組み合わせることが可能になるわ」

「じゃあ、風は？」

ネネルの説明をノートに写す俺だが、これまた不思議なもので、らすりと文字が書けた。

「風は中立。どちらの属性とも相性は良いけれど、炎で風を消すことは出来ないし、水で風を消すことも出来ない」

「すごいな」

「その分だけ、風は扱いにくいのよ。水は誰でも自由自在に操れるけど、炎を操るにはコツがいる。風を操るには技がいる、ってこと」
属性にはそれぞれ特性があるようだ、しかし二種類だけで良かつた。

「ちなみに、あんたほどの実力者が風の最上級魔法を使って操作不能になつたらどうなるか、分かる？」

と、ネネルが俺の正面へ立つた。じつと睨まれて、俺は答えに口惑う。

「えーっと、すごいやばいことになる」

「残念、答えは想像が付かない、のよ。建物どころか、街をまるごと荒らし回るかもしないし、もつとひどい被害をもたらすかもし

れない」「

「……だから、ロープか」

今まさに着させられている白いロープに、俺は目を落とした。

「そういうこと。それがあるおかげで、魔法が操りやすくなるの」

「じゃあ、しばらくはこれ着て、魔法の練習しなきゃいけないな」

ネネルは黒板の前へ戻ると、今度は『大地』という文字を書いた。
「あたしたちが魔法を使えるのは、神の創った大地があるからよ。この大地というのは、こうして立っているだけで力を与えてくれるのだけど、詳しいことは何年も前から調査中」

ぐるっと円を描き、その上に人らしき何かが立つている絵を描く。

そのあまりの下手さに、俺は思わず笑いそうになつた。

「……マリアド、あんた今、笑つたでしょ?」

「いいえ、笑つてませんっ」

と、とっさに答えたが、俺はにやける口元を隠しきれなかつた。

ネネルが呆れた顔をして俺の頭を平手で叩く。

「魔女にも苦手の一つや二つ、あつてもおかしくないでしょ」

あからさまに機嫌を悪くされてしまつた。地味に叩かれたところが痛い。

「だからって殴ることないじゃん。……で?」

「大地に触れている部分が多いほど、その恩恵を受けることが出来るわ。逆に言うと、杖などの魔法道具はそうすることで暴発する可能性が高まるから、直接大地に置いてはいけない決まりなの」

「ふうん」

言わされたことを眞面目にノートへ書き留めていると、ネネルが俺へ尋ねた。

「杖の持ち方、教えたわよね?」「

「ああ、うん」

確かに、両手で持つんだったよな。

「どうして両手で持つか、分かつてるわね?」

「え……あー、そつか。暴発するから」

「その通り。だからあんたは昨日、危うく庭を破壊するところだったのよ」

杖は杖でも、地面へ置いてはいけないのだ。昨日の例で言つと、大地の力が水晶玉に作用して魔法を……魔法は、どうして暴発するんだ？

「どうして魔法は暴発するわけ？」

「良い質問ね」

ネネルは腰に下げていた自分の杖を取り出した。

「普通、杖の魔力は媒介となる石に集まつてゐるの。他の部分はほとんど飾りで、近距離戦になつた時に相手を殴れるよう、今の形になつただけ。それで、この石に大地の力が侵入することで、本来の魔力と術者の魔力が外へ押し出される形になり、暴発してしまうわけ」

「何だか難しいな」

「でしょうね。理解するのは後で良いから、今は大地の力が良くも悪くも強力だつて覚えておけばいいわ。ちなみに、暴発する時はその術者の影響を受けた魔法が現われるから気をつけてね」

とにかく、杖は地面へ置いてはいけない。鈍器にもなり得るから、ネネルのように腰に下げて持ち歩かなければならないのだ。よし、覚えた。

「あとは……そうね、太陽と月についても説明しようかしら」

と、ネネルは黒板の文字と図を消し、新たに文字を書いていく。

「太陽は一つしかないのに、何故月が一つあるか」

「ああ、そういうえばそうだな。何か理由があるのか？」

「現在調査中よ。でも、太陽は炎の魔法に作用すると言われているの。そして月は水と風に作用する」

再び図を書こうとして、ネネルは手を止めた。

「向かって右側に見える月は、別名カストールと呼ばれ、左側に見えるのはポルクスと呼ばれているわ。水に作用するのがカストールで、ポルクスは風よ」

月と言われて、俺は昨夜のことを思い浮かべた。日が沈む頃は一つの月が同じ大きさに見えたが、寝る前は左側が小さく見えた。

「でも、ポルクスは大きさ変わるよな？」

「よく気がついたわね。これは天文学の話になるけど、ポルクスはカストールよりも遠くにあってそれぞれ動きが異なる。日が昇る頃にはカストールと重なって見えるのがポルクスという月よ」

それで何か影響はないのだろうか？　いや、ポルクスは風に作用するのだから……。

「じゃあ、朝方に風の魔法を使うと、威力が上がったり？」

「するわね。月との距離や位置によつても効果は変わるらしいから、確かなことは言えないけれど」

「そうか、あまり考えない方が良さそうだな」

むしろ、俺にはあまり必要のないことのように思える。何故なら万が一、素晴らしい条件の整つたところで何かしらの強力な魔法を暴発させてしまつたら、取り返しのつかないことになる可能性が高いだろう。

「それで良いと思つわ。あたしだつてそんなこと、氣にして魔法使つてないもの」

と、ネネル。すでに実力があるのだから、どう作用するかなんてどうでもいいわけだ。

「今はまだ良いけれど、その時になつたらきちんと装備は揃えるのよ。魔法道具は杖だけじゃなくて、鎧や腕輪なんかにもあるから、より的確な魔法を使えるようにそれで調子を整えるの」

「なるほど、ちょっと面白そうだな」

思つたことを口にしたら、何故かネネルに睨まれた。

「面白くなんかないわよ。アクセサリーに限るけど、中には魔法じゃなくて、呪いと言われる悪い影響を及ぼす装備もあるんだから」呪いの道具つて、何だかすごく怖い感じがする。

「……悪い影響つて？」

聞き返すと、ネネルがにやりと不敵な笑みを浮かべた。

「装備者に眩暈を起こさせたり、精神に影響を及ぼした場合は、望まない自死なんもあるわ。もちろん、それは単純に相性が最悪に悪かった場合だけだけど」

「うわ……気をつけよう」

神の使者であるからには、そんなことはないと思ったかった。

ノートにそのことを一応書き留めて、俺は息をついた。

「そういうや、ネネルの他にも宫廷魔女つっているの？」

黒板を消していたネネルが振り返る。

「もちろんいるわよ、当たり前でしょ」

「だよな。何人くらい？」

「えー……つと

ぶつぶつと名前を挙げて数を確認するネネル。

中途半端に消された黒板が妙にもどかしく、上の方があまりうまく消せていないことに気がついた。

「あたしを含めて八人ね。城に常駐しているのはその内の四人だけよ」

「みんな女？」

がたつと椅子を立つてネネルの隣へ立つ。

「男だつているわよ、魔女じやなくて魔術士になるけど」「そうか」

と、ネネルの手から黒板消しを取り上げて上方を消してやる。

「あ、ちよつ……何、よけいなことしてんのよ！？」

ネネルが憤慨した様子で俺の背中を叩いた。

「何つて、上の方が汚かつたから消してやつてるんだわ」「だから、それがよけいだつて言つてるの！」

と、黒板消しを取り返そうと伸ばす腕は短い。

子どもを相手にしている気分になつて、俺は笑つた。

「小さいんだから無理するなつて」

「小さくないわよ！ これが普通サイズ、みんなが大きいだけっ！」

劣等感を刺激された彼女が叫ぶのも気にせず、俺は黒板を綺麗に

してやつた。

「あーもつ」

と、らしくもなく口を尖らせるネネル。いつも上から田線で強気な印象の彼女だが、意外に可愛らしい一面もあるようだ。

6 意外なつながり

「では、私はマリアド様に最低限のことだけをお教えすればよいじいのですね？」

と、ヴェルシが目をあげた。

「うん、それだけ覚えておけばあとは魔法でどうにかなるだらう……つてゆーかさ、ヴェルシ」

「何でしちゃう？」

「あのー、そんなに礼儀正しくしないで良いよ? つつか、言葉遣いも普通にしてくれるとありがたいな」

俺の前でひざまづいていたヴェルシが、遠慮がちに立ち上がる。

「マリアド様がそう望むのなら」

「あ、様つて付けるのもやめてくれるか?」

ヴェルシが困惑した顔をした。隣にいたゼーシュも同じように困惑した表情で、俺を伺つて見つめる。

「ですが、マリアド様は陛下の客人です。呼び捨てにするなど失礼な真似は」

「やめろ、ゼーシュ」

と、ヴェルシに止められてゼーシュがはっと口を開じる。

「彼がやめろと言つてこらんだ。言われたことに従つのも、私たち宫廷騎士の定め」

「……はい、分かりました」

そしてじつと俺を見るヴェルシとゼーシュ。何を言い出すのかと思つて待つていると、ヴェルシが一つ息をついてから口を開いた。

「それじゃあ、さっそく練習に入らう」

良かつた。ヴェルシはきちんと俺の気持ちをくみ取つてくれたようだ。

「おー、ありがとう」

と、笑つて、俺は歩き出すヴェルシの後を追つた。

まず最初にやられたのは昨日と同じ、城の外を三周マラソンだった。

痛む脚を必死にあげてゼーシュと一緒に走つていいく。

「やっぱ、きついな……」

と、速度を落としてしまつ俺に、ゼーシュが言つ。

「今日は休憩無しですからね」

「マジかよ」

やつてられない。体力作りが大事なのは分かつているが、わざと転んでサボりたいくらいだ。

「先に行つちやいますよー？」

と、俺より前へ出て走り始めた。何だか悔しくて、無意識に速度を上げた。

三週目に入らうとしたところで、ヴェルシが俺たちを呼び止めた。その近くには何故かフュエリの姿もあった。

「止まれ、二人とも。事情が変わつた」

椅子に座つて優雅にお茶を楽しんでいたネネルが俺を手招きする。「こつち来て座りなさい」

何か大事な話があるようだ。それにしても助かつた。

ネネルの向かいへ座ると、フュエリが俺に茶を入れてくれる。

「突然だけど、あんた明日、国民の前に出て
「は？」

思わず眉をしかめてしまった。

「黒妖精たちのことは世間に知られているけれど、あなたの存在はまだ秘密にしてあつたのよ」

かたんと俺の前へカップを渡すフュエリ。

「ですが、国民の多くが魔物の襲撃やその後のことを恐れています。どうやって回避するのか、国王陛下は具体策を示すことが出来ずにいました」

「そんな国王に人々は疑いの目を向け始めてる。国王が何もしないでいるから、みんな不安に思つているのよ」「特に、情報の伝わりにくい地方ではそれが顕著に表れてきているらしい」

と、ヴェルシが息をつく。確かに、城下町では宫廷の騎士や魔女が身近に感じられるから良いけれど、地方はそうじやない。

「だから明日、あなたは国民の前へ出てみんなを安心させるの」「安心つて……どうやつて?」

カップを手にとつて、一口すすつた。身体が和らぐ感じがした。「神の使者だと明言するだけです。あとは陛下たちが何とかしてくれださいますので」

と、フュエリは言つてにこり笑う。

「それだけ? ジやあ、意外と簡単かもな」

まあ、俺が国民の立場だつたら救世主が現われてくれて嬉しいわけだし、やるしかないな。

しかし、何故かネネルはこやつとした顔で俺を見つめてきた。

「あんた、姫から衣装をもらつたそうね?」「え、うん」

「国民の前へ出るつてことは、王家と顔を合わわせることよ。さあ、もう分かるわよね?」

「……え? 分からないんだけど、何が言いたいんだよ?」

ネネルがわざとらしく溜め息をついた。

「鈍いわね。あんたは明日、姫からもらつた衣装を着なきや黙つてことよ」

嘘、何で? いや、ちょっと待て、でもそつだよな、言われてみれば姫に会うんだから、せつかくもらつた服を着ないわけには……うつわ。

「最悪」

一気に気持ちが冷めてきた。すゞく嫌だ、あんなふりふりでひらひらできらきらなドレス、誰が着るかよ!?

「はい、決定。姫に失礼の無いようにね」「では話は終わつたし、続きを始めようか」

と、ヴェルシが戸惑うばかりの俺を立ち上がらせた。

「一日だけですから、我慢なさつてください」

「いや、ちょ、フュエリ！」

「ほら、行くぞ。まだあと一周残つていいだろ？」

抵抗もむなしく、ずるずるとヴェルシに引きずられスタート地点へ戻る俺。その隣を歩いていたゼーシュがにこつと笑つた。

「きつと似合いますよ、マリアドさん」可愛いでドレス

「やだ！ 絶対やだー！」

走る気力はすでにゼロになつていた。

ヴェルシたちと別れてから、俺は部屋に帰りづらくて城内をうろうろしていた。フュエリは乗り気の様子だから、明日はどれを着るかと遊ばれるに違いない。

「部屋に帰りたくない」

「帰りなさいよ」

と、容赦なく返すネネル。もつ少し優しくしてくれたら良いのに、なんて思つても無駄なので。

「……ジャスナ、大丈夫かな？」

話題を変えてみた。

「大丈夫よ。あの子は昔からちょっと特殊な能力を持つてるだけで、死にはしないわ」

「そつか」

俺のために自分を犠牲にしてくれたジャスナのことを思つている

と、ネネルが言つた。

「あたしが話すべき」とではないけれど、あの子は街の外れにある施設で育つたのよ」

「……え？」

「赤ん坊の頃からね。あたしたちはその近くで生まれ育つたから、

あの子のことはだいたい知ってるわ

「そりなんだ、意外だな」

知り合いだということは見て分かつていたけれど、そんな共通点があるとは思わなかつた。

「もつとも、あたしは十一歳の時に宫廷魔女になつちやつたから、ジャスナを一番よく知るのは巫女長のセリンね

と、どこか遠くを見つめる。

「え、まさか巫女長も？ いや、ちょっと待て……さつき、あたしあちつて言つたよな？」

「言つたわ」

「あちつて、誰と誰のことをさしてるんだ？」

ネネルは俺の顔を見て、答えた。

「あたしとヴェルシとセリン、みんな幼なじみなの。セリンは一つ上だけぞ」

衝撃事実発覚。ヴェルシとネネルが同じ年だなんて！

「マジかよ、すげーびっくりした」

「そんなに驚くことかしら？ 別にいいけど」

と、また前を見る。

三人が幼なじみであることは分かつたが、その近くにジャスナのいた施設があつたということは……四人とも、実は本当に知り合いでつたわけだ。ヴェルシも、セリンやジャスナと仲良くするのか……ちょっと見てみたい。

頭の中でネネルを中心とした相関図を描いて、俺はふと氣になることに突き当たる。

「じゃあ、ゼーシュは？」

「は？ あの子は知らないわよ

何だ、残念。みんながみんな、つながりがあるわけないか。

「でも、ヴェルシが隊長に任命されてすぐ見習いになつたわね。ちゃんと話したことないし、よく知らないけど」

「そうか、ありがとう」

機会があったら尋ねてみよう、ゼーシュ本人に。

「……にしても、あんた、あの子と仲良いわよね？」

「え、そう？」

ちょっと目を丸くしてネネルを見ると、彼女はビックリした顔で目を

していた。

「走ってる最中、よく無駄話してるじゃない」

「ああ、それは……だって、無言とかつまらねえじゃん

「あら、それだけ？ でも彼、可愛いって一部で人気みたいよ？」

「彼じやねえ、と言いたかったが飲み込んだ。そんなことよりネネルがうれしい」

「悪いけど、俺、まったくそーいうのねえから。つか、俺はむしろ自分のことで精一杯だ」

意外そうな顔でネネルが目を丸くし、「あ、そう」と、呟いた。

「國民の皆様にしつかり印象づけるためには、やはり派手な方が良いかもしませんね」

と、いたるところに宝石のちりばめられたドレスをクローゼットから取り出してきて、俺へ合わせる。

「うーん、さすがにこれは派手すぎますね……」

それを机の上へそっと置いて、また別のドレスを取り出し、同じ事を繰り返す。真剣に衣装を選ぶフューリーに、俺は呆れていた。

「ちょっと地味ですね……いえ、知的な部分も演出しておきたいです」

「なあ、フューリー」

クローゼットへ向かおうとしていた彼が振り返った。

「はい、何でしちゃう？」

俺は山と積まれたドレスの数々を横目に、言つ。

「確かに選んで欲しいとは言つたが、さつさと終わらせてくれないかな？」

うんざりだ、という表情を彼に向けると、フューリーがはつと背筋を正した。

「申し訳ありません、マリアド様！ ですが、どれもこれも似合ひすぎで……」

「じゃあ、一番似合わない奴にして」

「えつ、そんな……」

わたわたとクローゼット内を探しては、すぐにこちらへ戻ってきてドレスの山を漁り出す。

「えつと、それではですね……これなんかいかがでしょう？」

と、取り出されたのは目に痛い真っ赤なドレスだった。花の飾りがあしらわれているものの、何となくダサい。

「うん、ごめん。やっぱ似合うのにして」

「かしこまりました！」

慌てた様子でドレスを探すフュエリ。

自分がわがままを言つてゐる自覚はあつたが、かれこれ一時間以上もドレス選びをしてくる彼も同罪だ。さつさと、この退屈な時間を終わらしてくれ。

「では、こちらかこちら……どちらがよろしいですか？」

と、右手に青を基調としたふりふりレースのドレスと、左手にはリボンのあしらわれた黄色のドレスを持つて、俺へ尋ねた。正直、どつちが良いかなんて分からなかつた。自分に合つかどうかなんて、さらに判断が付かない。

「姫の好きな方は？」

「こちらだと思われます」

フュエリは黄色のドレスを高く持ち上げた。

「じゃあ、それで」

「はいっ！」

やつと終わった。近くの椅子に座つて溜め息をつき、これからのことを考える。

大勢の前で「神の使者です」と、言つだけらしいが、信じてもらえるのだろうか？ 万が一、石を投げられたらどうするのだろう？ 犄憂に終わるであろうことは分かつていて、溜め息をつかずにはいられなかつた。

「……ふ、くくっ、似合つてゐる」

と、ネネルがにやけた顔で俺をまじまじと見た。

「笑つてるんじゃねえよ」

「だつて、すゞく良い感じじゃない。可愛いわよ、マリアド」

くくつと、笑いをこらえるネネル。

これまでなるべく考へないよつにしていたが、俺もそれなりに胸が大きかつた。自分の両手で掴んでもはみ出るほどだ。ドレスを着た今だとなおさらそうなのだが、俺つて実は女性っぽかつた。

「じゃあ、行きましょう。国王たちが待ってるわ」「ああ、そうだな」

と、彼女の後を追つて廊下へ。

普段と違つて城内はざわざわしているよつて思えた。

「あー、脚がすーすーする」

「慣れなさい」

「つづーか、靴も歩きづらいんだけど」

元々用意されていたものなのか、フュエリが棚から取り出した靴はぴかぴかのヒール靴だった。

「それも慣れよ」

「……ちえつ」

軽く舌打ちをして、窓の外に目を向ける。ざわついているのは中だけではなくたらしく、城の外にはたくさんの人々がひしめきあつていた。

「あんな大勢の前でやるのか？」

「当たり前でしょ」

急に緊張してきた。何百どころか、何千、何万もの人々に向けて俺は喋らなければいけないのだ。

「腹痛くなつてきた」

「あ、そう」

相変わらずつれないネネルを憎く思いながら歩いていくと、とある部屋に着いた。そこには城下の広場に面したバルコニーがあり、国王たちの姿が見えた。

「とつてもお似合いですわ、マリアド」

と、いち早く俺を見つけたフィアンシーナ姫が歩み寄つてくる。

「あ、ありがとうございます」

にこにこしている姫に俺も作り笑いを返し、国王とそのそばにいた側近たちが俺を振り返る。

「わざわざ申し訳ない、マリアド。では、さっそく始めるとするか」

「はい」

国王がバルローへ出た途端、外からわっと声があがつた。すぐにそれは静まつて、人々は国王の言葉を待つ。

「待たせてしまって申し訳ない。今日は我々の希望の光、救世主となるであろうお方を皆へ紹介する」

ざわざわ、ひそひそ話をする声がする。

国王が振り返って俺を見る。姫がにこっと笑つて俺の腕を取り、歩き出した。

民衆の前へ出た姫がお辞儀をし、俺もそれに倣う。

「ひいらが、神の使者であらせられるマリアド殿である！」

「……え、えと、えーと

頭の中が真っ白になつて、何を喋つたらいいか分からなくなつていた。数え切れないほどの目が俺をじつと見つめているのだ。

「落ち着いて、マリアド

と、姫が小さな声で言つ。

俺ははつとして、深く息を吸つた。

「神の使者、マリアドです」

もう一度、今度はしっかりとお辞儀をした。上出来だ。

俺が満足して顔を上げると、人々が騒ぎ出した。

「そんな嬢ちゃんに何が出来るつて言つんだ！」

「本当にこの世界を救つてくれるのか！？」

「神の使者なら、それが本物だつて証拠を示してよ！」

ああ、やつぱり……。

苦笑いを浮かべてしまつ俺に、国王の目が向けられた。

「信じられない気持ちは分かる。しかし、この方は唯一、黒妖精たちに対抗する手段をお持ちなのだ！」

「ネネルから話は聞いていますわ。マリアドは、魔法がお得意なんですかね？」

「ですつてね？」

と、姫。

つまり、俺は今ここで、その実力を示さなければいけない状況に追い込まれていた。

不安で後ろを振り返ると、ネネルは無言で頷いた。やれ、ということのようだ。

「……」

仕方ない、やるしかないか。

国王と姫から距離を取るよう前に前へ出た。両手を前へ出して重ね、意識を集中させる。

「ヴェントス！」

手のひらから強風が生まれ出て、人々の間を勢いよく吹き抜けていく。様々なものを巻き込んで、城下町の端まで続いたその風は、最後に大きな轟音を残して消えた。

呆然としていた人々が俺の顔を見て、やがて声を上げ始めた。

「ほ、本物だつ！」

「世界を救うに相応しいお方だ！」

「マリアド様！」

わーわーと盛り上がる国民に、俺は複雑な気持ちを抱きつつ、微笑んだ。

「素晴らしいですか、マリアド」

と、姫がここにこした顔で俺の腕に巻き付いてきた。

「さすがは神の使者、あれほど強力な魔法を間近で目にしたのは初めてでしてよ」

「あは……自分で、ちょっとびっくりしました

と、苦笑い。

「それにしても、何故風の魔法を？」

「え……えつと、何となく？」

「姫様、マリアドは風の魔法がお好きなんです。どうやら、性に合つているようで」

急にネネルが口を挟んできてびっくりした。

「あら、そうでしたの？ フィアンシーナは水の方が好きですのに、ちょっとがっかりした様子の姫を見て、俺はどうしたらいいか迷

つた。魔法の好みなんて考えたことなかつただけに、俺には姫の言わんとすることが分からない。

「ところで、明日のお話は聞いてうりうりしゃる？」

「え、明日？ 何があるんですか？」

俺が首を傾げると、姫は楽しそうにこり笑つた。

「最初の期限が近づいてるので、騎士たちのためにパーティを開く予定です。マリアドは強制参加ですわ」

さらりと黒いことを言われた氣がするのは氣のせいだろうか。

「それは初耳です、姫。そのパーティには私も？」

「もちろんですわ。ネネルはマリアドの世話係ですもの」

どうやら、俺は明日もまた、こんな衣装を着なければならぬらしい。それも今度はパーティ、他人との距離が当たり前だが近い。

「明日は貴族の方々も招待していますし、きっと素敵な出逢いがあるはずですわ」

と、フィアンシーナ姫は俺へウインクをした。素敵な出逢いも何も、俺はそんなのちつとも望んでいないわけだが……きっとまた、フュエリは俺の衣装選びにわくわくするのだろう。

「ありがとうございます、楽しみにしています」

無難な言葉で返事をした。

8 初めてのパーティー

「そうだよな。あと三日経つたら、魔物が出てくるんだよな夕方、何事もなかつたように、ヴェルシの訓練を受けた俺は、ふと呟いた。

「詳しくは分かりませんし、魔物がどういった物かも分かりません。戦いで、いつ命を落とすかも」

「うん……ゼーシュも、前線に出るんだる?」

ゼーシュは先ほどの訓練で使用した武具を指示された場所へ置く。そして何も言わず、振り向きざまに俺へ短剣を突きつけた。

はつとして身体を硬くすると、ゼーシュは笑つた。

「もちろんです。見習いの身ではありますが、民間人の助けにはなれるでしょ?」

「……そうだな」

短剣を握っている手を優しく下へ降ろさせて、俺は思つ。

「今はあまりにも平和すぎるんだな、実態が見えないから」

「そうですね」

ゼーシュは短剣を鞘へ収め、それを所定の場所へしました。

「その時になつてみないと、何もできないものです」

ヴェルシは俺に短剣の使い方を教えてくれた。ゼーシュ相手に動き方をみつかりたたき込まれ、その後でネネルから「魔法使いの武器は杖だけよ」と、言われて落ちこんだ。

しかし、そんな俺を見てヴェルシが杖の扱いだつて似たようなものだと言つて、杖での戦い方をきちんと教えてくれた。

これで、いざという時に魔法に頼らず戦うことが出来る……はず。

「明日が楽しみですね」

「そうか? 僕はむしろ、不安しかないよ」

「ははつ、そんなに心配しなくて良いですよ」

ゼーシュが陽気に笑つて、俺も釣られて笑つた。確かに不満はある

るけれど、今の生活は楽しかった。

翌朝。

「今日はとても忙しいのです」

「うん、何で?」

きつぱり言い切ったフュエリに理由を聞くと、彼は口を輝かせた。
「今日はパーティです、それも貴族の方々がいらっしゃるパーティ
なんですよ! 私ももちろん、その手伝いをさせていただくことに
なってあります」

というわけで、と、彼が差し出したのは昨日俺が選ばなかつた青
のドレスだった。

「マリアド様はこちらをお召しになられて下さる」

ふりふりの青いドレス。昨日の物よりも胸元が開いていて、袖や
裾のレースといい、女性らしさを引き立てるようなデザインだ。
可愛い女の子が着れば良いのだろうが、俺……男のはずなんだけ
どな。

「文句はなしです! 今日はあの公爵様もいらっしゃですから、気
が抜けませんよ」

と、フュエリがいそいそと着替えの支度を始める。

俺は昨日にも増してドレスを着るのが嫌だったが、姫の笑顔のた
めに我慢することにした。

その噂の公爵とやらにも会えるようだし、それならそいつがどん
な顔なのか見に行くのだって悪くない。フュエリの趣味を理解する
つもりはなかつたが、そんな好奇心だけは持つていた。

広間は華やかだつた。

着飾つた人々で溢れかえり、テーブルには豪勢な料理がたくさん
用意されている。心なしか、行き交うメイドたちも普段よりきつ
としているように見える。

「あ、化粧してる」

広間の前で待っていたネネルは、俺の顔を見てそう言つた。

「無理矢理されたんだよ」

と、不機嫌に返した俺だが、ふとネネルが普段と違うことに気づいた。

色の濃いマゼンタ色のドレスはタイトで、ギリギリまで入ったスリットは誘つているようにしか見えない。

「娼婦か、お前」

「わざと動きやすい服を着てるの。何かあつた時、すぐあなたを守れるようにね」

と、ネネルは胸の谷間から折り畳み式の杖を取り出して見せた。それは普通の物より小さかつたが、頭部に着いた石がそれを杖だと分からせた。納得だ。

「そういうわけだから、あんたも一応、警戒しておきなさい」

「おう」

それにしても、色っぽい。これでも少し身長が高ければ完璧なのに、何だか惜しいな、なんて。

「で、俺は今日、何をすれば良いんだ?」

「あたしの目が届かないところへ行かなければ、それだけで良いわ」

「何だよ、それ」

「何つて、今日の主役は騎士たちなのよ? まあ、あなたの所にいろいろな人たちが挨拶に来るでしょうけど」

「そういえばそうだった。今日は魔物を退治してくれる騎士達のために開かれたパーティだ。

「……ヴェルシドゼーシュは?」

「さあ、まだ来てないみたいだけど……」

と、一人して広間を見回す。

意識してみると、参加者の多くは体格が良い男女で、そのほとんどがパーティー慣れしていない様子だった。

貴族らしい人々の姿も見かけるが、何となく空気が違う。

「お前、こういった場所には慣れてるのか?」

「そうね、参加者の多いパーティーには、よく警備ついでに参加させられるわ」

「なるほどな」

そういうえば、壁際に立っている参加者はネネルと同じように動きやすい衣装を着ている。本当に、万が一の事態に備えているのだろう。

ふいに城内がざわめいて、国王と王妃、そして姫が現われた。

「今日は城までお越しいただき、誠にありがとうございます。今宵は心ゆくまでお楽しみ下さい、騎士たちの勝利を祈つて！」

「マリアド、あんたも楽しんで良いのよ」

と、ネネルが俺に耳打ちした。

それは分かつたけれど、パーティーなんて生まれて初めてだから緊張する。あ、一度死んでるから当たり前か。

「その内にダンスタイルに入るでしょうから、気になる相手を誘うのも有りよ」

と、ネネル。どうやら、彼女は何か誤解をしているようだ。俺には気になる相手なんていないっていうのに。

少し機嫌を悪くしながら、俺は改めて城内の様子に目を向けた。すると、一組の夫婦らしき男女が俺に歩み寄ってきた。

「お初にお目にかかります、マリアド様」

と、恭しく俺の前で礼をして、一方的に自己紹介をする。

俺が戸惑っている内に男女は別の人元へ向かつて行つたが、俺はかなりの人数から視線を注がれていた。

そう、主役は騎士たちであるはずなのに、俺の方が人気を集めていたのだ。

我先にと俺の前へ来ては、人々が自己紹介をしては去つていく。まるで嵐のような時間が訪れを告げていた。

「早くもお疲れの様子だな、マリアド」

ようやく嵐が過ぎ去った頃、ドレス姿のヴェルシが俺の前へ来た。

「ああ、ヴェルシ。もう人、人、人で顔も名前も つづーか……
「ん？」

不思議そうにするヴェルシだが、俺は彼女の意外な一面に驚きを隠せなかつた。

というのも、いつもは男にも負けないラフな格好か鎧姿の彼女が、淡い桃色のドレスを着ているのだ。それも、超ふりふりでひらひらで、俺なんかよりも遙かに女の子らしい。

「か、可愛いな、今日は」

思わず恥ずかしくなつて目を逸らす。

ヴェルシは俺の考えを感じ取つたのか、ネネルに共感を求めた。
「私だつて女だ、別に珍しいことはないだろう。なあ、ネネル？」
「そうね、騎士団の第一隊長が乙女趣味つていうのは、確かに想像つかないけれど」

「ネネル！」

ヴェルシが顔を赤くしてネネルを小突いた。その後ろ姿もすぐ乙女だ。

まあ、確かにヴェルシだつて女の子なんだから良いだろう。とうか、そんなふりふりドレスが似合つているところがまたす、い。

「あー……で、ゼーシュは？」

はつとして俺の顔を見るヴェルシ。

「先ほどまで第三部隊の奴らに捕まつっていたが……」
と、周囲に目をやる。

俺もヴェルシと同じように彼女の姿を目で探したが、あまりにも人が多すぎてよく分からなかつた。ゼーシュのことだから、いつかは俺に挨拶くらいしに来るだろうが……。

すると、見知らぬ美青年が俺へ声をかけてきた。

「どなたかお探しですか？ マリアード様

「まつたく、来るのが遅いんじゃなくて？ ソールハロッショウ」まるで人の手で作られた彫像のように目鼻立ちの整つた顔に見惚れていた俺は、ネネルの言葉で我に返った。

「そうかい？ タイミングを計つていたら、遅れてしまつたようだと、下品にならない程度に声を上げて笑う。

びっくりした。この世にこれほど綺麗な男性がいるなんて。いや、別に他意はないのだけれど。

「お久しぶりです、セカレ公爵」

と、ヴェルシが彼へ挨拶をした。長身の美青年は彼女の姿を見る

と、につこり微笑んで挨拶を返す。

「こちらこそお久しぶりです、ヴェルシさん」

とても愛想が良い。

ネネルは何やら彼のことが気に食わない様子だったが、ふいに俺の腕を掴んだ。

「こちらが神の使者のマリアドよ。さあ、挨拶して」

「え、あ……マリアド、です」

彼が再び俺に顔を向け、につこり。

「申し遅れました、私はソールハロッショウ・マシュア・フォン・セカレです」

名前を長さについていけない。

「ソルとお呼び下さい」

と、美青年が言ってくれて助かつた。

「あ、ああ、はい」

後ろで一つに結わえられた金色の長髪はゆるく波打ち、鋭さを思わせる目の中にはエメラルドグリーン。優しげな笑みは見ているだけでドキッとするのに、色っぽい声がまた優しくて。

「……触らせないわよ？」

と、何故か俺の前に立つネル。

何してるんだと彼女の肩を掴む前に、ソルが俺の横へ素早く移動した。

「失礼

と、俺の股間に手を伸ばす公爵。一瞬ではあつたけど、ぎゅっと握られて飛び上がった。

「うわっ、な、ナニを……！？」

「合格です」

と、わけの分からないことを俺の耳元に囁いてから、優雅に逃走していく公爵。

「待ちなさい、ソル！！」

「……さ、さわ、さわられ、触られ、た……」

まさか男に握られる日が来るとは思つても見なかつた。それも、合格つて何だ……！？

溜め息をついたネルが、混乱している俺へ言つ。

「初めて会う人には必ずやるのよ、あいつ。ちなみに、何て言われた？」

「え、つと……合格、つて」

「はあ、お眼鏡に適つたつてわけね。あいつ、下の大きさで人を見るから」

見ると、ヴエルシはどこか苦い顔をしていた。彼女もまた、彼に触られたことがあるらしい。

合格と言わても嬉しい気持ちはわからず、俺は息をついて気分を落ち着かせた。それからネルへ尋ねる。

「あの人はいつたい、何者なんだ？」

「公爵よ。王家の親戚でお金持ち。彼に関するて言うなら、あれで宫廷魔術士なの。つまり、あたしの同僚よ

「魔術師……公爵なのに？」

「ムカツクくらいに才能豊かで、魔力をもてあますのはもつたないな
いって自ら希望したの」

貴族の考える事はまったく分からぬ。

「あんまり深く関わらない方が身の為よ。くれぐれも、外見に騙されないでね」

「う、うん」

彼の顔を思い起こしながら、俺はフューリの言つていた公爵が彼で間違いないと確信した。

宫廷樂士たちが演奏を始めるど、広間の中央はダンスする人々で賑わうようになつた。

一通り腹はらごしらえを済ませた俺は、ただネネルの隣でぼーっとしていた。

すると、一人の騎士らしき精悍な顔つきの青年が来て言つ。

「一曲、願えますか？」

「ええ」

楽しそうに中央へ手を引かれていくネネルを横目見て、何だか嫌な気分になつた。神の使者として人気を集めていたのが遠い昔のように、俺は一人きりだったのだ。

気づけばどこもかしこもカッフルばかり。煌々と輝く月たちが城内にロマンチックな雰囲気を演出している。

ヴェルシさえもどこかの誰かとダンスしているし、姫は用意された椅子に座つて高いところから俺たちを眺めている。

俺にも誘いかからないかな、とか、柄にもなく思つてしまつた。いやいや、俺はダンスなんてしたことないから踊れないんだ。それなら、何もせずにいたつて良いだろう。

と、勝手に一人で結論づけても寂しくて。

「マリアドさん」

名前を呼ばれてドキッとした。

「ああ、ゼーシュ」

よく知る相手であることが、俺をまた嬉しくさせた。

俺の正面へ立つたゼーシュは、ドレスを着ていなかつた。

「あれ、何でそんな格好？」

尋ねると、彼女が少し寂しそうに笑う。

「胸がないので、こっちの方が楽なんです」

「……そっか」

いわゆる男性用の正装だ。俺と取り替えることが出来たら良いのに、と思う。

「それより、お相手して下せませんか？」

「え？」

ゼーシュが俺へ腕を差し出す。

「無理だよ。俺、ダンスなんて知らないし」

と、誘いを断ろうとしたら、ゼーシュが笑った。

「僕に合わせて下されば大丈夫ですよ」

「……でも」

みんなに溶け込めるだろうか。俺だけ、浮いてしまわないだろうか？

しかし、ゼーシュを待たせているのも悪い気がして、俺は彼女の腕を取つた。

そのまま中央へ引かれていい、男みたいな女の子が俺の手を自分の肩に置かせ、俺の腰に手を回す。反対側の手は、ぎゅっと繋ぎ合つていた。

「そんなに緊張してると、転んじゃいますよ」

「え、ああ、うん」

ヒールのせいで普段にも増して小さく見える彼女が、間近で笑う。「大丈夫、僕を信じて」

「う、うん……」

恥ずかしくなつてくるのは何故だろう？ 俺が女みたいだから？ ゼーシュがいつもよりも素敵に笑うから？

違う。

いつの間にか席を立つたフィアンシーナ姫が、俺の方をじつと見つめているからだ！

「うふふ、あの美少年騎士見習いとマコアド、なんて素敵な組み合
わせでしょう」

距離はあつたが、丸聞こえである。

動搖を隠すように、俺はステップに意識を集中させた。
ゼーシュも姫の視線には気がついている様子だが、何も言わず無
視している。

こうして、パーティの夜は更けていくのだった。

「おかえりなさいませ、マリアド様」

「何でそんなに残念そうなんだ?」

部屋へ戻るなり、俺はフュエリへそう言つた。

「何故つて、今夜はパーティだったんですよ? 一人くらい、お持
ち帰りになられてもよろしいですのに」

お持ち帰りつて何だ。

姫にしつこく観察され続けた俺は、すっかり疲れ果てていた。

「楽しかつたですか?」

「んー、まあまあ」

フュエリに手伝つてもらい、ドレスを脱いで寝間着へと着替える。
シャワーを浴びる気力すら残つていなかつた。

「ダンスも楽しまれたとか?」

「うん」

「お相手は?」

「……ゼーシュだけだ」

と、俺はフュエリを睨み付けてやる。

「そうですか、あの見習い騎士と……」

ドレスを片付けながら、彼はまた尋ねた。

「セカレ公爵には会われましたか?」

「会つたよ、大事なところ握られた」

無意識にあの時のことと思い出し、沸々と怒りのよくな恥ずかし

さがこみ上げてくる。

「そうでしたか。素敵なお方だったでしょ？」

「どうだかな……まあ、お前のことがよく分かつた気がするよ」

と、フューリの顔を見てニヤリと笑った。

彼は少し反応に困った様子だったが、すぐに俺へ言つた。
「確かに男遊びの噂が絶えない方ですが、根はとても真面目な方で

すよ」

俺は言葉を返さずにベッドへ向かった。それを中へ潜り込んで、
フューリへ聞こえるように囁く。

「おやすみ」

「……おやすみなさいませ、マコアド様」

最初の期限は明後日。

明日はそのための準備で騎士団は一日を費やす予定らしい。
これが最後になるであろう訓練の前に、俺は言った。

「けどさ、俺、ちょっと考えたんだ」

「考えたって、何を?」

「と、ヴェルシ。」

「俺はさ、すげー魔法が使えるわけじゃん? それなら、その魔法をいかに使いこなすかの方が、大事なんじゃないかなって」「それはつまり……」

「そう、俺は武術じやなくて魔法の練習をするべきだと思つ」
俺たちの様子を見ていたネナルが頷いた。

「確かにその通りだわ。だけどマリアド、あんたはいざとこう時こ力を発揮するだけで良いのよ」

何故だかイラッと来て、俺は言い返す。

「それは分かつてるけど、その時しか戦わないなんて何様だよ! ?」

「神の使者様」

「救世主様」

「二人にそう返されて、俺は口を開じざるを得なかつた。

「だいたいね、今から焦つてどうするのよ? まだ何も始まつてないわ」

「と、ネナルが相変わらず冷たい態度で言つ。

「そりや、そうだけど……」

「マリアドが共に戦つてくれるのは心強いが、万が一怪我などされではいけないしな」

「维尔シまでそんなことを言つものだから、俺はますます言葉を見失う。

「この前やつたように、ああやつて適当な魔法を使つだけでもす」

い威力なんだから、放つておいたって強力な魔法が使えるわ

思わず溜め息が出た。

俺は自分から何か、誰かの役に立つことをしたいだけなのに、それが許されないなんてもどかしい。

「……分かつたよ」

と、俺は機嫌を悪くしてヴェルシに背を向けた。

「ちょっと、どこ行くつもり?」

声をかけるネネルを無視し、さっさとその場を離れて行く。途中、道具を持ってきたゼーシュとすれ違ったが、それすらも無視した。

嫌だつた。

自分が自分じやないような、自分という存在の素晴らしいさが、何故かとても憎らしかつた。

「……マリアド様?」

はつと顔を上げると、目の前にいたのはジャスナだつた。彼女の手には箒が握られており、そのすぐ後ろには聖堂がそびえ立つている。

「ああ、ジャスナ……元気になつたんだね」

「はい。今朝、目覚めたばかりです。ご心配をおかけして、すみませんでした」

と、礼儀正しく礼をするジャスナ。

ふと後ろを振り向いたが、そこには誰もいなかつた。俺はあれからずつと一人で、こんなところまで来てしまつたようだ。自分がそう望んでやつたことなのに、寂しかつた。

その一方で、無意識なのか、意識してのことなのか……俺はジャスナの顔を見て安心感を覚えていた。

「どうかなされましたか?」

と、首を傾げるジャスナへ、俺は笑顔を返した。

「いや、別に何でもないさ。それより、ジャスナが元気そうで良か

つた

彼女もにっこり微笑んで、再び頭を下げた。

前に来た時は氣づかなかつたけれど、聖堂の裏庭には小さな花畠があつた。

「そりや、俺がそーいう存在だつていう自覚はあるさ。でも、だからつて何もしないなんておかしいだろ」

愚痴る俺の横顔をじつと見つめて、ジャスナが相槌を打つ。

「その気持ちは分かります。わたしも、自分に出来ることがあるならやうやくにはいられません」

「だろ?」

と、俺が思わず彼女に顔を向けると、ジャスナは「ですが」と、切り出した。

「マリアド様はとても大事な存在です。危険には晒せません

「……そつか」

目を逸らして、足元の地面を蹴る。

どいつもこいつも、俺が一人の人間だつて事、忘れてるんじやないのか? 無性に腹が立つ。

「あ、あの……っ」

察したジャスナが俺へ呼びかけたが、俺は無意識に彼女から距離を取つていた。

仕方なく足を止めて、振り返る。風に乗つて花の香りがした。

「戦うだけが、出来ることではないと思つます。その……わたし、見ちゃいましたから

と、ジャスナは氣まずそつと籌をもてあそんだ。

「見たつて、何を?」

「……未来、です。正しく言つと、実現しつるひとつのみの可能性「可能性?」

俺の力を使えば魔物も黒妖精も敵じやないのに、その他にやれることがあるつていうのか?」

「はい。マリアド様には、古の時代に存在したと言われている、超高度魔法を蘇らせることが出来るんじゃないかと」「よく分からなかつたけれど、希望が見えた気がした。

「それつて？」

「いわゆる、身体蘇生魔法です。傷や病を癒すと言われてますが、そんな都合の良い魔法は今の時代には存在しません」

「……それを、俺が？」

「はい、きっと出来ると思います」

と、ジャスナが強く言つた。

もしも、その身体蘇生魔法とやらを俺が習得できたら、俺は誰かの役に立てる？

「詳しいことは分かりませんが、王室の図書館に資料があるはずです。あ、でも、ネネルさんに知られたら怒られるかも」

と、ジャスナは俯いた。ビューア、俺に出来る事とこつのは、ネネルからしたら大変なことらしい。

「それでも、やるだけやってみるよ」

毎日何もせず、ぐうたら過ごすよりはマシだ。

彼女の方へ歩み寄り、その手をとつた。

「ありがとう、ジャスナ」

「マリアド様……わたしで良ければ、いつでもお力になりますから！」

向けられた真剣なまなざしに、俺は頷き返した。

古の超高度魔法。

それがどういったものであるか、どんな属性に類するのかは分からぬ。けれども、古の魔法といふことは、この世界の歴史を紐解いていけば自然と関連してくる事柄なのでは無からうか。

「あんた、今までどこでいってたのよ？」

俺の部屋で帰りを待っていたらしいネネルに問い合わせられたが、俺は答えなかつた。

彼女の横を通りて窓際へ立ち、遠くの地平線を見つめる。

「俺、あの後さらりに考えたんだ」

「はあ？」

「俺……この世界のこと、一から勉強するよ。魔法だけじゃなく、

歴史もな」

と、振り返る。

ネネルは疑わしげな目で俺を見ていたが、呆れたように言い捨てた。

「勝手にしなさい」

と、席を立つて扉へ向かう。

「何するつもりか分からぬけど、あたしたちを困らせたり、心配させるようなことだけはしないでね」

ばたんと扉の閉まる音が、やけに大きく聞こえた。

息をついて、再び窓外に目を向ける。

今はまだ平和そのものだけれど、明後日には魔物が世界に現われて人々を襲うだろう。

ヴェルシやゼーシュがその魔物退治をしている最中、俺は部屋でじつとしているなんてごめんだ。

ネネルには呆れられてしまつたけれど、俺はやるぜ。身体蘇生魔法とやらを、必ず習得してみせる！

……でも、それを本当に習得してしまつたら、俺つて無敵じゃね？ やべ、何この存在感。これなら、黒妖精になんて絶対に負けないな。俺は思わず、にやついた。

いつもなら、朝食が終わってのんびりしている時にネネルが部屋へやってくる。

しかし、今日はどうだろう。昨日のあれ以来、彼女とは顔も合わせていないだけに、何だか気まずかった。

いつもどおりに部屋へ来てくれるなら良いのだけれど、それが怪しいのだからもやもやする。

部屋で待っているのも変な気がして、俺は朝食の片付けから戻ったフュエリへ声をかけた。

「なあ、フュエリ」

彼が俺の顔を見て首を傾げた。

「何でしょつか？」

「あの……その、図書館つてどこにあるか知ってる？」

と、俺が尋ねると、フュエリはにっこり頷いた。

「ええ、もちろん存じております。何か調べ物ですか？」

「うん……ちょっとな」

言葉を濁す俺に構わず、フュエリは言つ。

「分かりました、すぐにご案内させていただきましょ」

「あ、ありがとう」

フュエリが仕事の一つとして、仕事の中として俺に接してくれることが嬉しかった。彼は本当に良い奴だ。

「こちらがその図書館になります」

そこは城の中でも外れの方にあつた。聖堂の方向とは真逆で、メイドの姿すら見えないような人気のない所だ。

年代を感じさせる物々しい扉が入り口らしく、俺はその取っ手に手をかけた。

「何時頃お部屋に戻られますか？」

「え？」

突然フュエリに聞かれて、俺は目を丸くした。

「付いてきてくれるんじゃなかつたのか？」

フュエリはフュエリで、俺の言葉に目を丸くする。

「私にも仕事がありますので……マリアド様の用が済んだ頃、お迎えに上がるうかと思つておりました」

「……そつか、そうだよな」

彼は俺の世話をしてくれるけれど、主は俺じゃない。

諦めてフュエリから視線を逸らした。彼もまた、俺の意をくみ取つて言う。

「それでは、昼食の前にお迎えに上がります」

「うん」

深々と頭を下げるから俺に背を向けて歩き出すフュエリ。

俺は扉を開けることもせず、言つた。

「さみしーなー」

フュエリの足が止まる。

「別に一人でも良いけど、図書館入るの初めてだし、心細いなー」

そのまま待つていたら、フュエリがすたすたとこちらへ戻ってきた。

そしてにつこり笑う。

「分かりました。お供させていただきます」

「そう来なくつちや」

にこつと俺も笑つて、扉を開けた。

室内は本の匂いでむわつとしていた。

俺たち以外に訪問者はいないのか、とても静かだ。いるのは、入り口近くの扉の先に見える司書の女性だけ。

「静かだな」

「図書館ですから」

そういうえば、図書館では静かにするのが決まりだった。どうしてかは分からぬけれど。

ずらりと並んだ棚を一つ一つ見ていく。

まず俺が立ち止まつたのは歴史の棚だ。分厚い本から薄つペラな本まで、種類が豊富に揃つている。

「歴史についてお調べですか？」

「うん、まあな」

目に付いた一冊を取り出してぱらぱらとめくつてみた。

この国が成立した頃の事が書かれていたが、どうやら俺の欲しい情報はなさそうだ。

すぐにそれを棚へ戻して、俺はふとフューリーへ尋ねる。

「お前が、秘密って守れる？」

「秘密、ですか？」

何を期待しているのか、どこか嬉しそうにして彼は返答する。

「場合に寄りますね」

「じゃあ教えない」

と、俺は言つたが、元から教えるつもりなんて無かつた。
別の本を手にとつて、先ほどのようにぱらぱらと中身を確認する。
今度は広く、世界の歴史が書かれていた。これなら使えそうだ。

「……あの、マリアド様」

「何？」

「その……ネネル様と、何があつたのですか？」

急にネネルの名前を出されてびっくりした。

思わず本を閉じ、俺は彼の顔を見る。

「何かつて……ちょっと、意見のすれ違いはあつたけど」

「そうでしたか。ケンカというわけでは？」

「……ないよ、ケンカじゃない。でも、怒らせたかもしれないとは、思つ」

と、手にした本の表紙に目を落とす。

フューリーは納得したように頷くと、いつもみたいに優しい声で言った。

「の方は少し、心配性な所がありますから」

「うん……」

確かにあいつは俺のことを心配しそうだと思った。俺だって自分に出来ることはやつていいきたいのに、あいつはそれを駄目だと言つ。勝手にしろと吐き捨てて、自分勝手に俺に背を向けた。

「我が儘だしな、あいつ。でも俺は怒つてないから、大丈夫だぜ」「ええ、そのようですね」

フュエリがそう言つて、ほっとしたように息をついた。

気を取り直し、俺はまた棚に手を伸ばし始めた。古の超高度魔法について、さりげなく調べなければならないのだ。

それからいくつかの本を手にとり、椅子と机のある方へ歩き出す。すると、扉の開く音がした。無意識にそちらへ顔を向けた俺は、思わず苦い顔を浮かべてしまつ。

「おや、マリアド嬢ではありますんか」

今現在、俺が最も苦手とする人物……ソールハロッショうだつた。

「こんなところで会えるとは、なんて喜ばしい」

と、俺の方へ歩み寄つてくる。

無視して机の上に本をどさつと置き、椅子へ座つた。その場で立ち尽くしているフュエリは、公爵の登場にただただ驚くばかりだ。しかし、ソールハロッショは俺しか見えていない様子で俺へ言つのだった。

「こんなに何の用ですか？ これは……世界史に興味が？」

と、俺が読もうとしていた本を取り上げる。いちいちムカツク野郎だ。

俺は彼から本を取り返して言つた。

「悪いんだけど、邪魔しないでくれない？」

「邪魔だなんてとんでもない。あなたのお役に立てたらと思つてお声をおかけしたのに」

何を言つても無駄に思えて、俺は無視することにした。

すると、ソールハロッショはどこかの棚へと消えていく。俺はすぐには本を開いた。

そして一冊の本を手に戻ってきたソールハロッシュは、何故か俺の隣へ腰を下ろした。

フュエリはその向かいにそっと腰を下ろし、公爵の顔をあからさまに見つめている。

……この状況、耐えられない。

顔を上げて席を移動しようと本をまとめた時、ソールハロッシュの読んでいる本に目がいった。そのタイトルは『超高度魔法について』。

「……そ、ソル、それって、

声をかけずにはいられなかつた。

「ああ、超高度魔法についての論文ですよ。以前から研究を続けているのですが、なかなか成功しなくて」

と、どこか誇らしげに返すソールハロッシュ。

「……研究、つて？」

「超高度魔法を成立させるための研究です」

呆然としている俺を見て、彼が不思議そうに首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「あ、えつと……超高度つていうくらいだから、やつぱり、すごいんだよな？」

「簡単に言つと、傷や病気を癒す回復魔法ですよ。その昔、神よりその力を与えられた魔術士にのみ使う事を許された、最高の魔法です」

息をついて、椅子に座り直した。まさか、身近に超高度魔法を研究している人がいるなんて。

さりげなく情報を集めるつもりでいたけれど、こうなつたら彼に教えてもらつた方が良いのではないだろうか。幸いなことに、俺は彼に気に入られている。しかし、ソールハロッシュは最悪な変人野郎だ。果たしてどうする、俺……？

「もし興味をお持ちなら、研究室へご案内しますが……どうです、

マリアド嬢？」

はつとして我に返る。彼の方から誘つてきた！　これはチャンスだ！　つて、何かおかしくないか？

「え？」

「ですから、マリアド嬢には特別に研究室へお招きして、詳しい内容をお教えすると言つているんです」

にっこり笑うソールハロッショの顔には、下心がありありと浮かんでいる。

初めに会つた時はそこまで気づかなかつたが、彼は俺のことを女だと思い込んでいるらしい。つまり、俺は女として彼に気に入られていたわけで……じゃあ、恋仲になつてもおかしくないんじゃね？　だつてほら、そうしたら相手の研究成果は全て俺のものだし、そうしたら手間が省けてジャスナの手を借りることもなく……と、そこまで考えて躊躇つた。

相手は初対面でいきなりあそこを触つてきた奴だ。すげー美青年で公爵で魔術士。ネネルには近づくなと言われた、その人。

「大丈夫ですって、この前みたいなことはしませんから」

と、うさんくさく笑う。

俺は少し悩んで、フュエリを見た。

「メイドも連れて行つて良いなら」

ソールハロッショはメイドをちらりと見やつてから、俺へ苦笑した。

「仕方ない方ですね。分かりました、良いでしょ」

彼が俺を気に入つてることを、フュエリは一体どう思つているのだろう？　気になつたが、聞く気にはなれなかつた。

その部屋には窓が一つしかなかつた。壁は見た目にも頑丈で、奥にある机の上には書物が散乱している。

「宫廷魔術士の部屋は、どこも防音になつているんですよ」と、ソールハロッショウは言つて、机の上を片付け始めた。

フューリはメイドらしく扉の前で待機していた。それ以上先へ入るつとせず、俺たちの方を見守るばかりだ。

「へえ、何で？」

「三十年ほど前のことです。この国は今ほど世界的権力もなく、長きにわたつて他国と戦争をしていました」

「……戦争」

そういえば、この国つて実は大きいんだよな。今ではこの国こそが世界を動かすと言わてるくらいで……昔の戦争があつての、今のは平和だ。

ソールハロッショウは本を棚へしまいながら語つた。

「その当時は、魔法こそが主な戦力とされていたそうです。その為に、魔術士に与えられた部屋は王族のそれよりも頑丈に造られ、中の音が外へ漏れない設計にされたんです。つまり、この部屋はその名残というわけですね」

「そうか……」

言われてみれば、初めに俺が出てきた部屋もこんなところだつた。きっと、あれはネネルの部屋だったのだろう。

片付けを済ませると、ソールハロッショウが俺を手招きした。

「遠慮しないでこちらへどうぞ、マリアド嬢」

「あ、ああ」

歩みを進めて奥へ向かう。

ソールハロッショウの引いてくれた椅子に腰かけて、俺は窓から差し込む外光を眩しく思った。

「一説には、次元の扉のように魔方陣を必要とするとか、
と、彼が俺の前へ一枚の紙を差し出した。丸い円の中にいくつも
の線が描かれた不思議な図形だ。

「これが、その？」

「ええ。ですが、デマでした」

と、紙を取り上げるソールハロッシュ。

「超高度魔法は身体蘇生魔法ですからね。やはり、何かの属性を使
用するはずなんですが、水でも炎でも、風でもない」

「じゃあ、何なんだよ？」

俺の前に立ち止まり、ソールハロッシュが言つ。

「『大地』です」

「それって属性じやねえじやん」

思わず俺がそう返すと、魔術士は笑つた。

「そりなんですよ。それが問題なのです
よく分からぬ」

「では、何故古代には存在した魔法が、今の時代になつて存在しな
くなつてしまつたのか？」マリアド嬢、あなたはどう考えます？
と、今度は真摯な表情を俺へ向ける。

問われたことはつまり、こうだ。昔はあつたものが今、ないのは
何故か？ 普通なら、残つてもおかしくないはずだが……。

「……あ、誰かが意図的にその存在を消した！」

「残念、違います」

自信があつた答えだけに、すぐ否定されてムカツときた。

「変わつたんですよ、この世界が

と、ソールハロッシュ。

俺は口をとがらせて続きを待つた。

「人々が魔法を取得し、それによつて文化が成長するにつれ、『大
地』は本来の魔力を失つてしまつたのです」

「ふうん？」

「魔法に限らず、あらゆる方法で人々が生活を豊かにしていくほど

に、その魔力は弱まつていきます。それによつて、昔は存在していた属性が消滅しました

属性が消滅？

「それは光です」「ソールハロッショ。

「その光属性こそが、超高度魔法に必要とされる属性なのです。」

「まあ、全部私の推測ですけどね」

にこつと茶目っぽく笑う。

俺はこみ上げてくる怒りに肩を震わせたが、彼の推測が正しいようと思えて諦めた。いすれにせよ、俺にはその推測を裏返すだけの知識を持つていない。

「で、その推測は証明できないのかよ？」

と、彼を睨む。

すると、ソールハロッショは笑うのをやめて言った。

「出来ませんよ。何故ならすでに消滅した属性なのです。それを蘇らせる方法が分からぬ限り、何も出来ないじゃないですか」

ムカつく。口ではすごいことを言つていたくせに、実際はありもしない妄想に逃げていただけじゃないか！

「ですが、その痕跡を確かめに行くことは出来ないこともあります

ん

「は？」

あからさまに俺が疑うと、魔術士はまた真剣な顔をする。

「ただ、一人で行くには少し遠いところとして……費用も馬鹿にならないので、保留していたところなんです」

「……で？」

その先の言葉は、予想が付いた。

「マリアド嬢に協力していただけるのなら、国からの支援だつて受けられるでしょう。どうです、賛同していただけませんか？」

「嫌だ」

「……ですか」

ちょっとがっかりした様子でソールハロッシュは口を開いた。
それから向かいの椅子に腰を下ろし、溜め息をついてみせる。わざとらしい。

「他には？」

何もないのなら、さっと部屋を後にしようと思つて問つた。

ソールハロッシュは口を開かない。

何を企んでいるのか分からぬだけに、長居は危険だと俺の直感がささやきます。俺が期待しそうたのか、あまり良い情報は得られなかつた。やはり、自分の力で探した方が良いようだ。

「……何もないならもう帰る」

と、俺が椅子を立つと、彼がふいに言つた。

「宗教の中の話ですが、光は神の属性とされています。実際には存在しないから、今の人々は光を空想の物だと思い込んでる」

「……へえ

佇む俺に、彼が席を立つて行く手を阻む。

「もしかすると、神の使者であるあなたにも、その光属性が宿つていたりして？」

にやりと怪しく微笑んで、そつと俺の髪に手を伸ばす。

「……まさか

強気な口調で否定し、相手の様子をうかがう。

ゆつくりと近づいてくる整つた顔……思わず後ずさる俺の左足。

「本当にそう思いますか？ あなたは神の使者なんですよ。この世界で最も、神に近い者……」

彼が俺の唇にキスする直前、俺はソールハロッシュの腹に拳を入れてやつた。

「気が向いたらまた来る

と、言い残してフューリに目を向けた。

「つー？」

「帰るぞ、フューリ」

「は、はいっ」

腹を抱えてうずくまるソールハロッショを一度も振り返らず、俺はさつさと部屋を後にした。

廊下の途中だった。

「どこ行ったのよ、マリアド」「

「……変態魔術士に誘われて付いてつただけだ」と、俺はネネルとすれ違つ。

「あいつには近づくなつて言つたでしょ」「う

「ああ、言われた」

無性に苛々していた。

「まさかあんた、あいつに惚れたの？」
と、ネネルに言われて足を止めると、振り返つてすぐに否定した。

「は？ んなわけねえだろ」「

ネネルは半信半疑な様子で言つ。

「じゃあ、どうしてあいつに付いていったのよ？ 答えなさい」「……それは

彼の研究に興味があるからだなんて言えない。

二人の様子をうかがっていたフュエリが、ふいに口を開いた。
「廊下で偶然、出逢つたんです。マリアド様は私を連れて行つて良いなら、と、誘いに応じただけです。何もおかしなことは

「フュエリは黙つてて」「

「……すみません」

と、縮こまるフュエリ。

じつと俺を睨んでいるネネルへ、考えた末に言葉を返した。

「暇だから付いていつただけだ」「

「それだけ？」

「ああ、それだけの理由だ」

呆れたようにネネルが息をつく。

「まったく、魔法ならあたしが教えてやるの……」「

どうやら、彼女はありがたい勘違いをしてくれたようだった。それなら、それに乗らない手はない。

「しょ、しょーがねえだろ、俺が知ってる魔術士はお前とあいつの二人だけなんだから」

「それもそعدたわね。とりあえずお皿にしましょう、続きはその後よ」

と、ネネルが俺の横を通り過ぎて行く。

安心して、俺もすぐに彼女の隣へ並んだ。

「心配かけたみたいで、悪かつたな」

「はつ！？ 心配なんてしてないわよつ、あたしはあんたの世話係なだけで」

まだまだ、彼女に俺の企みがばれる日は来そうにない。

1 最初の期限

一瞬、悪夢を見ていたのかと思った。しかし違った。瞬きを何回かして、上半身を起こす。

けたたましい鳴き声が聞こえ、窓の外を見たことのない巨大な鳥が飛んでいった。

「……」

静かな室内に、街の喧噪が響く。悲鳴や鳴き声、何かの壊れる音。ついにこの日が来てしまった。

「ヴォルシとゼーシュは？」

「城下町の南方を守っているわ。……守り切れないようだけど」昨日まで存在したはずの平和は、今や欠片もない。

「どうするんだよ、これ」

と、俺は紅茶のカップを手に取った。いつものように持ち上げようとして、やめた。

「世界の状況を確認次第、対策を取るそつよ。今は騎士団に任せることはないわ」

「……魔物にやられたら？」

赤い紅茶に映る俺は、情けない顔をしていた。居ても立つてもいられないくせに、何も出来ないもじかしさで板挟みになっている。

「近くの医院や救護室に運ばれて治療を受ける。また戦えるようになつたら」

「戦うのか？」

向かいに座つたネネルはじつと俺を見て、息をついた。

「それが騎士団の仕事よ。騎士見習いも戦場に出てるから、そう簡単に数が減るとは思えないけれど？」

確かに彼女の言つ通りだつた。

この日のために地方配属された騎士団員を含めると、総数は軽く

万を超す。街によつては有志による自警団などもあるから、実際に魔物と対峙しているのはその何十倍だ。

分かつていながら、俺はやりきれない気分でいた。カップを口元へ運び、紅茶をぐつと一気に飲み干す。

「何か出来ることはないのかよ」

がたつと席を立て、室内をあてもなく歩き始めた。

ネネルはそんな俺を見て、相変わらず冷めたことを言つ。『勉強することね。それとも、そのあんたの力で魔物たちをやつつけに行く?』

行つたところで、民間人を巻き込まない保証はない。それに加え……。

「仮に魔物を倒したとして、その後、人々が騎士団ではなく、あんたに助けを求めて群がるのは当然よね」

それでは俺の身が持たないことも、容易に想像が付いた。せめて魔物たちの様子や現在の状況を隅々まで把握するくらいしか、俺には出来ないのか。

「なあ、ひとつ気になることがあるんだけど

「何?」

ネネルへ顔を向け、問う。

「魔物つて、どこから出でてくるの?」

「……地下から」

「そうじやなくて、その地下からどんな風に地上に来てるのかってことだよ」

そのことについては知らないらしく、ネネルは口を閉じた。

俺は溜め息をついて、窓外に目を向けた。今朝から変わらずに大きな鳥が空を旋回しているのが見えた。

「せめて、それくらいの知識は持つていいな」

呟く俺。

ネネルは小さく頷くと、立ち上がった。

「付いてきなさい」

そこは王家専用の会議室だった。向かって一番奥に国王がいて、左右を宰相らが囲んでいた。

久しぶりに国王と顔を合わせ、何も心の準備をしていなかつた俺は緊張してしまつた。

「失礼します、陛下。マリアド様が現在の状況を確認したいというので、お連れしました」

と、ひざまづくネネル。

国王は俺を見ると、手招きをした。

「」苦労であった。情報がまとまり次第、マリアド殿には話をするつもりでした。どうぞ、こちらへ」

「あ、はいっ」

ネネルを置いて国王の方へ向かう。

人々が脇へと避け、俺は国王のすぐそばで立ち止まつた。

国王の前にある机には、大きな世界地図が置かれていた。そのあちこちに印が付けられていて、何かを示すものだと分かる。

「さて、現在の状況だが……国内では、宫廷騎士団の第一部隊から

第十七部隊まで、見習いも含めて全員がそれぞの持ち場について守つております。先ほど入つた報告によると、負傷者は十四名」

世界地図の大半を占めるのは、この国の土地だ。大陸続きの隣国はどれも大きく、海を隔てた向こうには島々が浮かんでいるだけ。

「順調に魔物を退治してはいるようですが、町や村への被害も何件か報告され始めています」

そう言つてから、国王は低く唸つた。

何だか嫌な予感がする……いや、きっとこれから先に良いことなんて一つもなく、状況は悪化していくのだろう。

「騎士たちも人間です、早ければ今日の夕刻には負傷者が数多く出ることでしょう。国民の安全のため、どこか一力所に全員を避難させる案を検討中です」

「避難させることで、魔物の脅威から守れると?」

「……分かりません」

それは可能かもしれないが、魔物の数が増え続けるのであれば、それは一時的にしか機能しないだろう。

「現実的に考えるのであれば、宫廷魔術士たちに各地域をまわつてもらい、防衛結界を張る方が良いのですが……騎士団と違い、魔術士は数が圧倒的に少ないものでして」

ネネルがはつと顔を上げたのが分かった。

国王は彼女に構わず、咳払いをして話題を変える。

「世界の状況についてですが」

難しい問題だと思った。一人でも多くの国民を守るには、その分だけの時間と、犠牲が必要だ。

「どこも魔物の対策に追われており、発展途上国ではすでに多くの死傷者が出ているようです。このままでは、黒妖精たちの思うつぼです」

でも、俺の魔力があれば……考えて、やめた。どうせまた、ネネルに止められるのがオチだらう。

氣を取り直し、国王の話に集中しようとそちらを見る。

「そして、魔物の出現場所についてですが……それが、どうやらテリュス山脈が根源らしいのです。大陸のほぼ中心に位置し、二つに分けるような大きな山脈です」

「その山脈の、どちら辺なんですか？」

国王が微妙な顔をした。

「まだ分かつておりません。目撃情報によると、山脈の最も高いところから降りてきている、と、言いますが……」

なるほど。いずれにせよ、そのテリュス山脈が地下の世界と繋がっているのは確実そうだ。

「詳しいことが分かつたら、また教えてください」

国王にそう声をかけて、俺は待機していたネネルを振り返った。

会議室を出ると、これまた久しぶりに姫に会つた。

「あら、マリアドでは『や』いませんの。」**きげんよつ**

と、**につこり**笑うフィアンシーナ姫。相変わらず可愛らしい。

「おはよびござります、姫様」

と、俺もつられて微笑むが、姫の隣にソールハロッショウがいるのに気がづいてはつとする。

「**ひきげんよつ、マリアド嬢**」

「お、おつ……」

昨日のことが思い出され、俺は無意識に一步後ずさつた。ネネルはネネルで、やはり彼を嫌っている様子で言つ。

「昨日はマリアドが世話になつたわね。一応聞くけど、何もしてないでしようね？ ソールハロッショウ」

「おやおや、失敬な。私はむしろ、マリアド嬢には特別優しくしているのに」

その『特別』が余計なわけだが。

ネネルとソールハロッショウが睨み合つ中、姫が俺へ尋ねた。

「ところで、父上に何かご用事でしたの？」

「ああ、はい。ちょっと、現在の状況について教えてもらつたところです」

姫はすると、ソールハロッショウの袖をくいと引いた。

ネネルから視線を逸らしたソールハロッショウに、姫が何事かを耳元で囁く。

すると、ソールハロッショウがにこつと微笑んだ。

「そうでしたか。では、話が早い。私たちはこれから、陛下へある提案をしに行くところだったのです」

「提案？」

怪しむネネルを無視し、ソールハロッショウは続けた。

「魔物の根源であるテリュス山脈を訪れ、出現場所の確定をし、そこを魔力により封じるというものです」

「上手く行くかどうかは分かりませんが、それが一番手っ取り早いですわ」

と、姫。

確かに、それが出来るならそつした方が良いだろ？。しかし、それは一体誰が行つて誰がやると言うのだろう？

疑問ではあつたが、まだ決まつたわけではないので尋ねようとはしなかつた。

「陛下との話し合いが終わり次第、報告をせいでいただきますから、マリアド嬢は部屋でゆっくりしてらしてください」

と、ソールハロッシュは頭を下げた。

その隣で姫がまた言つ。

「」希望でしたら、このフィアンシーナが直接話し相手になりますわ

さすがにそれは遠慮したかつた。

「あ、ありがとうございます。おい、ネネル」

と、姫の視線を無視してネネルの名を呼んだ。

「それでは、私たちはこれで」

空気を読んだネネルが一人に恭しく頭を下げ、俺の腕を引いて歩き出す。

そうして姫たちと別れると、俺は尋ねた。

「あの二人、仲良いのか？」

すっかり機嫌を悪くしたネネルは言つ。

「従兄弟なだけよ」

「ああ、なるほど」

そういうえばそうだつた。何となく雰囲気が似ているし、髪の色や変人なところなんかも共通している。

しかしふいに、俺は心配になつた。この国の将来が彼女たちにかかるつているわけだが、それって大丈夫なのか？ 王家の血筋だからとか、そんな理由で一人が一般人と違うようには思えないぞ。言つてしまえば、どちらもただの変人だ。

「あー、まあいいや」

と、俺は独り言を呟いた。

2 犬を守るために

しかし、どんなに待ってもソールハロッショは俺の部屋に現われなかつた。

あの提案が却下されたのかと思つて、夜になる頃には諦めていた。

翌朝、俺は窓外から送られる視線で目が覚めた。

「うわっ」

覗いているのは大きな鳥だ。昨日からずっと城の周りを飛んでいる魔物。

「……」

じつと見つめられ、俺は一度合わせた目がそらせなくなる。窓ガラスが割られることはないだろうけど、すっかり俺は恐怖していた。なるべく音を立てないよう、慎重に毛布をつかむ。そつと、そつと毛布に隠れるようにして視線を逸らした。

そして沈黙。

鳥が空へ羽ばたいていくまで、俺はずつと毛布の中でうずくまつていた。

魔物にはいろいろな種類がいるらしく、大きさも様々だ。しかし、あれほど大きな魔物と戦うには勇気が要る。少なくとも、俺一人では出来そうにない。

情けないことだが、そう思わずにはいられなかつた。

「おはようございます、マリアド様」

と、部屋へ入ってきたフュエリは、落ち込んでいる俺を見て首を傾げた。

「どうなされました？ もしや身体の調子が悪いとか

「いや……ちょっとびびつただけだ」

気分転換に深呼吸をして、顔を上げた。

ベッドからそつと降りてフュエリの顔を見る。

「おはよう、フューリー」

「あ、はい」

と、俺を心配そうな顔で見る俺のメイド。

さすがに、さつきまでの俺は俺らしくなかったようだ。でも、広い部屋に一人きりで、あんなでかい鳥に見つめられるのは恐怖だ。食われるかと思った。

無意識に溜め息をついてしまつと、クローゼットを開けていたフューリーが振り返つた。

「どうやら、お疲れのようですね」

「ん、うん……」

彼から視線を逸らしつつ、椅子へ腰かける。

「魔物たちに動搖させられているのは皆同じです。あまり気になさらない方が良いと思いますよ」

「うん……分かってる」

俺一人が怖い思いをしているわけではなく、魔物に襲われて怪我をしている人だってたくさんいるのだ。

「それにマリアド様には救世主としての力が備わってあります。もつと堂々としてくださいないと」

そういうて彼は微笑んだ。

そう、フューリーの言う通りだ。俺はこの世界で一番強いし、世界を救える力がある。そんな俺が魔物に怯えてどうするんだ。

……よし、頑張ろつ。

朝食が済む頃にはだいぶ気持ちも落ち着いて、いつもの調子が戻つてきた。

そしてまた、いつものようにやって来たネネルへ言つ。

「おはよう、ネネル」

しかし、小さな魔術士は挨拶を返さなかつた。

「行くわよ」

「は？」

俺を無視して腕を引っ張るネネル。彼女がいつもと違つロープを着ていることから、何かあつたことが分かる。

相変わらず抵抗を許さないネネルに引かれ、俺は部屋を出た。そして、初めて聖堂へ行つた時のように、足早に廊下を行く。

「どうしたんだよ、何かあつたのか？」

「未明に騎士たちが大勢運び込まれたの。昨日と比べて魔物たちが勢力を増してきている」

「はあ！？」

やばい事態にならうとしていた、否、なりかけている。

「国王は今朝、富廷魔術士たちに国内を回らせることを決断したわ」

「やつぱり

のんびり食後の紅茶なんて楽しんでいる場合じゃなかつた。無性に苛立ちを覚えながら、俺は少し足を速めた。

深刻な顔をして、国王は俺の到着を待つていた。

「マリアド様を連れて参りました」

と、ひざまづくネネル。

「ご苦労であつた」

国王は玉座を降りると、俺へ歩み寄つてきた。

「事情は聞きましたかな？」

「はい、おおまかにではありますが

「そうですか」

国王が右を向き、俺もそちらに目を向ける。

そこに並んでいたのは、紋章の入つた紺色のロープをまとつた人々だつた。玉座に最も近いところにソールハロッショがいて、数人後ろにネネルが並ぶ。

「彼ら宮廷魔術士を、こちらの定めた地域へ派遣します。もちろん、この国は広いのでそう簡単に終わりはしません」

その彼ら一人一人の顔を、国王は愛おしそうに見つめる。

「他国にも、魔法を使って民を守るようにと伝達しました。しかし、

それも上手く行くかどうか。そこでマリアド殿に頼みがあるのです

真剣なまなざしを俺へ向け、王は言った。

「テリュス山脈へ行つて、魔物の根源を封じてきてくださいませんか？」

「……え？」

目を丸くして、無意識に苦笑いをしてしまつ。

「俺が、ですか？」

「ええ、神の使者であるあなたこそ適任です」

ソールハロッショの提案は見事に受け入れられた様子だが、まさか俺がそれをやるはめになるなんて！

「もちろん、お一人で行かせるわけにはいきません。魔術に最も詳しいソールハロッショをお供させます」

うわ。

「世話役としてメイドにはフュエリを。そしてマリアド殿に何がかつては困りますから、お好きな騎士を一人、お選びください」

「いや、あの、ちょっと待つて。ネネルは？」

国王が答える前に、ネネルが口を開く。

「今回は残念ながら、それぞれに任された地域があるので。私は民を守るために北へ行かなければなりません」

「う、嘘だろ？」

ソールハロッショと一緒に嫌だ！

しかし、国王はそんな俺の気持ちも知らずに説明をしてくれた。

「慣れ親しんだ者と離れるのは辛いでしょう。ですが、これも効率を考えのことなのです。テリュス山脈のある山岳地域にソールハロッショが防御結界を張りながら、マリアド殿の供をし、魔物の根源を封じる、という計画になつております

にこつとソールハロッショが俺へ微笑んだ。

やばい、絶対に俺、あのでかい鳥よりも先にあいつに食われる！ 危険だ、いくら何でもこの計画は俺にとつて危険すぎる！！

パニック状態の脳内を冷静な俺が制止して、俺は国王へ聞き返す。

「世話役にメイドのフューリを？」

「ええ」

「騎士は、好きな奴を選んで良いって？」

「もちろんです。とはいって、この城にいる騎士はどれも僕を負っている者ばかりですので、選ぶほどのこともないでしょうが」
「どうしよう。だって、俺の知ってる女騎士は、ヴェルシしかいないぞ。いや、ゼーシュもそうだが見た目が……男四人で、行くのか？」
「ソールハロッショからしたら、俺紅一点だぞ？」襲われるぞ？
「……わ、分かりました。それで、出発はいつですか？」

「何かしら対策を練つて無事に城へ戻つてこよう。一番いいのは、ネネルがいてくれることなのだが、しょうがない。」

「明日の明朝です。交通手段は、ひづりで手配いたします」
「そうですか」

「ああ、先が思いやられる。」

「装備品や荷物に関しては、ご希望に添つたものを用意させますので何なりと仰つてください」

「ええ、分かりました」

「それでは、よろしく頼みますぞ」

「と、国王が俺に頭を下げた。」

「すっかり嫌な気分だつたけれど、俺は顔に出でなこみつにして返事をした。」

「はー……！」

「ああ、どうしよう。マジで俺、どうしよう。」

部屋へ戻る前に、ネネルの案内で医務室へ向かった。

運び込まれた騎士たちが治療を受けていたり、休養を取つているのだという。その中から良さそうな人を一人選ぶわけだが……。

「……なあ、ネネル」

「何よ」

医務室は血の臭いでいっぱいだった。身体中に包帯を巻いた者や、

ベッドで呻き声を上げている者など、どう見ても尋常ではない。

「ヴェルシは？」

ネネルは周囲を見回すと、俺の袖を引っ張った。

それから並んだ椅子のひとつにヴェルシの姿を見つけ、その前で立ち止まる。

「あの第一隊長が怪我するなんて、予想外もいいところね」
俯いていたヴェルシがはっと顔を上げた。

「ネネル、マリアド……自分で情けなく思うよ。ちょっと子どもを庇つた隙にやられるなんて、な」

と、力なく笑う。

ヴェルシの左脚には包帯がぐるぐると巻かれていた。噛みつかれたのだろうか、ところどころに血がにじんで見える。しかも怪我はそれだけではないらしく、右ふくらはぎにも包帯が巻かれていた。

「あんたらしいわね。けど、それだと戦線復帰は難しそうね……」

「ああ、両足をやられたからな。まともに歩けるまで、仕事はお預けだ」

お供にしようと思つていたのに、あつせいとそれは破られた。歩けないヴェルシを連れて行くなんて、無理だ。

他の騎士たちも皆、彼女のように意氣消沈している様子だった。

「あたしたちね、旅へ出ることになつたの

「旅？」

「ええ、魔物の被害から守るために、各市町村に防御結界を張つて回るの。マリアドはテリュス山脈へ行つて、魔物の根源を突き止め、封じてくるわ」

と、ネネルが俺を見た。先ほどから何も言えずにいる俺を気遣つてくれたらしい。

「そ、そなんだ。俺の力じゃないと出来ないからつて、国王に言われてさ」

ヴェルシはにこっと微笑んだ。

「そうか。山脈近くには手強い魔物が多いと聞く。気をつけていけ、

「マリア、アーヴィング

「……ああ

俺もこいつと笑みを返す。

すると、ネネルがきょろきょろと周囲を見回した。

「それで、マリアドがお供に連れて行ける騎士を探してこむるといふ

なんだけど

ヴェルシも周囲を見回して、ふと俺の顔を見た。

「ゼーシュには会つたか？」

「いや、まだ会つてないけど

「それなら、ゼひあいつを連れて行つてくれ

ネネルが俺の脇腹を肘で突いた。どうやら、彼女はまだ俺とゼーシュの間を誤解しているらしい。

無視して俺は聞き返す。

「いいけど、何で？」

ヴェルシは言いにくそうに苦笑いをした。

「何故だか分からんが、魔物に懐かれてしまったようなんだ

「そのせいで、どこにも居場所がなくてな……人々は魔物を見ると、それだけで怯えてしまう」

と、憂鬱な溜め息をつく、ヴェルシ。

確かに、魔物イコール怖いという図式が、俺含む大勢の人々の中に、無意識に出来上がってしまっている。しかし、ゼーシュに懷いている魔物が悪い奴でないのなら、それを理由もなく怖がるのは可哀相だ。

「そうか、分かった。ぜひそうさせてもらひつよ」

と、俺は言うと、ネナルを置いて歩き出した。きっとゼーシュは、人気のない場所にいるはずだ。

予想は当たつていた。

城の裏にあたる庭の隅で、ゼーシュは座り込んでいた。その隣には小さな魔物らしき動物の姿。

「見つけたぞ、ゼーシュ」

声をかけると、はつとしたようにゼーシュが顔を上げた。

「マリアドさん……」

彼女の前にしゃがみこみ、俺はこぢらを睨んでいる魔物を観察する。

「そいつが、お前に懐いた魔物か」

「あ、はい……そうです」

と、そいつの頭を優しく撫でるゼーシュ。

子犬より少し大きいくらいのそいつは、言葉で例えるなら馬だった。黒々とした毛に覆われた身体は引き締まり、四本の脚はたくましい。耳はうさぎのように長く、ぴんとして、頭に生えた毛だけが灰色だ。

「もしかして、子どもか？」

ぱちくつと瞬きをする田は青く丸く、じつと見てこぬと黙りこく思ってきた。

「いえ……」れども、成獣です」

と、ゼーシュは答えた。それにしては小さな魔物だ。

そつと俺が腕を伸ばすと、そいつががばつと大きく口を開けた。

「おつと」

危うく噛みつかれそうになつて腕を引っ込めゐ。

ゼーシュは笑うと、そいつへ語りかけた。

「駄目でしょ、二ゲル。この人は悪い人じやないよ」

早くも魔物に名前を付けたようだ。ところことは、ゼーシュも懐かれて困つてゐるわけではないのか。

二ゲルは伺うようにゼーシュを見ていたが、やがて小さく鳴いた。

「きゅうう」

一步前へ出て、俺の方へ頭を突き出す。

「分かつてくれたみたいですね」

と、ゼーシュ。

おそるおそる手を伸ばし、その頭を軽く撫でた。ふわふわだ。

「よろしくな、二ゲル」

「きゅうう」

なかなか賢いやつだ。思つたよりも魔物つて、すこし生き物なのがもしけない。

二ゲルがゼーシュの元へ戻り、その膝にすりよつた。彼女もその頭や背中を撫で、互いに嬉しそうにしてゐる。

俺はその場に腰を下ろしてあぐらをかくと、本題を切り出した。

「ところでゼーシュ、お前はまだ戦えるのか？」

顔を上げたゼーシュが頷く。

「はい。僕も怪我はしましたけど、軽傷でしたから」

その手は二ゲルをしっかりと抱きしめていた。

「どうか。じゃあ、俺と一緒に来ないか？ テリュス山脈へ行つて

魔物の出現場所を見つけ、封じるんだ」

「……僕、ですか？」

「ああ、ヴォルシに話したら、お前を連れて行つてほしいうて言わ
れでさ」「

にじつと俺が笑うと、彼女はニゲルを見つめた。

考える様子でじつと口を閉じ、しばらくしてから顔を上げる。

「そうですね、僕もニゲルのおかげで仕事に戻れないですし……マ

リアドさんの、頼みなら

と、笑つてくれた。

よし、これで決まりだ。

「出発は明日の明朝、お前は俺の護衛騎士つてところだな」
口に出してからはつとした。

「ああ、ニゲルも……番犬的な？」

「番犬よりも頼もしいと思いますよ

と、ゼーシュが笑う。

だから俺も、つられて笑つた。

昼食後、フュエリがてきぱきと荷物をまとめているのを見て、俺
は立ち上がった。

「ちょっと行つてくるから、あとは頼んだ」

「かしこまりました……つて、どちらへ！？」

「すぐ帰つてくるよ」

と、俺は無視して部屋を出る。

今日中に会つておきたい人がいた。ジャスナだ。

彼女には世話になつてゐるし、これからしばらく会えないのだから、会いに行くのは当然のことだろう。

階段を下りていくと、後ろから誰かが俺を呼んだ。

「マリアド嬢！」

ソールハロツシュだ。

聞こえなかつたふりをして聖堂の方へ足を向けると、彼がぱつと
俺の前に立ちふさがつた。

「マリアド嬢、無視するなんてひどいですよ」

「え、いや……悪い」

見抜かれていたようだ。俺が素直に謝ると、ソールハロッショウは笑つた。

「そんなことより、あなたに話があるのです。お時間、よろしいでしょうか？」

「一人きりで話をするのは」「めんどった。

「悪い、急いでるんだ」

と、俺があからさまに彼を避けて歩き出ると、魔術士が言った。

「超高度魔法のことです」

ぴたつと足が止まつた。意識していないのに、俺は彼へ顔を向けてしまひ。

満足そうにやつと笑つて、ソールハロッショウは俺を外へ連れ出した。

「この前お話しした光属性の痕跡ですが、テリュス山脈にそれはあります」

「へえ……」

魔物の出現で騒々しくしている城外を、彼と並んで散歩する。

「遺跡があるんですよ、そこには。そこへ行ければ、きっと光属性について何か得られる物があるはずです」

「なるほど……つまり、本当の狙いはそれだと?」

と、俺が睨むと、ソールハロッショウはにっこり頷いた。

「その通りです。ですがマリアド嬢、よく分かっていらっしゃる言葉がいちいちムカつく。これから長いといつのに、そんな風に喋られては我慢も限界だ。

「悪いんだけど、ソル? もつと普通に喋ってくれねえかな

「え、普通ですか?」

と、首を傾げるソールハロッショウ。

「名前も呼び捨てでいいからさ、とにかく普通にして」

「そうですか……ようやくオレに、心を開いてくれたわけですね

と、嬉しそうに微笑む彼に、突つ込まずにはいられなかつた。

「違えよ！」

するとソールハロッショはちょっと驚いた顔をして、すぐに話へ戻つた。

「まあ、いいでしよう。それで……話の続きだけど、光の痕跡を確かめられれば、あとはマリアド、あなたがそれを使えるかどうか、試すだけだ」

「やっぱ俺なんか」

「もちろん。あなたは神の使者。オレの考えが正しければ、この世で光属性を使えるのはあなただけなんだ」

少しば話しやすくなつたけれど、どうもムカつく。

「分かるだろ？　マリアド。この提案を国王にしたのも、全てこのためだ。全ては超高度魔法を復活させるため！」

と、力む変態魔術士。

結局、俺は彼の策略にまんまとはまつたわけだ。国王もだけど。「で？」

「話はそれだけか？」

と、俺は溜め息をついて見せた。

ソールハロッショははつとして、俺の前へ立つ。

「このことについては内密にしておきたいのだけれど、どの騎士を連れて行くつもりだい？」

「ゼー・シユだ」

「……それは、どこの誰かな？」

と、ソールハロッショ。

俺はぶつきらぼつに言つた。

「ヴェルシに付いてる見習い騎士だ」

「ああ、彼女の……その子は、秘密を守れるのかい？」

答えに詰まつた。それは分からぬ。分からぬが、俺は言つ。

「信頼は出来るやつだ。少なくとも、裏切りはしないぞ」

安心した様子でソールハロッショが息をつく。

「それなら良いんだ。本当は、オレとマリアドだけの秘密にしてお

きたいところなんだけどね

「つづーか、メイドのフューリーはまだいるつもりだよ？」

「ああ、それならすでに了解を得ているから心配しないで」

「ここにこと笑う美青年……可哀相なフューリー、お前はきっとこの顔に騙されたんだな。

息をついて、さつと歩き出す。

「じゃあ、また明日な」

「え、待つてマリアド、まだ話したいことが

つー」

彼を無視して俺は聖堂へ向かった。

本来の目的はそっちなのだ。それに、早くしないと日が暮れてしまう……まったく、これからソールハロッショの相手はしたくな

い。

ジャスナは聖堂の前で子どもたちに取り囲まれていた。近くへ寄りながら声をかける。

「ジャスナ！」

顔を上げた彼女は、すぐににこっと笑みを浮かべ立ち上がった。「マリアド様！ お久しぶりです」

「うん、久しぶり」

と、彼女の前で立ち止まれば、子どもたちの視線が俺を見る。どうしようか迷つていると、ジャスナが彼らへ言つた。

「今日はこれでおしまいです。みなさん、気をつけでお家に帰つて下さいね」

「はーい」

と、散り散りになつていく子どもたち。

その様子を何気なく見ていたら、ジャスナが呟いた。「いつもなら、倍以上の子たちが集まるんですよ」

魔物の影響はこんなところにも現われていたようだ。ようやく場が静まったところで、俺は口を開いた。「ちょっと話があるんだ。時間とか、平気かな？」

「ええ、大丈夫です」

その返答に満足し、俺は近くの尻の高さにあつた壙に腰を下ろした。

「もしかしたら、もう誰かから聞いたかもしけないけど……俺、明日から旅に出るんだ」

ジャスナは隣で俺の話を聞いていた。

「テリュス山脈に行つて、魔物の根源を封じてくるんだって

「そうでしたか……どうかお気をつけて、マリアド様

と、彼女が心配そうに俺を見る。

俺は笑つた。

「大丈夫だよ、ジャスナ。宫廷魔術士のソールハロッショウに騎士見習いのゼーシュも一緒にから」

ジャスナはにこっと口だけで笑つた。

何か、嫌な予感でも感じているのだろうか……ふとそんなことを考えたけど、それが本当だつたら嫌なのでやめる。

「それと、超高度魔法のことだけ……どうやら、テリュス山脈にそのヒントがあるらしいんだ」

「そうなんですか」

「ああ。だから、そのためにも俺は行つてくるよ」
ぎゅっと手にした本を両腕で抱えるジャスナ。

「でも正直、俺、城下町の外に出たことつて無いから、ちょっと不安なんだよな」

自嘲するように苦笑いをする俺。

彼女がふと俺の隣へ腰を下ろし、本を脇に置いた。

「私もマリアド様の立場なら、同じことを思つと 思います」

「……うん」

彼女は本当に優しい人だ。巫女だからとか、そんなことだけではなく、心からそうなんだと思える。

「私には何も出来ませんが、毎日、マリアド様のご無事を祈つていますね」

「うん、それだけでも充分にありがたいよ」

そんな彼女に何か返したくて、俺はまた笑顔を作つた。

「いえ、そんな……私には、それしか出来ませんから」

と、ジャスナは俯いた。両足を少しうらつかせて、正面で揃える。

「あ、あの……」

「何?」

ちらちらっと俺の顔を見て、ジャスナは立ち上がつた。

それから一步近づき、真つ直ぐに俺を見る。

「子ども騙しですけど、マリアド様が無事に戻られますように……と、俺の右手をとり、甲にそつと口づけた。それから何か呪文の

ような言葉を囁く。

「ルクス、ロレムクアンタム、シグニフィシャント、アリウス」

「……」

彼女が手を放す。

それが何のおまじないかは分からなかつた。

俺は半ば呆然としながら、ジャスナへ感謝を述べた。

「ありがとう、ジャスナ」

それにして、子ども騙しと彼女は言つたが、ジャスナがやると効果がありそうに思えるから不思議だ。

「いえ、大したことじゃないので気にならないで下さい」

そうして彼女は本を手に取ると、俺へ頭を下げた。

「それでは、そろそろ仕事に戻りますね。どうかご無事で」

「ああ、本当にありがとな」

嬉しそうに彼女が聖堂の扉を開けて、中へと消えていく。それを俺は、しばらく見送つていた。

「はい、これ

と、ネネルに差し出されたのは、おなじみの白いロープ。

「……着ろつて？」

「もちろんよ。必要最低限の魔法しか使っちゃ駄目つて言つても、道中何が起こるか分からぬでしょ」

仕方なく受け取つて羽織る俺。相変わらず、ずしつと来る重さだ。

「それと……ちょっと気になるんだけど」

と、ネネルが俺の様子をうかがうようになる。

「何？」

聞き返す俺だが、あまりにも眠くて欠伸が出た。

「あんた、その格好で良いの？」

「……え？」

睡魔と戦いながらベッドを出て、朝から元気なフュエリに無理矢理着替えさせられたのだが……ふと、鏡に映つた自分を見て彼女の

意図を察した。

「……うわ」

裾にレースのあしらわれた薄桃色のワンピース姿だった。丈は長めで、胸元がやけに空いている。

どうしたものかと思って、とりあえずフューリを探した。

「おい、フューリー」

「荷物運びに出てつたわよ」

おかしいな。ここには睡魔をどうにかして吹き飛ばし、頭を覚まさなければ。

首を振つて姿勢を正し、両腕を上へ上げて伸びをした。

「どおりで脚がすーすーすると思つた」

クローゼットへ向かい、中から普段履いているズボンを探す。すっかり俺が女扱いされているのに納得は行かなかつたが、出発までもう時間がないのだ。

見つけた白いズボンにすぐさま脚を通した。

「うん、これで……良くないか」

ワンピースのスカートが邪魔だ。

別にこのままでも悪くはないのだが、やはり動きやすくしたい。俺が一人で考え込んでいると、ネネルが近づいてきて俺のスカートをめくつた。

「切つちゃえ、ばいいじゃない。どうせ、また姫の趣味でしょう」

「ああ、その手があつたか」

と、周囲を見回すが、はさみもナイフも見当たらなかつた。そういえば昨日の夜、フューリーがあらゆる道具を鞄に詰め込んでいたな。めんべくさいから、正面の部分を手にとつて両手で引き裂いてみた。

「おはよ〜♪やこます、マリアド嬢」

と、変わらず笑顔で俺を迎えるソールハロッショ。しかし、すぐにその視線は下へ下がつた。

「……これは一体？」

「気にするな」

と、即答する。

「どうやら、マリアド様のお気に召さなかつたようだ」後ろでフュエリが申し訳なさそうにしていた。自份的には気に入つてゐるのだが、彼らからしたらひどい出来らしい。

スカート部分を引き裂いて前を開け、長くてつざつしたい丈をベルトで締めることで膝上まで上げただけだ。中にはズボンを履いているだけで、あとは白いローブ。

「こつちのが動きやすいんだから良いだ」

と、俺は一人に言い残して馬車へ向かつた。

「おはよ、ゼーシュ」

馬車のすぐそばでは軽装備をしたゼーシュが待つていた。

「おはよう」さこます

彼女の腰には少し大きめの剣が携えられている。

「きゅう」

と、鳴くのは彼女の足元をつらつらしていたニゲルだ。

「ニゲルも、おはよ」

しゃがみこんで頭を撫でてやると、ニゲルはまた嬉しそうに鳴いた。

これで準備は整つたはずなのだが……立ち上がりつて後ろを振り返ると、ソールハロッショとフュエリが微妙な顔をしていた。

「何してんだよ、お前ら」

声をかけると、はつとした様子でフュエリがしおりへ歩き出す。

「申し訳ありません、まさか……その……」

と、ゼーシュの足元をちらちらと見やる。どうやら、ニゲルが怖いらしい。

仕方のないことだけれど、慣れてもううじかない。

「大丈夫だよ、悪い魔物じゃないから」

と、俺はニゲルを抱き上げてフュエリに差し出した。

「……きゅ？」

「ひやあつ」

ちょっと鳴いただけなのにびっくりするフュエリ。呆れて、俺はようやくこちらへ来たソールハロッシュにも同じことをしてみた。

「ほら、可愛いだろ？」

「……う、うん、そうだね」

と、苦い顔で微笑むソールハロッシュ。
まったく、二人ともしようがないやつだ。

ニゲルをゼーシュに返して馬車へ乗り込む。

「気をつけなさいよ、マリアド！」

と、一足先に駆け出した馬車の窓から、ネネルがそう声をかけるのが見えた。

「お前もな！」

と、俺は手を振り返し、ようやく馬車の中へ入った。
ゼーシュとニゲルが後に続いて乗り込み、俺の隣へ座る。その様子を見ていたソールハロッシュが俺の正面、フュエリはその隣だ。
そして、フュエリが御者に声をかけると、馬が走り始めた。

「きゅう、きゅう！」

どう見ても気まずい空氣の中、二ゲルだけが上機嫌に鳴いている。フュエリはずっと隅に寄つて縮こまつているし、ソールハロッシュも二ゲルと目を合わせようとしてない。

退屈に耐えかねて俺が二ゲルの頭や背を撫で始めると、状況がちよつと変わった。

「なあ、その魔物のことなんだけ……」

と、ソールハロッシュが口を開いたのだ。

ゼーシュが顔を上げ、俺は彼へ聞き返した。

「二ゲルがどうしたって？」

「うん……その、どうして騎士見習いが魔物といいるんだい？」

ゼーシュは二ゲルを守るように抱きかかえ、答えた。

「何故か懐かれてしまったのです。人に危害は加えませんし、野性に返したら殺されてしまうでしょう？」

「……ああ、なるほど？ でも、それはやはり魔物だし」

と、二ゲルを見るソールハロッシュ。未だに抵抗があるようだ。

その内に慣れてくれるだらうとは思うが、二ゲルとゼーシュのことを思うと溜め息をつきたくなつた。

「ちよつと貸して」

と、俺はゼーシュから二ゲルを取り上げ、膝の上へ載せた。

「きゅうー？」

小首を傾げて俺を見上げる二ゲル。魔物は魔物でも、ペットとして飼うのに何ら問題のない可愛い奴だ。

俺にはすっかり懐いた様子だから、あの一人に懐くのも時間の問題だらう。

「で、最初はどこへ向かうんだ？」

と、俺はソールハロッショウを見た。

「ああ、とりあえず西へ……確実にオリア地方には入りたいところだ」

フュエリが「じき」と鞄から地図を取り出し、広げて見せた。

「オリア地方というと、この辺りですね」

城から少し西へ行つた先に荒野があり、そこを抜けた先に街がある。

膝の上で丸くなつたニゲルを撫でながら、俺は言った。

「そこに着いたら、どうするんだ？」

ソールハロッショウが微妙な表情を浮かべる。

「昨日話すつもりだつたんだけれど……オレの担当は、オリア地方からテリュス山脈のあるホルデウム地方までの、合計百一十七の村や町なんだ」

「うわ、そんなに？」

思わず嫌な顔をしてしまうと、魔術士に笑われた。

「ははっ、これでも少ない方だよ。とはいって、その全てを回るのは無理だから、いくつかの範囲に分けて防御結界を張つていく予定だ」

ムツとしたので、ニゲルを抱き上げて彼を睨む。

すると、怯えた様子をわずかに見せたくらいで、ソールハロッショウは俺に問つた。

「マリアド、防御結界がどんなものかは知つていいのかい？」

「魔方陣を端と端に置いて、その中にある全ての物を外敵から守る」「そうだ。つまり、オレの仕事はその魔方陣を、あらかじめ決めておいた場所に描いていくことだ」

そう聞くと簡単そうに思えるが、実際はどうだろ？

ふいに、ソールハロッショウはフュエリの地図を描さした。

「まずは起点となる魔方陣を、オリアのメタルムという街に描き、その後は少し南下してクブルムへ向かう」

地図で見ると近いように思えたが、その間には森があつて一本道とこつわけにも行かなさそうだった。

「その後は、出来たらそのまま南下して隣の村へ行きたいが、無理なら明日だな」

「ふうん……分かった、ありがとう」

と、俺は話をやめさせた。予定は飽くまでも予定なのだから、今からどうこう言つたつて無駄だ。それに、俺は彼らに付いて行くだけ平気そうだ。

俺がニゲルおよびゼーシュと遊んでいた間に、馬車は荒野へと突入していた。

がたがたと馬車が揺れ、時折魔物らしき姿が窓外に映る。そのたびにソールハロッショウは警戒し、ゼーシュはいつでも剣を抜けるよう構えていた。

一方のフュエリは退屈そうにしていたかと思つと、いつの間にか両目を閉じて眠つてしまつていて。誰もそれをとがめないから良かつたが、それではメイド失格だ。

……まあ、昨日からよく働いてたもんな。ちょっとくらい許してやるや。

最初の目的地に着く頃には、とつてに倒になつていた。

「腹減った」

「その前に仕事をしなければ。すぐに終わらせるから待つてくれ」馬車から降りたソールハロッショウは、周囲の様子を確認した。そして鞆から白い石を取り出して、今度は地面上に石を落とす。その様子を見て、ゼーシュが馬車を降りて護衛に回る。

「おや、そんなことしてくれなくとも良いのに……」

「念のためです」

「どうか、悪いね」

何となくではあるが、彼らが互いに心を開いていないのだと思つた。

しゃがみこんだソールハロッショウが石を使って線を描き始めると、

その背を守るようにゼーシュが立つ。

ぐるっと描かれた円は大きく、その中にも書き込んでいくソールハロッショ。

窓から顔と手を出して眺める。これはなかなか時間が掛かりそうだ。

数分前に目覚めたフュエリは何やら財布を取り出して、御者とこれからのこと話をしていた。

「……よし」

と、立ち上がるソールハロッショ。

魔方陣の中心へ移動して、今度は別の石を取り出した。杖によく付いている球状の水晶だ。

それを手に、彼が何事か呟いた。よく聞こえなかつたが、防御境界の呪文だ。

すると、魔方陣が一瞬だけ緑色に発光した。ぶわっと吹きすぎぶ風に目を見張ると、魔方陣が正常に機能を始めたらしいと分かる。

「さあ、これで終わりだ。早く街へ行つて昼食にしよう」

と、俺へにっこり笑いかけてくる。

「……あ、ああ」

やはりこの旅は危険だ。彼とだけは一入きりにならないよう、気をつけよう。

溜め息で誤魔化しつつ、俺は席に座り直した。

「ホルデウム地方と言いましたが、それは、その、ホルデウム全てということですよね？」

「ああ、そうだが……何か？」

「いえ、別に何でもないんです。ありがとうございます」

早口にそう言つて、ゼーシュはソーダ水のグラスに口を付けた。街の中に魔物を連れて歩くのは良くないと判断した彼女は、二ゲルを馬車に置いてきていた。

「あの、私からもお尋ねしてよろしこうか？」

と、フュエリ。

「ああ、どうぞ」「

ソールハロッショは質問されるのが嫌なのか、うんざり顔だ。

「ホルテウム地方は国内で最も広い地方ですが、どのようご回りされる予定でしょうか？」

ちらりと俺の顔を見て、宫廷魔術士は答えを返す。

「まずフルクトウスへ行き、そこからヘルバ、フニス、その後にテリュス山脈へ行く予定だが、それはヌーベス村から入るのと思つていいよ」

ゼーシュがちらりと彼の口元を見た。しかし何か言つことはせず、黙々と食事を続ける。

フュエリは聞いた答えを紙にメモすると、頭を下げた。

「ありがとうございます、公爵」

「普通に名前で呼んでくれ、どうせ長い旅になる」と、どこか機嫌悪く言つソールハロッショ。どうやらお疲れの様子だ。

フュエリはぱっと顔を明るくさせると、言つ直した。

「かしこまりました。ありがとうございます、ソールハロッショ様」お近づきになれたことがよほど嬉しいのか、それからのフュエリは元気だった……クブルムの宿へ着くまでは。

俺たち四人の関係に難があるのは分かつてはいたつもりだが、甘かつた。

「マリアド様、どちらのベッドでお休みになられますか?」

「俺は端が良いな」

並んだベッドの内、俺は壁際のベッドを指さしたはずだった。
「僕は護衛騎士ですので、マリアドさんの隣が良いかと」
「富廷魔術士のオレはマリアドの隣にいた方が良いだろ?」
「ほぼ同時に口走るゼーシュとソールハロッショ。

「俺、端が良いんだけど」

今度は二人の顔を見て言つが、ゼーシュとソールハロッショはそれとなく睨み合つて俺を見ていなかつた。

「えつと、どうしましよう……か?」

空気の不味さにフュエリが気を落とし始める。ただでさえ、憧れの公爵は俺に下心があるだけに、落ち込むのもしょうがなかつた。

「だから俺、このベッドで」

「じゃあ、こうしよう。君があつちで、オレはこつちだ

と、勝手に決めるソールハロッショ。

「分かりました、それで良いでしょ?」
と、何故か納得するゼーシュ。

「……」

呆然とする俺に構わず、二人はそれぞれの決められたベッドへ荷物を下ろし始めてしまつ。

フュエリを見やると、彼は苦笑していた。

「明日からは、一人部屋を用意させていただきますね」

「うん、頼んだ」

仕方なく、俺は二人の間にあるベッドへ歩み寄つた。

フュエリがソールハロッショの隣のベッドへ行き、てきぱきと荷

ほどきを始める。

「ニゲル、部屋から出ちゃ駄目だからね」と、鞄に隠していたニゲルを枕元へ置くゼーシュ。ニゲルは「きゅつ」と、鳴いて、彼女に答えていた。

その様子を横目に見るのはソールハロッシュ。どうも、二人は相性が合わないらしい。いや、ソールハロッシュと相性の良い人がどういう人物か、知りたいくらいだけれど。

空氣を変えたくて、俺はフュエリへ声をかけた。

「なあ、風呂つてどうなつて

「ありませんよ

すぱつと即答されてしまった。

「宿の主人によりますと、裏に小川が流れているので、そちらの方で身体を洗ってくれということです

「……そうか

残念だ。でも、よく考えるとそうだよな。ここは小さな街の宿で、城とはわけが違う。今までの俺の生活が普通じゃなかつたのだ。一つ息をついて、とりあえずロープを脱いだ。心なしか、肩がだるい。

「明日はもう少し発展した街へ泊まるから、大丈夫だと思つよ」と、ソールハロッシュが口を開いたが、俺はあまり嬉しく思えなかつた。

さすがにその夜は何もなかつたけれど、立場的に一人に挟まれた俺がゆつくり休めるはずもなく。

「今朝、街の南外れで魔物が出たそうです。自警団が退治に当たりましたが、負傷者が多数出たとか

と、宿を出たところでフュエリが言った。

「それなら、警戒していかなきゃならないね

「その他情報は?」

「今のところ、それだけになります

三人の会話を右から左へ聞き流しながら、欠伸をする。

今日も白いローブを羽織った俺は、彼らに付いて行くだけで良い。

そして、馬車へ乗つて街の南へ。

今日は俺の隣にソールハロッショウが座っていた。ゼーシュはしぶしぶ俺の正面へ着いている。

「マリアド、眠たいならオレの肩にもたれてもいいよ」と、優しく微笑む。

俺は欠伸しながら断つた。

「いや、いい

魔物が出て大変なときに、俺だけ眠つてられるかつての。ましてや、変態魔術士の肩にもたれるなんて危険過ぎる。ゼーシュはニゲルに遅めの朝食を与えており、フュエリは相変わらず隅によつて距離を取つていた。

窓外の景色から人気が減り出すと、壊れた民家がふいに目に付く。「そうとう強力な魔物が出たらしいな」と、呟くソールハロッショウ。

まだ近くに魔物がいるかもしれない……姿勢を正して周囲の様子をうかがう。

草すら生えないむき出しの地面をしばらく進む。どこかで何かの鳴き声が聞こえ、一同がはつとした。

それぞれの武器を手に取るゼーシュとソールハロッショウ、フュエリは救急箱を膝に乗せて待機だ。

俺は自分の両手を見下ろした。これが俺の武器だけ、むやみに魔法を使つてはいけないとネネルに何度も注意された。

がたつと馬車が急停止、御者が慌てて馬を宥めるのとほぼ同時にソールハロッショウが外へ飛び出した。

「ウイリディス！」

と、前方を塞ぐ虎のよつな魔物へ風の魔法を放つ。いくつもの細かい風刃に押され、後ずさる魔物。

ゼーシュが後に続いて飛び出し、勢いよく剣を振りかざす。

「きゅきゅうつ」

何を思つたか、二ゲルまで馬車から出でてしまい、とつとこ俺は腕を伸ばしたが空振つた。主の元へ駆けていく二ゲルを追つて、仕方なく外へ出る。

「待て、二ゲル！」

「マリアド様！？」

と、背後からフュエリが叫ぶが、それよりも二ゲルを捕まえなければ。

魔物の前足をゼーシュが斬りつけ、ソールハロッショウが灼熱の炎でその身体に火を灯す。

地響きのような轟音で泣き喚く魔物、痛々しくもおぞましく、二ゲルがびくつとして足を止めた。

「捕まえたっ」

と、二ゲルを抱きあげると、魔物が身震いで炎をかき消した。そして 感じる視線。

「マリアド！」

魔物が俺に向かつて駆け出す。ソールハロッショウも駆け出す。ゼーシュが何か言おうとして、剣を持ち直して駆けてくる。

「え？」

足がすくんでいた。

「きゅうう！」

腕の中で二ゲルが暴れ、ソールハロッショウが叫ぶ。

「モンス・イグニフエル！」

俺の目の前が真つ暗になつて、思わず尻もちをついた。魔物がまた鳴き声を上げるのが分かる。

氣づくと、大きな岩の塊が溶岩と一緒に魔物の身体を焼いていた。そして俺の前に立つ、宫廷魔術士。

「早く馬車へ！」

杖で応戦する彼が、何故だかかっこよく思えた。

「う、うんっ」

慌てて立ち上がり、馬車へ向かう。フュエリが中から手を伸ばし、俺はそれを頼りに車内へ避難した。

そして窓外を見ると、ゼーシュが魔物の頭を切り落とすところだつた。どさつとその場に落ちる魔物の頭と身体……毒々しい色の血の海。

ああ、助かった。

ぎゅっとニゲルを抱きしめて、無意識に震える身体を落ち着かせようと努める。けれども落ち着くどころか、俺は恐怖の余韻から抜け出せずにいた。

今でも目を閉じると、あの魔物の視線が浮かんで怖くなる……。

「きゅうー……」

ペリペリと俺の頬を舐めるニゲル。

「マリアド」

「マリアドさん」

帰ってきた二人が俺を見て、顔を見合させたような気がした。フュエリがそっと俺の肩に手を置いて、優しい声で言つ。

「マリアド様、もう大丈夫ですよ」

「……うん」

たぶん俺は、ここへ来る前の世界では、こんなことを一度も経験しなかつたのだと思う。魔物も、恐い敵も、生々しい戦闘も、何も知らない平和な世界に生まれ育ち、死んだのだと思う。

「ごめん、みんな」

顔を上げて、ゼーシュへニゲルを返す。

元の位置に座り直すと、一人が中へ乗り込んできた。

そしてソールハロッショウがこいつと笑う。

「間に合って良かったよ」

「……うん」

彼がいなければ、俺は確実に攻撃を受けていただろう。

これまでの彼に対する見方を変えなければいけないと思った。

怪しいし変態だし、俺に気があつてゼーシュに嫉妬するような嫌

な奴、だけど、彼はやはり宮廷魔術士なのだ。その実力は確かに、信頼するに足りえる。

7 変わりだす状況

一つ目の防御結界を張り、その日はオリア地方で最も栄えた街に泊まった。風呂付の個室をフュエリが用意してくれて、ソールハロッショとゼーシュが時間差で部屋に来たけど、どちらも中に入れず、に朝を迎えた。変な誤解は招きたくなかったからだ。

その翌日は西北へ向かつて進み、本来ならのどかな田園地帯の広がる村に三つ目の防御結界を張った。そこから西へ進んだ町で一泊する頃には、ゼーシュとソールハロッショの仲も少しは良くなってきた。

四日目、ついにオリア地方最後の防御結界を張つて、ホルデウム地方へ。その間に五つ目の防御結界を張り、また先を日指した。

ホルデウム地方、最初の目的地であるフルクトウスで、それは待つていた。

「もしや、あなたが宫廷魔術士のソールハロッショ様で？」宿の前で馬車を降りると、飛脚と思しき男が声をかけてきた。

「ああ、そうだが」

と、ソールハロッショが返すと、男は一通の封筒を取り出し、彼へ手渡した。

「お手紙、ちゃんとお渡しましたぜ。それじゃ、これで」と、去つていく男。

宿でフュエリが受付を済ませている間に、ソールハロッショは受け取った手紙を開けていた。

「何かあつたらしいね」

と、俺へ聞こえるように囁つ。

封筒の裏には『ネネル』の文字が並んでいた。彼女からの手紙だ。

しかし、何があつたと言うのだろう？

受付を終えたフュエリが戻つてくると、ソールハロッショが深刻

な顔で口を開いた。

「どうやら、この世界へ来ているのは魔物だけではないみたいだ」「は？」

目を丸くする俺たちを順に見ていくソールハロッショ。

「一日ほど前に、ネネルが黒妖精らしき人物に出来わしたそつだ。惜しくも逃がしてしまったため、国内に散つてゐるオレたちへ連絡をよこした次第だと」

黒妖精に出会つたということは、戦闘になつたのだろうか？ 彼女は今、どうしているのだろう？ 怪我などはしていないのか？

不安に思う俺に、ソールハロッショが言う。

「ここには、彼女は無事だとある。一日でも早く仕事を終わらせて城へ帰ると書かれているよ」

それなら良かつた。いや、黒妖精が現われてゐるのなら状況は違つてくる。ましてや、ネネルはそいつに会つてゐるのだから、互いに顔も知つてゐるはず。

「オレたちも、出来るだけ早く済ませよ！」

「ええ、そうですね」

「はい、かしこまりました」

そのためにも、今夜はしつかり眠つて明日からに備えなければ。その思いはみんな同じはずなのだが、今夜も個室を取つてもうらつた俺の部屋に、いつものようにソールハロッショが訪ねてきた。

「中には入れないぞ」

と、警戒する俺に、ソールハロッショが苦笑を浮かべる。

「違うんだ、今夜はちょっと話をしたくて」

「何の話だよ？」

「これからのことね」

どうやら今夜は下心がない様子だ。

それなら良いかと、俺は扉を開けた。

「終わつたらすぐに戻れよ」

「そんなに警戒することないのに……まったく」

と、呆れたように笑うソールハロッショ。

俺は彼のために椅子を引いてやつてから、ベッドに腰を下ろした。

「で？」

「ああ、えつと」

椅子へ座つて、少しの間考え込む。

じーっと眺めていたら、顔を上げたソールハロッショと田が合つてしまつた。

「少し、予定を変えようと思うんだ。明日はヘルバに寄るつもりだつたが、それをやめて一気にフニスまで向かう」

と、ソールハロッショ。

「それで不都合はないのかよ？」

「なくはないけれど……オレたちは一刻も早く、テリュス山脈へ行くべきだと思わないかい？」

聞き返されて言葉に詰まる。

確かに、テリュス山脈から魔物が出てきているのであれば、黒妖精もきっとそこから来ているはずだ。ネネルからの情報を考えると、俺たちはそれを止めなければならない。

「だから、明日はフニスに一つ防御結界を張つて、夜までにヌーベスへ行くよ。そこで一泊し、翌朝に山へ入る」

「……そうだな」

と、無意識に俯く俺。

彼が小さく息をつき、「それから……」と、付け加える。

「ヌーベスから入るのは、途中まで馬車が使えるからだ。しかし、あの一帯に魔物が潜んでいる可能性は今までよりも高い」

「うん」

「だから、マリアドは何があつても馬車から出ないようにして欲しいんだ」

「……え？」

ソールハロッショが困ったように笑う。

「だって、この前のように襲われたら危険だろ？」

魔物退治は才

レたちに任せて、マリアドは自分の身の安全を優先してほしい」「そう、俺はいまだにこの旅で魔法を使つていなかつた。ネネルからの忠告もそうだが、いつだってゼーシュとソールハロッショウが俺を守つてくれてしまつ。

「……分かつた」

「……でも俺は、大事な時にしか人の役に立てない。この大変な時に、俺は城にいた頃と変わらず守られて、閉じこもるしかなかつた。

「それじゃあ、オレはこれで

と、立ち上がるソールハロッショウ。

彼が扉へ向かう途中、俺は思いきつて尋ねた。

「お前は、俺のことどう思つてるの？」

振り返つた彼は目を丸くしていた。

「答えるまで帰さないぜ」

「……マリアド」

理解しかねる様子で、ソールハロッショウはそろそろ立ち去り出した。

それから、ゆっくりと俺の方へ歩み寄つてくれる。

「とても大切な人だと思つていてよ

「どういう意味で？」

ぎこちなく俺の隣に腰を下ろして、彼が言つ。

「救世主としてはもちろん、それだけじゃなくて……分かるだろ？

？」

じつと俺を見つめる視線は真剣だつた。

応えるつもりはなかつたため、俺は言つ。

「じゃあ聞くが、フュエリのことはどう思つてる？」

「彼は……よく働くし、気の利くメイドだと思つよ

「あいつ、お前のこと好きなんだぜ？」

彼がまた困つたように笑つた。

「それは分かつてゐる。でも、今のオレにはマリアドしか見えない」

結局こいつは、俺に本氣で惚れているらしく。

「そりゃあ、少し前までなら、彼に付き合つたかもしれないけれど、

理想の人人が目の前に現われたら、そつはいかないだろ？

「は？」

横目に睨むと、彼がにっこり笑つた。

「オレの理想なんだよ、マリアドは」
意味が分からぬ。

「だつてほら、身体のバランスが、他の誰よりも素晴らしい整つて
いるじやないか」

「はあ？」

ますます意味が分からぬ。

ソールハロッショウは息をつくと、俺の身体を舐めまわすように見
た。

「足の先から頭の上まで、全てが理想通りなんだよ。普通、これだ
けの胸があれば下は小さいのに、そうじやない」

……そつち？

「まさにオレの求めた身体だ。君は完璧なんだよ、マリアド」
「……えーと」

嫌な予感がしたので横へずれると、勢い込んだソールハロッショウ
が俺を押し倒した。

「ちよ、やめ つ！」

抵抗する俺の両手を押さえつけて、彼が真面目な顔で言つ。
「君さえよければ、すぐにでもその身体を堪能させてほしい
やつぱりこいつは変態だ。

膝で彼の腹を蹴り、一瞬の隙を突いてベッドから抜け出した。

「ああ、マリアド ！」

「お前なんて嫌いだ！ 頼まれたつて惚れてやんねえ！！」

そのまま部屋を出て、俺はゼーシュの部屋へ逃げ込むのだった。

五日目ともなると、身体が旅に慣れてきて起床時間も自然と早くなる。

しかし俺は個室なので、起きても誰もいないし静かだった。
そんな中で服を着替え、靴を履き、荷物を整理し、白いローブを羽織る。

その後、誰よりも早く目覚めるフューリーが俺の部屋へ上がりてくるのが、この旅の日課だった。

「おはようございます、マリアド様」

「おはよう、フューリー」

そして、フューリーの後について朝食を食べに食堂へ。
だいたい同じ頃に、ゼーシュとソールハロッシュが微妙な距離をとりながら食堂へ到着する。

あとは四人席へ座つて朝食を吃べるのだ。

「おはよう、マリアド」

と、朝から爽やかな笑顔を向けるソールハロッシュ。

「うん、おはよう」

ゼーシュはゼーシュで、部屋に置いてきた一ゲルのことを考えて何か「えられそうなものを物色しながら呟つ。

「おはようございます、マリアドさん」

「おはよう、ゼーシュ」

そしてパンをひとつ、ポケットへ潜り込ませるゼーシュ。

さすがにこのやりとりも慣れてきたもので、もつすぐで折り返し地点だと思つと、少し寂しくも感じる。

食事を終えると一度部屋へ戻つて荷物を取り、すぐに出発する。
昨日のこともあって、のんびりする時間はまったくなかつた。

毎前にヘルバへ着いたが、ソールハロッシュの指示で早めの昼食

を買うだけに留まつた。

それからすぐにフニスへ向かつて走り出し、地図を見たフュエリが言つ。

「この調子なら、タ刻にはヌーベスへ着けそうですね」

「そうだな」

と、窓外に目を向ける魔術士。

ニゲルと遊んでいたゼーシュも、ふと目をあげて外の景色を見つめた。

オリア地方と違つて、自然が多い場所だ。遠くには森も見えるし、その先には目指す山脈と思しき山々。

「こんなところでも、魔物は出るんだな」

ふと呟く俺に、三人がそれに目を向けてきた。

「世界的なことだから仕方ないよ」

と、ソールハロッシュ。

馬車が行く道には魔物の足跡が見て取れるし、草の影には死体が「ごろごろと転がっている。

「それに、テリュス山脈には確實に近づいているからね」

「……うん」

魔物はある山々のどこかから出てきているのだ。

一体どんな仕組みになつているのか分からなければ、考え出すと溜め息をつきたくなる。

そんなことを考えていたら、ゼーシュが長いまつげを伏せて、珍しく重い溜め息をついた。

フニスに着くと、ソールハロッシュが六つ目の防御結界を街の入り口に張つた。

緑色に発光するそれは相変わらず綺麗で、今までに張つてきた結界と繋がつてその力を發揮する。

そうしてまた、俺たちは次の目的地ヌーベス村へ向けて走り出すのだが、どうも気乗りしない様子の奴がいた。ゼーシュだ。

その理由は、夕刻のヌーベス村で明らかになつた。

「……もしや、ゼーシュ様？」

馬車からのぞいた顔を見て、一人の男性が声をかけてきた。

「ああ、やっぱりそうだ！ すっかりご成長なされて！」

とつやに愛想笑いを浮かべるゼーシュ。どうやら、彼女はこの村では有名人らしい。

先ほどの男性の声を聞きつけた人々は、口々に彼女を見て声を上げた。

「おかえりなさい、ゼーシュ様！」

「おかえりなさい！」

ゼーシュはただ馬車の中から愛想を振りまいっていたが、歓迎されている割に嬉しそうではなかつた。

「どうなつてるんだ、ゼーシュ」

と、俺が彼女へ尋ねると、見習い騎士は溜め息をついた。
「ごめんなさい、隠していたつもりはないのですが……この村は、
僕の故郷なんです」

ソールハロッショとフュエリが納得した顔を浮かべる。

「それと、僕は……この村の、領主の子でして」

そう言つて苦笑いを浮かべるゼーシュ。

なるほど、それなら歓迎されるのも無理はない。つか、領主つてつまりは地方貴族だから、ゼーシュも一応は貴族の生まれだつたんだな……ソールハロッショとは比べものにならないんだろうけど。
「それでしたら、今夜はゼーシュ様のお屋敷に泊めていただけたりは……？」

と、フュエリが財布を握りしめながら問う。どうやら、俺の個室のおかげでメイドは節約を考え出したようだ。

「……そうですよね」

と、再び溜め息をつくゼーシュ。

馬車の周りにはたくさんの人たちが集まりだしていた。その為、

自然と馬の歩みが遅くなる。

何か決心した様子のゼーシュは、御者へ屋敷の場所を伝えた。

「おかえり、ゼーシュ」

と、領主は勢いよくゼーシュを抱きしめた。

「よく帰ってきたな、仕事の方はどうなつてる?」

「それは後で話すから、とりあえず皆さんに部屋を

と、ゼーシュは冷静に返す。

「おお、そうでしたな。すぐに用意させますので、広間の方でお待ち下さい」

屋敷は城にくらべると劣るが、なかなかに立派だった。通された広間のソファは手入れが行き届いていたし、配置された装飾品も見応えがある。

ゼーシュは父親と話をしながら自室へと向かって行き、残された俺たちはメイドが来るのを待つしかなかつた。

ふいに隣にいたソールハロッシュが口を開いた。

「ヌーベス村の領主が、こんな屋敷に住んでいたなんてね」

やはり彼も驚いているらしい。

しかし、この屋敷に一人ずつ泊まれるような客室があるのだろうか。あつたとしても、そしたらフュエリが落ち着かなくなるだろう。

そんなどうでもいいことを考えていたら、メイドがやつて来て俺たちを客室へ案内した。

廊下にも数々の芸術品が飾られており、中でも目を引いたのは一枚の絵画だった。

「彼の母親だろうか、綺麗な人だ」と、呟くソールハロッシュ。

ゼーシュと同じ黒い髪に、どこか人間離れした空気を思わせる顔立ち。年の頃は若そうだが、彼女とよく似ていると思った。

用意されたのは個室だった。ソールハロッショとフューリーが同室ということらしい。

「食事の用意ができましたら、お呼びいたします」

と、メイドが頭を下げてから出て行く。

俺は適当な場所に荷物を降ろすと、ベッドにどさつと寝転んだ。それからどれくらい経つただろうか、誰かが扉をノックする音ではつとした。

起き上がりつてから、「どうぞ」と、声を出す。

「くつろいでいるところを悪いね」

と、入つてくるソールハロッショ。またお前か。

「いや、別に。つづーか、何の用だよ?」

彼は扉を閉めると、俺の向かいへ椅子を持ってきて座つた。

「少し、気になることがあつて」

「気になるつて?」

俺が聞き返すと、ソールハロッショは心なし声を潜めた。

「この村は少し、平和すぎやしないか?」

「え、そうか?」

平和なのは良いことだと思うが……それだけ、強い守りがあるのだろうし。

「人々が彼を歓迎するのは分かるとしても、何となく違和感があるようにも思えてならないんだ」

俺は首を傾げた。

「まあ、言われてみればそんな気もするけど、よく分かんねえな」確かに、この村は他と比べて平和かもしれない。領主も魔物のことで困つているようには見えないし、村の人たちもごく普通だ。彼の言つ違和感の正体がそういうことかは分からぬが、テリュス山脈の麓にあっては平和だ。

「フューリーに情報を集めさせてはいるが、この村は何かがおかしい」そう言つて頭を悩ませるソールハロッショに、俺は言った。

「そんなこと言つたって、はっきりしない内はどうしようもないだ

ろ

「確かにそうなんだが……」

と、言葉を濁す。

「おい、言いたいことがあるならばつきり言えよ」と、俺は彼を睨んだ。ソールハロッシュュに妙な気を遣われている気がして嫌だつたのだ。

すると、ソールハロッシュュは息をついてから尋ねた。

「彼……ゼーシュについても、何か怪しいとは思わないかい？」

「え？」

ゼーシュはヌーベス村の出身で、見習い騎士で、見た目は男だけ中身は女で、何故か魔物に懐かれていて……その、ヌーベス村の人々は、魔物の脅威を感じない様子で暮らしている？

頭が混乱してぐちゃぐちゃになつてくる。

何だ、何でこんな嫌な気持ちになるんだ。彼女はそんな奴じゃな
いって、信用できる人だつて、そう思つていたのに。

「嘘だ、まだそんなこと、分かんねえだろ。そりだよ、まだ何にも分かつてないんだから、疑うのはよせよ！」

「……そうだね、悪かった」

ソールハロッシュュがまた溜め息をつく。

「でも、人を信じすぎると、こぞといつ時に辛くなるのは自分だ。もう少し、よく考えてみてくれ」

静かに椅子を立つて、部屋から出て行く。

その背中を見送つて、俺は彼を改めて嫌な奴だと、思い込もうとしていた。

9 テリュス山脈入山

食事は美味かつた。ベッドも悪くなかった。フュエリの聞き込みから魔物の出現場所もだいたい特定できた。

問題は、ゼーシュがいつもと変わらないでいることだ。

疑いたくないのに、ソールハロッショの言葉がどうしても頭から離れなかつた。

翌朝、屋敷で朝食をとつてからすぐに出発した。

山道だからか、「こと」と馬車は揺れながら進む。

「近いところから見ていい」

と、ソールハロッショ。

彼は昨日の話などなかつたかのように、普段通りに振る舞つていた。俺と違つて大人だ。

「予定だと、昼過ぎにはルクス遺跡に着けるだろ？」

「遺跡ですか？ そこにも、何か？」

ゼーシュがニゲルを撫でながら尋ねた。

「ああ、君には話していなかつたね。オレは超高度魔法について研究していく、それに必要なんだ」

ゼーシュは分かつたのか、分かつていないのか、曖昧に頷く。

「そうでしたか」

「それにルクス遺跡は、その昔に神が降り立つたとされる貴重な場所でもある。それだけでも行ってみる価値はあるだろ？？」

と、ソールハロッショは俺を見た。

「……うん」

どうも気乗りしなくて、俺は無意識に溜め息をついてしまう。

呆れたようにソールハロッショが息をつき、ゼーシュが心配する様子で俺を見た。

「どうかしましたか？」

彼女の田は汚れがなく綺麗で、俺はそんな彼女を見る」ことが出来ずに戻す。

「いや、大丈夫だ」

「……そうですか」

もう少し上手くやれると思つたのに、俺は本当に駄目な奴だつた。

馬車が停止し、フューリーがさつさと外へ出た。

「ここから先は徒歩になります」

と、いつもと変わらない笑みを浮かべて、鞄から地図を取り出す。

「それじゃあ、道案内を頼むよ」

と、降りていくソールハロッショ。

ゼーシュはニゲルを抱き上げて言いつけた。

「ニゲル、僕から離れちゃ駄目だからね」

「きゅうっ」

機嫌良く鳴くニゲルに満足し、馬車を降りるゼーシュ。そして彼女は、俺へ手を差し出す。

「マリアドさんも、どうか気をつけて下さいね」

「お、おっ」

その手を取つて俺も外へ出た。

「だいたい、魔物つてどんな風に出てきてるんだよ」

ソールハロッショの隣を歩きながら問う。

「オレは魔方陣を使った方法だと思ってるよ。次元の扉と似たように、地下の世界と地上の世界を繋いでいるんじゃないかな」

「そういうもんなのか？」

と、思わず首を傾げる俺だが、確かにことはまだ分からぬ。

「で、それを俺はどうやって？」

「さあね。こればかりは、実際に見てみないと分からぬ。だが、黒妖精が来ているといつては、確実に一つの世界は何かの方法で繋がれているはずだ」

「……そ、うか」

地面はでこぼこで歩きづらかった。こんな不安定な場所で魔物に襲われたら危険だ。

なるべく、何もないよう祈りながら進む。俺の後ろを歩くゼーシュについても、何もないことを祈つて。

しかし、無駄だった。

「つ、魔物です！」

叫んだフュエリが俺たちを振り返り、すかさずソールハロッシュュが杖を手に持つ。

行く手を塞ぐのは、野犬にも似た凶暴な目つきの魔物たちだ。

「すぐに倒します！」

と、剣を構えて駆け出すゼーシュ。

俺はフュエリと二人で立ち尽くすしかなかつた。

「力エルレウス！」

青い水が魔物たちに降り注ぎ、動きを鈍らせる。その隙にゼーシュが一体目の首を落とした。

「きゅ、きゅう！」

俺の足元では二ゲルが彼らを見つめていた。
はつとして、俺は二ゲルを抱き上げる。ぎゅっと胸の中に抱きしめて、戦いが終わるのを待つた。

「つ！」

仲間を失つた魔物たちがゼーシュを取り囲む。今にも襲いかかるうとしたところで、ソールハロッシュュがそれを阻止した。

「プレッシオ！」

目に見えない圧力に魔物たちは押し返されて、魔術士が騎士の背を守る。

「ありがとうござります」

「気にするな。今回は数が多い、本気で行こう」
向かってくる魔物たちを一体ずつなぎ倒していくゼーシュ。

一方のソールハロッシュュは杖を構えなおすと、呪文を唱え始めた。

「ヴォントス・エ・イグニス、スマニアラ！」

湧き出た炎が風を受けてぐるぐると球状に回り始める。生成魔法だつた。

それはやがて大きな丸となり、魔物たちへと放たれた。悲鳴のような鳴き声が響く。炎に灼かれて鳴いている。吹きすさぶ風に抗うことも出来ず、魔物たちはそれから解放された瞬間に、鋭い刃で真つ二つに裂かれ、次々に息絶えていった……。

「…………きゅううう！」

ニゲルの声で我に返る。

戦闘を終えた一人がそれぞれの武器をしまい、息をついていた。

「ありがとうございました」

と、彼らに近づいていくフューリ。その後をゆっくり追いながら、俺はニゲルの温かさを両手に感じていた。

「おや、あれはもしや……」

と、ソールハロッシュが地面に何かを見つけて歩み寄っていく。その場にしゃがみこみ、観察しながら俺たちを手招くソールハロッシュ。

「やはりオレの推測は当たつていたらしい」

魔方陣だつた。しかし、その図は見たことがないもので、円の中に大小様々な円が描かれていた。

この魔方陣が地下の世界に繋がつていて、ここから魔物たちが出てきているのか……どうすればそれを止められるだろう？

「それにも、これは初めて見るな……魔物が出てくる前に何とかしたいけれど」

と、ソールハロッシュは魔方陣に手を触れた。小さな円を指先でなぞるようにして、ふと俺の顔を見る。

「マニアド」

「おう」

歩み寄つて、彼の隣にしゃがみ込んだ。

するとソールハロッショウは、魔方陣から手を離してしゃべり始めた。

「普通、魔方陣といつのは、その図形に魔力を宿すことで機能するものなんだ。だから、少し形を変えるだけで無効にすることが出来るのだけれど、どうやら、この魔方陣には防御が張られているようだ」

「防御？」

ソールハロッショウは俺の手を取り、魔方陣に触れさせた。

「分かるだろ？ まったくびくともしないんだ」

「……ああ、なるほど」

どれほど強くこすつても、魔方陣は形を変えなかつた。

「まあ、これくらいならオレにだつて出来ることだが……」

と、ソールハロッショウ。意外と負けず嫌いらしい。

ということは、まず防御を破らないと魔方陣は壊せないわけだ。なら、その防御をどう破るか。

「しかし、あまり時間は使いたくないな。マリアド、炎の魔法は使えるかい？」

「え、使えるけど

と、俺が返すと、彼は立ち上がって傍観している一人へ振り向いた。

「少し離れていてくれないか」

はつとした様子でフュエリとゼーシュが距離を取り、ソールハロッショウも俺から離れた。

「マリアド、地下の世界を燃やすつもりでそこに魔法をぶつけてくれ！」

「え、燃やすって……」

あちらの世界に繋がっているのだから、出来ないことはないだろうが、何だか恐ろしいな。しかし、これは俺でなければ出来ないことだ。

俺は白いローブを脱ぐと、気持ちを切り替えた。

意識的に呼吸をして、両手を前へ突きだし重ねる。それを魔方陣の方へ向け、ネネルから習つた魔法を唱える。

「 インテルダム・イグニス！」

熱気をまとつて現われた炎が魔方陣を包んだ。防御されているその壁を炎が溶かす感覚がした。

その内に炎は魔方陣に飲み込まれるようにして消えていったが、その跡はすっかり黒くなり、焦げ付いていた。先ほどと違つてあつさり形が壊れた。

「……これでいいのか？」

「ああ、上出来だ」

と、満足げに笑うソールハロッショ。

「早く次へ行こう」

そう言つて歩き出す彼を見て、フュエリが慌てて地図を手に追いかけた。

魔方陣を無効化することには成功したものの、俺は何となく後味が悪い気がしてその場に立ち尽くしていた。

すると、一ゲルを連れたゼーシュがそばへ来て言つ。

「これなら、もう魔物は出でこられませんね」

「……ああ、そうだな」

俺の表情を伺いながら、ゼーシュがそそくさと歩き出す。

どんなに考えても、やつてしまつたものは取り返しが付かない。

半ば無理矢理思考を切り替えて、俺も彼らの後を追つた。

一つ目の魔方陣も同じようにやれと言わされたが、炎は性に合わないと嘘を言つて、今度は水の魔法を使った。先ほどよりも時間はかかつたが、魔方陣の形を歪ませることに成功した。

そして三つ目も水で壊し、太陽が真上を過ぎた頃、目的のルクス遺跡が見えてきた。

「あちらへ着いたら、休憩にしましち。ちよづど、お腹も空きましたし」

と、フュエリ。メイドの割に体力があるようで、すっかりへばっている俺と違い、彼はまだ元気だった。

足の痛みを我慢して進み、ようやく遺跡の入り口へとたどり着く。「なかなか面白そうだ」と、ソールハロッショが早くも周囲を観察し始める。ゼーシュはニゲルを抱き上げ、休めるところを探しているフュエリの後を付いて行つた。

俺は超高度魔法のこともあります、とりあえず魔術士の後を追つた。

旅の非常食で昼食を済ませると、俺はソールハロッショウに呼ばれて遺跡の奥を目指していた。

「一番奥の部屋に祭壇があり、そこに神が降りたとされているんだ。伝聞で聞いたことしかないだけに、楽しみだよ」と、ソールハロッショウ。

俺は適当に相槌を打ちながら彼の話を聞き流していた。

魔物の出現していた魔方陣は、おそらく黒妖精がこの世界へ来て描いたものだろう。つまり、ネネルの情報は確かであり、その黒妖精とやらがこのテリュス山脈に魔方陣を描いた張本人ということになる。

「それにしても、遺跡が魔物にやられていくなくて良かつた」と、ソールハロッショウがふいに呟いた。

「魔物の巣窟になっている可能性もあるとオレは考えていたんだが、今のところ心配はいらないね」

「うん、そうだな」

古い遺跡ということもあり、魔物に占拠されていたら大変なことになっていたらどう。確かに何もなくて良かつた。

ソールハロッショウがまた何か語り始めて、俺は先ほどのように適当な相槌を打つ。

石が積み上げられて出来た壁に声が跳ね返されて、静かに響く。その他に聞こえるのは俺たちの足音だけだ。

たまに足元に転がった小石を無意識に蹴つたが、魔物の気配などどこにもなかった。

そして薄暗い廊下を突き当たりまで進むと、左側に何かが見えた。心なし、ソールハロッショウが足を速める。

石でできた祭壇に、天井から外光が当たっていた。

壁際にはいくつもの石像が並んでおり、少し薄気味悪い。「なるほど、光はつまり太陽……そして、陰、か」と、咳きながら前進するソールハロッショ。

きらきらと光を受けて輝く祭壇に近づく彼だが、手前で立ち止まる足元を見た。

「マリアド、こっちへ来てござらん」

歩み寄ると、彼の指示するものが何か、すぐに分かった。「これって、まさか……」

「ああ、魔方陣だね」

一步後ずさり、しゃがみこんで地面を覆った砂を手で払う。同じように腰を落とし、俺は魔方陣を見つめた。ところどころ線がすり切れて見え、形が曖昧になつていて。

「これも見たことがないな。使われた形跡は見られるが……今でも使えるかどうか」

鞄からあの白い石を取り出して、ソールハロッショが魔方陣をなぞろうとした。

こいつと石が地面に触れたところで、何者かの足音が聞こえてはつと後ろを振り返る。

「あ、すみません……お一人がどこに行つたのかと、フュエリさんが心配していたもので」

ゼーシュだつた。二ゲルは連れていらないらしく、一人きりだ。

ソールハロッショは笑みを浮かべると、彼女へ言った。

「それよりも、この魔方陣を見てくれ。実に興味深い」

戸惑つた様子でゼーシュはこちらへ来ると、魔方陣を見下ろした。

「ルクス遺跡の奥にこんなものが……」

と、咳く。

その言葉にソールハロッショは何か感じたらしく、彼女をじっと見据えた。

「麓の村の生まれでも、ここへ来たことはないみたいだね?」

「……はい、父が過保護なものですから」

と、冷静に返すゼーシュ。

そう言われると、それで納得しそうになる。しかし、ソールハロツシユはまた言った。

「騎士団に入る」との方が、よっぽど危なによつて思えるけどね

一瞬、ゼーシュがびくつとした気がした。

「それは僕自身が望んだことです。それとこれは、別の話です」
彼女の返答には棘があつた。どうやら、かんに障つたらしい。

ソールハロツシユは笑いながら誤魔化した。

「ああ、悪かつた。そんなつもりはないんだ」

「……いえ、僕の方こそむきになつてしまい、すみません」

俺はただ、魔方陣を見つめていた。

「もしかすると、オレたち人間と黒妖精は本当の意味で敵対してい
たのかもしれないね」

行きとは違う道を通つて山を下つている途中、ソールハロツシユ
が声をかけてきた。

「さつきの祭壇、光の当たらぬ部分があつただろ?」

「え……あつたような、気がするけど」

と、俺は先ほどの景色を頭に思い浮かべる。

「天井から差す光は神を表しているが、光の当たらぬ部分には地
下へ続く道があるんだ」

「は?」

「たぶん、それは地下世界への入り口であり、黒妖精のことを暗に
表していた」

しかし、その光の当たらぬ部分にあるのは魔方陣だけだつたよ
うな……。

首を傾げる俺にソールハロツシユが言つ。

「だから、あの魔方陣が地下世界に繋がつていたんだよ。まあ、オ
レの勝手な推測だけだね」

「……ふうん」

何だ、そういうことか。

ということは、あの魔方陣を使って黒妖精がこっちへ来ることも可能なのか？

「なあ、ソル」

問い合わせようとして、ゼーシュに抱かれていたはずの二ゲルが足元を駆けていくのが見えた。

「あ、二ゲル……っ」

「きゅうう！」

いつもより高く鳴いて、二ゲルは見知らぬ誰かの元へ向かう。

見知らぬ誰か？

フュエリが警戒心を露わに立ち止まり、ソールハロッシュも杖を構える。

「おや、二ゲルじゃないか。こんなところにいたなんて……」

と、慣れた様子で二ゲルを抱き上げる青年。漆黒の髪に真っ黒なローブを身に纏っている姿は、どこか人間らしくない。

青年はこちらを見て、にやりと笑った。

「ああ、もしかして君がゼーシュか。ルアンザから話は聞いてるよ」

一步一歩、大地を踏みつけるように進んでくる青年。

フュエリがさりげなくソールハロッシュの後ろへ隠れ、ソールハロッシュが彼を睨む。

「そう恐い顔するなって。おれはただ、そっちの少年に用があるだけだ」

ゼーシュがびくつとした。

「知ってるだろ？ おれはユヴァイン、お前の姉であるルアンザの従兄だよ」

「……に、二ゲルを返して下さい」

前へ踏み出したゼーシュは、剣の柄に触れていた。

「分かってるよ、二ゲルはお前たち姉弟のペットだからな」と、ユヴァインは二ゲルをゼーシュへ返した。

それまで様子をうかがっていたソールハロッショウが口を開く。

「君は、黒妖精か？」

「い」答。で、キミたちはあれだり？ 宮廷魔術士のソールハロッショウとメイドのフュエリ、あと救世主のマリアドちゃん「何で知ってるんだ！？」と、田を丸くすると同時に腹が立つ。

俺は男だ！

ゴヴァインは不敵に笑うと、からかうよつと言つた。

「キミたちは知らないだうけど、おれたちつて魔物の考えが読めるんだよね。ニゲルはただでさえ人懐こいから、すぐに分かつたよ」ははは、と、おかしそうに笑う。

ゼーシュはニゲルをぎゅっと抱きしめ、彼を睨んだ。

「あなたたつたんですね、魔物を出現させていたのは」

「当たり前だろ？ むしろ、おれじやなきや出来ない技だよ。まあ、そこのお嬢ちゃんには勝てなかつたようだけど」

と、俺を見るゴヴァイン。どうやら彼も、嫌な意味で俺に気があるらしい。

「それなら、今ここで君を倒せば、連絡役はいなくなるわけだ」と、ソールハロッショウが言つと、ゴヴァインはまたおかしそうに笑つた。

「くくっ、何て気が短い人だ。おれには戦う気なんてないつていうのに」

「なら、何故オレたちの前に現われた？」

と、相手を見据える。

「偶然に決まつてるだろ？ おれはただ家に帰るつとしてただけさ。遺跡の奥にある、あの魔方陣でね」

「！」

ゼーシュが泣き出しそうな顔をした。

思わず前へ出そになる俺をフュエリが止める。

「お前は一体何なんだ！？ ゼーシュと、どんな関係があるつていふんだよ！」

フュエリに掴まれた右腕が痛い。そう叫ぶのが精一杯で、もどかしかつた。

「だから、おれはゼーシュの従兄だつてば。あれ、まさかお前、何も話してないの？」

「……つ」

ゼーシュはただ俯いて、肩を震わせていた。

「あー、そつか。じゃあ、おれが伝えちゃおつかなあ？」

にやにやと意地悪にゼーシュの周りをうろついては、俺の顔を見て立ち止まる。

「ゼーシュ君はね、おれたち黒妖精とお前ら人間のハーフなんだよ」

落ち葉を巻き込んで風が吹き抜ける。

声が出なかつた。何か叫びたいのに、叫ぶ言葉が見つからない。

「おやおや？ もしかしてゼーシュ君、泣いちやつた？ ニゲルが心配してるよー？」

意地悪な笑みは、まるで俺たち人間を見下すかのようだつた。

殴りたかつた、わけの分からないことをいうユヴァインを殴りたかつた。そんな心と裏腹に、俺の足はただ地面を踏むしか出来ない。

その時、ゼーシュが声を上げた。

「……もつ、やめてつ」

彼女の言葉がゴヴァインの田を丸くさせた。

「おや？」

「 もう、何も言わないで！ 早く僕の前からいなくなつて！！」

悲鳴まじりの声だつた。

その少女のようないに、ゴヴァインはからかうのをやめて笑みを消す。

「じゃあ、おれはさつと家に帰るよ」

と、歩き出す。

その彼を注意深く見つめる俺たちだが、ふとゴヴァインは俺の前で立ち止まつた。

そして俺の頬に手を添えると、一瞬だけ口づける。

「！？」

「救世主が現われようと、誰もおれたちを止められないよ」

囁きの後に嫌な笑顔を浮かべて、足早にその場を去つていぐ……。

「大丈夫かい、マリアドー？」

驚きを隠せない様子で問うソールハロッシュ。

「何なんだ、あいつは……出会つて早々、キスなど……！」

俺は唇に手を当てつつ、今起きたことを整理していた。
ゼーシュは黒妖精の血を引いていて、ゴヴァインは俺に『氣』があつて、誰も止められないと……。

「そうだ、ゼーシュ！ だからつまり、どういうことなんだよ？」

と、ソールハロッシュを無視してゼーシュに駆け寄つた。

彼女は顔を上げずに、ただ謝つた。

「『めんなさい、本当に』『めんなさい』

「……ゼーシュ」

俺もフューリーも、ソールハロッシュでさえ、そんな彼女へかける言葉を見つけられずにいた。

馬車へ着くまで、誰も口を開かなかつた。

ソールハロッショウが淡々と魔方陣を見つければ、俺がそれを魔法で封じる。

それを四つほどやり終えて、ようやく馬車へたどり着いた。すつかり日が沈んでいた。

馬車に乗り込み、ソールハロッショウが御者へ言う。

「このまま村を出て北東へ、行ける所まで行ってくれ」

その意図に気づいた俺が彼を見ると、宫廷魔術士は冷ややかに言う。

「一刻も早く城へ戻る」

ゼーシュは何も言わなかつた。ただ、その頬をニゲルが心配そうに舐めていた。

馬車が走り出したところで、ソールハロッショウはゼーシュへ問う。

「全て、話してくれるね？」

「……はい」

頷いて、そつと顔を上げる。

「僕は……僕の母は、黒妖精なんです。だから僕は、ハーフで……双子の姉がいます。それがルアンザ、黒妖精の血を濃く受け継いでいるため、母が生まれて間もなく、あちらの世界へ連れて帰つたと聞いています」

窓の外には暗雲が立ちこめていた。雨が降り出しそうだ。

「僕がまだ幼かつた頃に、父がルクス遺跡の魔方陣を通じて、地下の世界へ通つているのを知りました。時々は、母がこちらへやってきていたようです」

ゼーシュはあの魔方陣を知つていたが、やはり嘘をついて知らない振りをしていた。

「それからしばらくして、僕はあの魔方陣を通して姉と再会しました。互いの世界を行き来して、よく一緒に遊びました。ですが、僕

の母は黒妖精の中でも頂点に立つ一族の一人であり、ルアンザもゆくゆくはそうなると知りました

「それなら、あのコヴァインとかいう男もそうなのかい？」

「はい……彼は、一族の中でも特別強い力を持つそうです。……だから僕は、魔法に負けない力が欲しくて、騎士見習いになりました。それだけは嘘ではなかつたようだ。

「そしてコヴァインが一族の長になり、二つの世界を支配すると言いだした……それに反対した母は彼の怒りを買い、一族を追われて行方不明だと……」

「二ゲルがふいに俺の足元へ来て、抱っこをせがむ。仕方なく抱き上げてやると、ゼーシュが悲しそうに言つた。

「そのせいで、ルアンザはこちらに逃げ出すことも出来ないと……二ゲルから、聞きました」

はつとする俺とフュエリ、ソールハロッショ。

「二ゲルは、ルアンザがあちらの世界で拾つたのを、僕が協力する形で飼っていた魔物です。僕にも黒妖精の血が流れているので、分かるんです」

「……だから懐いていたわけだ」

と、どこか冷めたようにソールハロッショが言つ。

ゼーシュは口を開じると、しばらく考え込む様子だつた。そして、言つ。

「ヌーベス村には、僕のように黒妖精の血を引く人たちが大勢います。だから魔物も、あまりあの村を襲わなかつたみたいですね」

俺には二ゲルの言葉は分からないし、黒妖精がどういうものかもよく分かっていない。けれども、ゼーシュが悪い奴ではないことだけは分かつた。

それなのに、ソールハロッショは厳しい現実を突きつけた。

「城へ帰つたら、君の知つてること全て、国王たちに話してもらうよ。場合によつては、騎士団からの除名も覚悟するべきだろ？」

「……つ、はい」

ゼーシュはぎゅっと唇を噛んだ。

彼女に何かしてやりたいと俺は思つたが、ニゲルがそれを許してくれなかつた。急に腕の中でもがき始めたのだ。

仕方なく両手を放してやると、ニゲルは俺の膝の上で丸くなつた。「いずれにせよ、君は大変な事実を隠していたんだ。ヌーベス村の領主に責任が問われたつて、おかしくはないよ」

一つの世界が完全に分かたれていたというのは間違いだつた。昔からこの世界は、地下の世界と繋がつていたんだ。

車内に強い風が吹き込み、慌ててフュエリが左右の窓を閉めた。

「黒妖精の使う魔法については知つていいのかい？」

と、心なし口調を変えるソールハロッシュ。

「……なんとなくしか。ですが、ルアンザなら詳しい内容を知つているかもしれません」

「そうか……しかし、ゴヴァインは今、あちらの世界にいるんだつたな」

あの魔方陣を使って地下世界へ行くことを考えたらしいが、すぐにソールハロッシュは首を横に振つた。

「残念ながら、お姉さんに会いに行くのは無理そうだ。彼についても、どれほどの術者かまだ分からぬし」

富廷魔術士はゼーシュのことを理解している風だつた。必要以上に責めるつもりはなく、俺と同じで敵だとは思つていない様子だ。ただ、それを阻むのが事実という壁で……どうしたら、黒妖精との戦闘を、世界の終末を避けられるだろうか。

……いや、待てよ。

「その、ゴヴァインが黒妖精たちのトップなんだよな？」

「はい、そうですが……」

と、ゼーシュが少し驚いたように俺を見た。

「じゃあさ、あいつを倒したら全て丸く收まるんじゃねえの？」

「……マリアド、まだ黒妖精たちがどういった組織かも分からぬ

のに、そんな 」

と、ソールハロッシュが言いかけ、ゼーシュが遮る。

「可能性はあると思います。でも、彼がどうやって、この世界を滅ぼそうとしているのか分かりませんし、もう一度と姿を現さないかもしれません」

「ああ、そつか……」

もし、また会えるのならば、その時は問答無用で倒してしまおう。会えないのなら……俺たちには、為す術がない。その時に、俺が力を発揮するしか。

「……このことについては、城へ戻つてから話そう」
と、ソールハロッシュが話をまとめた。

その夜は街の宿に泊まり、予定を練り直した。

そして迎えた七日目、ソールハロッシュが以前のように防衛結界を張りながら、あとは帰路をひたすらに進んだ。どの場所にも長居はせず、ただただ進んだ。

夜も更けた頃に宿を取り、明朝には馬車へ乗り込んだ。

そうして、ようやく見慣れた城が見えてきたのは、八日目の夕刻だった。

「謹慎を命ずる」

国王は苦い顔をしていた。

隣の玉座に座っていたフイアンシーナ姫が、氣の毒だと言わんばかりの視線を彼女へ寄越す。

「期間やその後の処分については、落ち着いてから決める。知らせを受けるまで、決して部屋から出るでないぞ」

「……はい」

「この国だけでなく、この世界からしたら黒妖精は敵なのだ。それをするんなり受け入れることは無理だった。」

「連れて行け」

兵士たちがゼーシュの腕を乱暴に掴んで立ち上がらせた。

そうして謁見の間から出される彼女を見送って、俺は自分の提升了鞄に目をやつた。

「それで、あの子があんなことになつたつてわけ？」

と、俺たちよりも先に帰っていたネネルが問う。

「うん、でも除名じゃなくて良かつたよ」

「まあ、確かにねえ……」

と、足元をうろうろしてこちら二ゲルをじつと見つめるネネル。

「で、この魔物は？」

「逃がす」

「何よそれ、どういふこと？」

俺は二ゲルを抱き上げると、テーブルの上に座らせた。

「逃がしたと見せかけて、助けを呼ぶんだよ」

二ゲルの首に革紐を通し、その紐に手紙をくくりつける。

「二ゲルがコヴァインにさえ会わなければ、ゼーシュの姉であるルアンザと連絡が取れる。で、二ゲルはルアンザをこの城まで連れて

くる。出来るよな？

「きゅうつ」

鳴いて理解を示すニゲル。

その頭を撫でてやつて、俺はネネルに顔を向けた。

「信じうつて。運が悪ければ台無しになるけど、今はルアンザに会わなきや何も出来ないんだ。少なくとも、やらないよりはマシだろ？」

ネネルは呆れたように溜め息をつき、適当に頷いた。

「ええ、そうね。上手く行けばいいわね」

と、椅子を立って扉へ向かう。

「おい、どこ行くんだよ

思わず声をかけると、魔女は振り返つて言った。

「報告書を書かなきやいけないのよ。あと、この旅で得た情報を同僚と共有してくるわ」

そしてさっさと廊下へ消えていく。

そういうえ、ソールハロッショもそんなことを言つていたな。フュエリは早くもメイドの仕事に戻つてしまつたし、ヴェルシはまだ療養中だつた。やはり今、身動きが取れるのは俺くらいなわけだ。

「……じゃ、俺たちも行くか

と、ニゲルを見下ろす。

「きゅうつ！」

前足をきつちり揃えて、ニゲルが頬もしく鳴いた。

部屋を出て庭へ向かう。

相変わらず城の周囲をあの大きな鳥が飛んでいたが、構わずに俺は人気のない場所を探した。

防御結界のおかげで城下町に魔物が侵入してくることはなくなつていた。しかし、その内部にいる魔物は敵意があるために外へ出られない。つまり、あの大きな鳥も倒されない限りは城を周回し続けるのだ。敵意さえなければ、誰でも通り抜けられるのが防御結界の

す」「い」とじりだつた。

普段の日常を取り戻しつつあるメイドたちを横目に、俺は地面にそっとしゃがみこむ。

すっかり日が暮れて、夜空には双子の月が浮かんでいた。

「ごめんな、ニゲル」

と、ニゲルを手放す。

ニゲルは少し歩いてから、俺の方を振り返つた。

「……きゅつ」

そして、走り出す。

あつとこゝろ間に遠ざかつていくニゲルを、俺はいつまでも見送つていた。

どうか、ルアンザと連絡が付きますよ！」そしてルアンザが、ゼーシュみたいな良い奴でありますよ！」

部屋へ戻ると、テーブルの上に夕食が並んでいた。久しぶりの豪華な食事だ。しかし、そこにあるのはどう見ても一人前で。

「おかえりなさい、マリアド。今夜はファインシーナがご一緒に緒させていただきますわ」

と、にっこり微笑むお姫様。

「え、あ……はい」

俺は妙な不安を覚えつつ、彼女の向かいへ腰を下ろした。

フュエリの姿はなく、部屋には俺と彼女の二人きり。

その内に戻つてくるだろうが、それまでどうしたら良いのだろう。

「そんなに緊張なさらなくて良いんですよ。ファインシーナはただ、旅のお話を伺いたいだけですわ」

「ああ、そうでしたか」

言われてみれば、さっきはあまり話をしなかつた。ゼーシュとソーラハロッショバカリ話をして、俺はほとんど聞き役に回つていたのだ。

「それに、マリアドとおひんとお話をしたこともなかつたでしょう

？」

「あー、確かにそりかもしれません」

俺の名付け親でありながら、こうして面と向かって話をするのは初めてだ。

彼女が満足げに頷いたところで、フューリーが戻ってきた。

そしてそれぞれの前へ置かれるのは、いわゆるワイングラス。

「お疲れでしょう？ 今夜はゆっくりしましょ」

注がれるのは、とつても高そうな香りの立ちこめるアルコール。

「……え、えっと、あ、ありがとうございます」

今までお酒を飲みながら食事をしたことがなかったもので、思わず戸惑ってしまった。

姫はそんな俺を見てくすっと笑い、グラスを手に取った。

「では、乾杯」

「か、乾杯」

慌ててグラスを取り、少し上に持ち上げた。

姫は慣れた様子で一口飲み、俺も真似して口を付ける。

「それで、あの騎士見習いとは、一体どこまで進みましたの？」
急な問いかけに、風味を楽しむはずが一気に飲み込んでしまった。

しかも、ちょっとだけ気管に詰まらせた。

口元に手をやりつつ、咳をする俺。

「あら、大丈夫ですか？」

「え、ええ……」

もう一度ワインを飲んでから、俺は姫の顔を見た。

「申し訳ないんだけど、俺は、その……あいつとは、ただの友達なんで」

姫は少し目を丸くして、フォークを手に取った。

「そうでしたの。ちょっと期待してましたのに」

期待って何だ。というか、俺とゼーシュって、そういう風に見えるのか？

「はい。ですので、何もありません。マジで、本当に」

言葉を強調しつつ、俺もフォークに手を伸ばす。

彼女が黙々と食事を始めるのを見て、俺は一つ息をついてから食事にとりかかった。

そうして皿の上が残り半分ほどになり、姫が再び唐突に問う。

「マリアドは、どんな方が好みですか？」

「はー？」

口の中が空で良かつた。

動搖する俺に構わず、もう一度尋ねるフィアンシーナ姫。

「ですから、どんな方が好みなのです？ 年齢は上か下か、外見なども聞かせていただきたいですね」

「いや、えっと」

急に好みのタイプを聞かれるとは思っていなかつた。ましてや、この場で、この人に。

どう答えたらいいか思考しながら、食事を続けた。

「あまり、考えたことはないですね。っていうか、俺、まだこの世界に来て二十日も経つてないし」

毎日が慌ただしくて忘れそうになるが、実はまだ日が浅い。それなのに、特定の誰かとそんな関係になるなんて考えられないだろう。それに俺は、自分が男なのか女なのか、よく分からなくなつていいのだ。最初は男だと思つたけれどそれは昔の話で、ソールハロッショには完全に女扱いされているし、姫だつて俺を女だと思い込んでいる。……だから、こんな質問を浴びせてくるわけだが。

「確かにそうですね。でも、殿方に囮まれた中で旅をしていたのですから、何かありませんでしたの？」

と、心なし目をきらきらさせる姫。

俺は苦笑いを浮かべて返した。

「ありませんって、そんなこと

ソールハロッショには常に狙われていたが、それで落ちる俺じゃない。

「見習い騎士とも？」

「ありません」

「フューリとも？」

「絶対ないです」

見守っていたフューリが気まずそうに視線を逸らす。

「では、ソールハロッシュとも？」

「ありませんつてば。むしろ、彼にはつぶさりしていのといひです」
そうはつきり言つてやると、姫は落胆した様子で溜め息をついた。
「つまらないですわ」

そう言われたつて、どうしようもない。

適当に笑いで誤魔化して、俺はまた黙々と食事を始めた。

それにして、俺が女だと思われていたら女の子に恋するの
は微妙だよな。悪くはないだろつが、俺の中の常識が納得しない。
だからといって、男に恋するのも嫌だ。俺の周りにいる男には、ろ
くな奴がいないしな。

つづーか、恋愛つて何だ？ 俺、死ぬ前は恋愛したことあるのか
な？ どんな人が好きで、どんな人とどんな風に生きていたんだろ
うか。

今となつては何も分からないし、思い出せそうにもない。た
だ一つだけ言えるのは……今の俺は、マリアドだつてことだ。

そんなとりとめのないことを考える一方で、俺は城の料理の美味
さに懐かしさを覚えていた。

翌朝、俺はいつものように早く目を覚ました。すっかり旅に慣れてしまって、以前のようにフュエリが来るまで眠つていられなかつたのだ。

ベッドを出て窓の外を見る。相変わらず飛んでいる大きな鳥。今日は睨んでくることがないようだ、安心して俺はぼーっとそいつを見ていた。

ニゲルは今、どこを走つてゐるだらう? 無事に、ルアンザに会えているだらうか?

朝食を済ませても、ネネルはやつてこなかつた。

「暇だなー」

咳くと、部屋の片付けをしていたフュエリが答える。

「仕方ないですよ。ネネル様もソールハロッショ様も、仕事でお忙しいのですから」

「それは分かつてるけどさあ……」

急に退屈な日常に戻されて、不満にならない方がおかしい。

「ゼーシュは部屋で謹慎だし、マジで退屈。暇だと、無意味に咳いて溜め息をつく。

フュエリが呆れたように少し笑つて、片付けを再開した。

俺にも何か仕事があればいいのに、どうしてこうも退屈なのだろう。やることがなさすぎて、逆にストレスが溜まつてしまつ。

せめてヴェルシが来てくれたら良いのに……無理か。

だつたらフィアンシーナ姫でも良いが……でも、昨夜の続きはしだくないな。ガールズトークは苦手だ。

それなら……そうだ、ジャスナに会いに行こう。

久しぶりに見る聖堂は、心なしだきく見えた。

礼拝の時間がとうに過ぎているために、周囲に人気はない。裏へ回ると、何人かの巫女が庭を掃除していた。その中の一人とふいに目が合い、どきつとする。

「おかえりなさいませ、マリアド様！」
ジャスナだ。

「おう、ただいま」と、片手をあげて彼女へ近づいていく。ジャスナもまたこちらへ向かってきていだが、その他の巫女たちが俺たちを見ていた。

「あなたたち、何をぼーっとしているの」

と、建物から出てくる巫女長。彼女はすぐに俺の姿に気づいた。

「まあ、お久しぶりです。マリアド様」

「お久しぶりです、巫女長」

そして歩み寄ってきつては、ジャスナへ言つ。「ジャスナ、お話しするのは良いけれど、あまり長いと駄目ですからね」

「あ、はい……すみません」と、頭を下げるジャスナ。

どうやら巫女長は俺たちの間柄をよく存じらしい。

「じゃあ、ちょっと借りていきますね」

と、俺は言つて、ジャスナに目で合図した。

街の中は平和そのもので、以前のよつた悲鳴や破壊音は聞こえない。

「それで、どうでしたか？」

と、広場へ続く階段を下りながらジャスナが問う。

「一応、収穫はあったかな。黒妖精にも会つたし

「え、黒妖精に……？」

目を丸くして驚く彼女。

「ああ、ちょっと話をしただけで別れただけな

と、俺は返した。

「そうでしたか……他には何か、ありませんでした？ 魔物とか」「魔物には会つたよ、何度もね」

「大丈夫でしたか？」

「うん、大丈夫つづーか……ソールハロッショヒゼーシュが守つてくれたから、俺は何もしなかつたな」

いつだつて俺を第一に守つてくれた二人のことを思つ。「襲われそうになつた時も、ソルが盾になつてくれてさ」「そうでしたか、それなら良かつたです」

と、ジャスナがにっこり笑う。

階段を終えて広場へ着くと、子どもたちが元気に駆け回るのが見えた。

「魔物が出現している魔方陣も、分かつてゐる箇所だけだけど、きちんと封じてきたしな」

「それは良かつたです」

「超高度魔法については……ちょっと微妙だつたな」と、俺は苦々しく口角を上げた。

「ソルは何か分かつたみたいだけど、俺にはちつともだ。それに、その後すぐには黒妖精のユヴァインツて奴に会つたからさ」

するとジャスナは、俺を励ますように微笑んで言う。

「それなら仕方ありませんね。まだ時間はありますし、焦らなくて良いと思います」

彼女の優しさは素直にありがたい。ぜひネネルに見習つて欲しいところだ。

「うん、ありがとう」

だから俺も、つられて微笑んだ。

けれども今の平和は束の間の平和。黒妖精の動向で状況はいくらだつて変わるだろう。

魔物が街を襲うことはなくなつても、黒妖精が現わると言われた二度目の期限までは、あと四日しかない。

着実にその時は、近づいてきていた。

「……なあ、ジャスナ」

「何ですか、マリアド様？」

彼女は優しいから、俺の欲しい言葉をくれる。けれども、俺はだんだんと意識し始めていた。

「全てが終わった時、俺は……俺は、どうなつやつんだらうな」ジャスナがはつとして俯いた。

石畳を歩く。温い風を頬に受けて、髪がなびいて、背後へ消える。

「俺は神の使者で、この世界を救う救世主で、黒妖精の脅威からこの世界を救つて、その後は？」

「この世界からいなくなるのか？ また神様の元に行つて、別の世界で生まれ変わるものか？ でも、そうすると俺はこの世界に一ヶ月しか存在できなくて、それで終わつてしまふのか？」

「……分かりません」

と、ジャスナは答えた。当然の答えだつた。

「俺は英雄になれるかもしないけど、そうして俺がいなくなつた後のこの世界は、一体どうなる？」

「分かりません」

と、心なしお泣き出しそうな声で言つ。

俺はそんな彼女に構わずに、また口を開いた。

「平和を取り戻しても、いつまた黒妖精が、変なことを考え出すかも分からぬのに」

不安だつた。

何故だか分からぬけれど、俺は不安だつた。ジャスナが俯いていた顔を上げて、立ち止まる。

「全ては神の御心のままに、です」

つまり、その時にならぬと何も分からぬのだ。

もやもやした不安を抱えたまま、俺はこの世界で務めを果たすしかないのだ。

「……ごめん、ジャスナ」

と、俺も立ち止まって彼女を振り返った。

「いえ、気になさらないで下さい」

ジヤスナはそう言って、また微笑む。

そして俺の隣まで来ると、可愛らしく首を傾げて問いかけた。「以前と比べてマリアド様は、少し成長なさったようですね？」

「え、そうかな？」

「はい、大人っぽくなつた気がします」

思わず嬉しくなつて、俺ははにかんだ。

「そつか、ありがとう」

午後になると、また退屈な時間がやつてきた。

フュエリが淹れてくれた紅茶を飲みながら、ぼーっと過ごす。

「あの、マリアド様」

ふいに彼がこちらを見て、顔色を伺うような様子を見せた。

「何？」

と、俺が聞き返すと、フュエリは躊躇いがちにそばへ来て言つ。「マリアド様は、一体何を考えてらつしやるのですか？」「……え？」

びっくりした。質問の意図がまったく分からない。

「その、何というか……マリアド様は、どこか他人と距離を置いているような気がするのです」

そんなことないよ、と、言いたいのに、何故だか言えなかつた。「ソールハロッショ様にはもちろんですが、他の方に対しても、どこか心を開いていないように感じます」

「……そう、かな？」

自分ではそんなこと、考えもしなかつた。それどころか、ネネルやフュエリ、ゼーシュに対しては心を開いていたつもりなのだが。俺が不安そうにしたからか、フュエリは慌てて言葉を継いだ。

「あ、いえ、気のせいなら良いんです。ただ、私はそう感じただけで、困らせたいわけじゃないので……っ」

あたふたと俺の気を悪くさせないように努めるフューリ。

でも、言われてみるとどうかもしかつた。俺はただの神の使いで、この世界を救つたらどうなるかは分からぬ。それどころか、俺がここにいるのは神様の手違いなわけだから、俺は無意識にみんなと距離を置いて、ただその時を待つてゐるような一面もある。

「いいよ、フューリ。あながち間違えてもないしさ」

「そ、そうですか……？」

安心したようにフューリが息をつき、それからまたもざもざと何か言いたそうにする。

俺は呆れて、仕方なく促した。

「まだ何かあるなら、はつきり言つてくれ」

「……そ、その

と、目を伏せるフューリ。

今度は何を言い出すかと思つて待つていたら、彼は言つた。

「マリアド様はもう少し、『自分に素直になるべきだ』と思います」

「……は？」

素直つて何だ？ 俺は今までも充分に素直だところ。
「ご自分の、本当の気持ちとか、誰かに対する本音とか……そういうものを、もっと大切にして、表すべきだと思つのです」
「どうこうことだよ」

無性に苛ついて、ちょっととびっきりぱつぱつになつてしまつた。

フューリは先ほどのように動じることなく、むしろ真つ直ぐな視線を俺へ向けた。

「ソールハロッショ様の気持ちに、きちんと応えていただきたいんです」

応えるも何も、俺はソールハロッショが嫌いだ。

「そして、他の方たちの想いにも気づいていただけたら……と」
うんざりする。

俺は一体何なんだ。どうしたら良いんだ。

「……分かったよ」

反抗的に返して、俺はベッドへ向かった。
「毎晩するから、絶対に起こすなよ」と、思つてもいな言葉を彼に言い残して、さつと布団に潜り込んだ。

3 少年みたいな少女

たぶん、俺が前にいた世界と「」では、常識が違うのだろう。だから俺は、いまいち、みんなと歩幅を合わせられない。だから俺は、こんなに嫌な気分になるんだ。 だけど、それが言い訳だつてことも分かつてる。

「散歩していくる」

朝食を早々に済ませ、俺は部屋を出た。

フューリーとはあれから、あまり言葉を交わしていないかった。良くないなつて思うけど、俺にはどうしようもなくて、もどかしかつた。間に誰か入つてくれたら、少しは変わるのだろうが……。

適当に階段を下りて城外へ出る。

今日もあの大きな鳥が頭上を……舞つていない。何故か屋根の上で丸まつていた。珍しいこともあるものだ。

「きゅうー」

はつとして声のした方に顔を向けると、ニゲルが俺に向かつて駆けてきた。

「ニゲル！」

無事に帰つてこられたようだ。思わず嬉しくなつてしまがみこみ、ニゲルを抱きとめた。

そうして久しぶりの再会を喜んでいると、黒髪の少年らしき人影がこちらへ来る。

「おい、ニゲル！」

と、ぶつきらりぼつな口調で俺の前に立ち止まつては、はつとしたよつて目を丸くして。

「……まさか、あんたがマリアド？」

「つじことは、お前がルアンザか」

立ち上がりてゼーシュの双子の姉を見下ろす。しかし、その姿は彼女と呼ぶには抵抗があつた。

「そうだよ。ようやく二ゲルが帰ってきたと思つたら、ゼーシュの秘密がばれるなんて……家から出るの、苦労したんだからな」

真つ黒な髪は高い位置で結わえられているがボニー・テールと呼ぶにはあまりにも短く、胸は申し訳程度にあり、態度がでかい。そして全体の雰囲気からすると、どうも男っぽい。それも、思春期に入つたばかりの男子を思わせた。

俺はそんなルアンザに苦笑しつつ、二ゲルを抱いたまま城内へ誘つた。

「とりあえず俺の部屋に行こう。詳しい話はそこでする」

「お早いお帰りで」

と、フューリは言いかけ、俺の後ろにいるルアンザに気づく。

俺はただにつこり笑つて部屋の中央へ向かつた。

そして椅子を引いてやり、ルアンザへ言つ。

「ほら、座れよ」

「……う、うん」

ルアンザはすぐには座らなかつた。警戒している様子できょろきょろと周囲を見て、今度は俺に視線を向けてくる。

構わずにその向かいに俺が腰かけると、ルアンザはさも意外そうに言つた。

「マリアドが女だったなんて……」

しつこいようだが、俺は男だ。きっと、たぶん、半分は。

「良いから座れって」

「あ、うん」

慌てて腰を下ろすルアンザだが、その視線はどう見ても俺の胸にあつた。心なし、俺の抱いた二ゲルを羨ましそうに見ている。

何となく恥ずかしくて、俺は胸を隠すように横を向いた。どうやら、ルアンザはゼーシュと反対で中身が男らしい。……つまり、俺と一緒に。

フューリが紅茶の準備をしに部屋を出て行き、口を開く。

「それでゼーシュのことだけど、今は謹慎つてことで部屋から出られない状態なんだ」

「うん」

「でもって、俺たちはユヴァインと顔見知りになってしまった」「それはあいつから直接聞いたよ。まあ、マリアドが女なら、キスしちゃうのも納得つていうか……」

と、今度は俺の唇に視線を向けるランザ。何だかめんどくさそうな奴だ。

「で、俺たちは黒妖精がどんな方法でこの世界を焼き尽くそうとしているのか、知りたい」

ランザは息をつくと、鞄から一枚の紙を取り出した。

「模写で悪いけど、これが僕たちの世界と地上を表した図だよ」「よほど急いでいたのか、あまり良い出来ではなかった。それでもはっきり色が塗られている部分が地下の図であることは分かる。そこに重なるようにして、俺の知っている大陸図が細い線で描かれていた。

「で、どういうことだ？」

「この、大陸が重なってる部分、ここをユヴァインは狙ってるみたいだつた」

と、その広い範囲を指で示す。

つまり、狙われているのはその大陸で、中には俺たちのいるこの国も当然だが、存在していた。

「方法は分からぬけど、あいつの考えてることはおかしいんだ」と、ランザ。

「おかしいって、何が？」

「だから……僕たち黒妖精だけでなく、他の奴ら全員を地上に送り込もうとしてるんだ。魔物だって、人間たちを怯えさせるためだけじゃない」

どうやら、彼にはまた別の狙いがあるらしい。

「それなのにあんたたちが扉を壊しちゃったから、またユヴァイン

は扉を作りに出かけていった。その隙に逃げ出してきたわけだけど、見つかったら僕、確実に殺されるよ」

「恨めしそうに口を尖らせる。

「しょうがねえだろ。俺たちはそんなこと知らないし、あいつの思うままにさせるわけにもいかねえんだからね」

「俺は言い返した。

ルアンザは「それもそうだな」と、溜め息をついてから言った。「僕の知つてるのはこれくらいで、あとは魔物たちから情報を得るしかないよ」

「そうか、わざわざありがとな

と、俺はにこっと笑う。

するとルアンザは、急激に頬を赤くして顔を逸らした。

「べ、別に……ゼーシュのためだからな、しかたなくやつてるだけだからなつ」

とても初々しい反応だ。もしかするとルアンザは、ゼーシュと違つて付き合いが少なかつたのかもしれない。

抱いているのに飽きてニゲルを解放してやると、扉がこんこんと叩かれた。

「どうぞ」

と、俺が声をかけた直後、現われたのは変態魔術士。

「フユエリから聞いたよ。彼のお姉さんが

ぴたつと足を止めるソールハロッショ。

「僕がルアンザだ」

と、名乗りながらも、何故かソールハロッショを睨んでいるルアンザ。その視線と姿に、美青年は珍しく困惑していた。

「オレはソールハロッショ、この国一番の宫廷魔術士だ」

どうやら、ソールハロッショはルアンザを女だと認めなかつた様子だ。

そしてこちらへ来ては、俺の耳に口を寄せる。

「これはどういうことなんだい？ 確かお姉さんと聞いていたが……」

…

「それがどうやら、中身は男みたいなんだ」

俺が平然と返すと、彼は微妙な顔で「なるほど」と、呟いた。

ニゲルが俺たちの足元をうろうろと歩き回る。

「それで、話は全て？」

「ああ、ゴヴァインがこの辺りを狙つてゐることも聞いた」と、地図を示す俺。

ソールハロッショはそれをしばらく眺めると、改めてルアンザを見た。

「一応聞くが、君は俺たちの味方なんだるうね？」

「馬鹿言うなよ、僕はゼーシュの味方だ」

先ほどまでの俺に対する態度と違い、ソールハロッショには厳しいルアンザ。

「そうか。それならオレも彼の味方であるから、同じ仲間といふことに

「勝手にすれば？ 僕は、お前みたいな変な男を仲間だなんて認めないけどな」

ソールハロッショは溜め息をつき、俺の隣へ座つた。これで怒らないのは、やはり彼が大人だからだろう。

ルアンザは席を立つと、ニゲルの後を追い始めた。

「まあ、マリアドは女だから守つてやるけどさ

「……若いつて良いね」

と、遠い目で言うソールハロッショ。早くもルアンザとは気が合わないことが判明した様子だ。

しかし、これではいざという時に協力し合えない。

「こり、ルアンザ。あいつ、あんただけどすげー強いんだぞ」と、俺は腰を上げて後を追う。

しかしルアンザが何も答へなかつたので、仕方なく俺は先回りをして行く手を塞ごうとした。

「神の使者である俺が言うんだから間違いない

俺の足の間を二ゲルが通過していく、ルアンザは立ち止まる。

「そうなの？」

「ああ、そうだ。人間としては微妙だけど、魔術士としては一流なんだから仲良くしろよ？」

ルアンザはすると、また俺の胸を見た。

「……おっぱい触らせてくれたら、仲良くしてやつても良いよ」

ソールハロッショウがはつとこちらを見るのが分かった。

「最悪だな、お前」

「だつてマリアド、胸でけえじやん」

と、俺を見上げる瞳は思春期そのものだった。さすがの俺でも、そこまで女性に対して貪欲にはなれない。

しかし、こういう奴が本当に望むものが何かは知っていた。

「……つたく、しょーがねえな。特別だぞ」

と、俺はルアンザの頭をぎゅっと抱き寄せ、思い切り胸に押しつけてやる。

「つ……！」

「オレでさえ、まだ手を出していないのに つ！」

と、悲鳴を上げるソールハロッショウ。そういうえば、直接身体を触られたのは最初だけだったな。うん、何か……ごめん。

何だか申し訳なくなってきたので、ぱっとルアンザを離す。

するとフュエリが紅茶のワゴンを押しながら戻ってきた。

余韻に浸るルアンザを少し不思議に思いながら、てきぱきとお茶の用意を始めるフュエリ。

俺は椅子に戻つて、ソールハロッショウに顔を向けた。

「悪いな、ソル」

「いや、オレにも触らせてくれるなら」

「それは無理」

ソールハロッショウが寂しそうに口を開じた。ルアンザはまだ子ど

ものだから、それとこれどじや意味が違う。

腰を落ち着かせると、フュエリが俺の前へカップを差しだした。

途端に立ち上つてくる良い香り。

ふいに扉の開く音がして、俺は顔を上げた。

「遅くなつて悪いわね、ヴェルシが歩けるよつになつたつて言つんで連れてきたけど……」

「ネネルの巨乳にはつとするランザ。

「マリアド、あの人は？ あの人は？」

と、無邪気に聞いてくる。そういうば、胸の大きさではネネルが一番だつたな。

「宫廷魔女のネネルと、後ろにいるのがゼーシュの世話になつてゐる騎士、ヴェルシだよ」

ランザは一人の前まで行くと、姿勢を正した。

「初めてまして、ランザです。いつもゼーシュがお世話になつておりますつ」

と、後半はヴェルシに向けて言つ。ランザの価値観は胸の大きさで決まるらしい、負けた。

ネネルは嫌な予感を感じたのか、

「ネネルよ、よろしく」

と、さつさと俺の方へ避難してきた。

「ヴェルシだ、よろしく」

と、ヴェルシもあまり話そつとはせずにネネルを追つた。

「で、どうなったの？」

「とりあえず、ルアンザは味方だ。で、コヴァインに見つかったら殺されるらしい」

ネネルが嫌そうな顔をした。

「じゃあ、しばらくここにいるわけ？」

「だらうな。あいつが言つには、この辺が狙われてるってさ」

と、地図を指す俺。

それを見てから、ネネルは輪の中に入れずにいるルアンザに顔を向けた。

「嘘は言つてないでしょ？ うね？」

「もちろんです！」

と、答えるルアンザの頭の中は、きっとネネルの胸でいっぱいだ。

「顔はゼーシュとよく似ているが、性格は正反対だな」

と、どこかおかしそうにヴェルシが笑う。

「俺もそう思う」

彼女へそう返したところで、ネネルがきつぱり言い放つた。

「じゃあソールハロッシュ、あの子の世話、お願ひね

「はあ！？」

「嫌です！」

ほぼ同時に声を上げる二人。

まさかルアンザにまで拒否されると思つていなかつたネネルは、

ソールハロッシュを無視して言つ。

「表向きだけでも良いから、誰かの見習いになつておかないで、この城にはいられないわよ」

城への出入りは一般人も出来ないことはないが、ルアンザのよくな子どもが頻繁に出入りするのはさすがに怪しい。

「そうか……でも僕、それならネネルさんの見習いになりたいです

つ

「何でよ

「だつて、だつて……僕、女の子だし」

と、ソールハロッショをちらりと見るルアンザ。どうやら、自分の外見を良いように使う術を持ち合わせているらしい。なんてクソガキだ！

ネネルはそんな彼女もとい彼を見つめて、溜め息をついた。

「分かつたわ。でも表向きだけよ？」

「……ありがとうございます！ ネネルお姉さま大好き！」

と、ネネルの胸へ飛び込むルアンザ。

それが目的だとは気づかず、ネネルは母性たっぷりにルアンザを受け入れるのだった。

「妖精つて言うわりに、俺たち人間とあんま変わらねえよな」

ネネルが見習い手続きのためにルアンザを連れて出て行くと、俺はそう呟いた。

「妖精族にもいろいろあるからね。特に黒妖精はその強大な魔力のせいか、オレたち人間とよく似ているんだ」

と、ソールハロッショ。

それまでルアンザが座っていた椅子にゆっくり腰かけて、ヴェルシが問う。

「それにしても、ゼーシュが黒妖精のハーフだとは知らなかつたな。双子だということも」

「そつか、ヴェルシも知らなかつたんだな。まあ、隠すのも無理はないことだけど」

と、返す俺。

いつの間にかベッドの上でニゲルが寝転がっていた。

「そういえば、マリアド」

と、ソールハロッショが俺を呼ぶ。

「何？」

顔を向けると、彼はヴェルシを気にしていた。どうやら、彼女には聞かれてたくない話らしい、といふことは。

「いや、あとで話すよ」

「おう」

空気を感じたヴェルシが俺たちを見て尋ねる。

「私には聞かせられない話ですか？」

嫌味というわけでもなく、ただ聞いただけのようだった。

ソールハロッショは彼女へ顔を向けて微笑む。

「いえ、別にそういうわけではないですが……まあ、聞かなかつた振りをしてくれるなら」

「……では、私はニゲルと遊んでいましょう

と、席を立つ。

何て良い人なんだろう、やはり騎士だけに人間が良くなっている。そんなことを思つ俺だったが、ヴェルシはベッドへ向かうとニゲルを抱き上げ、ぎこちなく頬ずりし始めた。……たどもふもふしたかつただけらしい。

「超高度魔法のことなんだが」

と、ソールハロッショが口を開き、俺はそちらへ顔を戻す。

「古い文献に、黒妖精は闇の属性を持つ魔法を使つたと記されているんだ。これはルクス遺跡で気がついたことなんだけれど、もしかすると光は闇があつて、初めて存在しうるんじゃないかな？」

「つまり、黒妖精の魔法がないと超高度魔法は使えないってこと？」

と、俺は聞き返す。

するとソールハロッショは真面目な顔で言った。

「ああ、そうだ。まだ推測の域を出ないが、前の説より現実味があるだろ？？」

「んー、どうだろ？」

俺は魔法に詳しくないのでよく分からない。

「黒妖精の中でも強い力を持つ者がいるように、オレたち人間にも強い力を持つ者がいる。それらは対になつてゐるんだ」

その昔、強い魔力を持った人々は光属性である身体蘇生魔法を使っていた。それは現代で言い換えるなら、ソールハロッショのような天才や俺を指すのだろう。

「『大地』という強力な魔力で阻まれているだけで、黒妖精が闇ならこちらは光……というように、相手がいないと存在できない属性なんだよ」

「じゃあ、仮にユヴァインが闇を使えたとしたら、俺も光が使えるのか？」

「おそらくね。ただ、その出現条件が分からないと、一つ息をつく。

しかし、闇がなければ光は存在しないのなら、逆もあり得るんじゃないだろうか？ 違うな、地下の世界には太陽が届かないから…。

「なあ、闇は光がなくても存在できるのか？」

「それはどうだろう……ルアンザに聞いた方が早いな」

そう言って苦い顔をするソールハロッショ。何だか可哀相なので、二人が帰つてきたら俺が聞こうと思った。

「でも、それが当たつてたらすごいな。本当に超高度魔法を蘇らせられるなんて」

半ば無意識にぼやくと、ソールハロッショが俺の目を見た。

「もし出来たとして、マリアドは、身体の蘇生を行うかい？」

何を問いたいのか分からなかった。

「え、だつて、俺みたいな強い力を持たないと使えない魔法なんだろ？」

と、思わず聞き返す。

「それはそうなんだけれど……まあ、実際にやつてみないと分からぬいか」

と、何故か自己完結してしまつソールハロッショ。まったく、何が言いたいのかさっぱりだ。

しかし、聞いたところで答えてくれそうもなかつたので、俺は楽

しせうに二ゲルと戯れるヴェルシに目を向けた。

「闇の属性？ それって、つまりこれが？」

と、両手を前へ突き出すルアンザ。

「ノクティス！」

急に周囲が薄暗くなり、身体が重くなる感覚がした。動けない。心なしか息まで詰まりそうだ。

ぱつと闇が消えて、ルアンザが俺の顔を見る。

「こいつのこと？」

「あ、ああ、そうそう」「

と、思わず返す俺だが、すぐに魔女と魔術士に目を向けた。「初めて見る技ね、あれが闇の力……とても興味深いわ」「史実と同じだ。やはり闇属性は黒妖精のものってことか」と、ネネルとソールハロッシュはそれぞれに感心していた。これなら、さきほどソールハロッシュの推測通り、俺が光を使える可能性も出てきたわけだ。

同じ事を考えていたらしい彼が、俺へ目で合図する。 これなら試せるぞ。

しかし、今この場にはネネルがいて、ヴェルシがいた。無関係の者を巻き込むのは駄目だし、ネネルには絶対ばれたくない。

「闇属性については、また別の時に詳しく調べさせてもらおう。今はあまり時間もない」

と、ソールハロッシュ。

「そうですね。黒妖精がこちらの世界へ来るまでは、あと三日しかない」

と、二ゲルを抱きしめたままヴェルシも言つ。

ルアンザは改めて俺たちの顔を見ていくと、明るい声で言つた。

「じゃあ、さつそく行つてくるよ。あいつんとこりに」と、上を指さす。

誰もが首を傾げそうになり、ほぼ同時にほつとする。

「まさか、あのでかい鳥のところか？」

「うん」

と、特に怖がる様子もなく頷いて、爽やかに笑う。
「だつてあいつ、ゴヴァインのペットだぜ？ まあ、僕の呼びかけ
に答えてくれるか分からぬけど」

そうだったのか。

「ということは、あいつは最初からこの城を狙つてたつてわけね
「確かにこの城を落とされたら、この国は終わったも同然だ」
「人々が混乱に陥るのも予想できるし、世界にも影響が出るでしょ
う」

「そうだな……」

でもあの鳥、俺の方をじつと見て……見て、たな。見てたよな、
あいつ。

「もしかして、俺も狙われてるんじゃね？」

苦笑い気味にそう俺が言うと、みんなが視線を向けてくる。

「確かにあり得るわね」

と、冷静にネル。

「早く倒すべきだったな」

と、悔しそうにソールハロッショウ。

「いざれにせよ、放置はまずいと思つていた」

と、未だにニゲルを抱きしめているヴェルシ。

そんな彼らの殺氣を感じてか、ルアンザが言つ。

「見れば分かると思うけど、あいつ、結構手強いよ？」

「手強くてもやらないわけにはいかないだろう

と、ソールハロッショウが腰を上げた。

するとルアンザがまた言つ。

「あと、殺すのは構わないけど、その後でゴヴァインに殺されるこ
とも覚悟しといてね」

「……」

口を閉じたソールハロッショウがすっと椅子へ戻った。正しい選択

だ。
結局、
ルアンザは一人で城の屋上へ向かつて行つた。

しかし、ルアンザはまったく話を聞いてもらえない、何も情報が得られなかつた。

もつといろいろ試すとルアンザは言つてはいたが、コヴァイン含む黒妖精に知られるとまずいため、慎重に行動するそつだ。そして迎えた朝。俺は欠伸を一つして、いつもと同じようにベッドを出た。

あと一日。

「え、何でネネルまで？」

「だつてこの子はあたしの見習いよ、一緒に居ないと逆におかしいでしょ」

そう言えばそつだつた。ルアンザはネネル付きの魔女見習い。ルアンザがどこかにやけた顔でネネルの後ろに立つていた。

「そつか、気をつけろよ」

と、俺はネネルへ言つた。

「言われなくても分かつてるわ」

と、返すネネル。本当に分かつてゐるのかどうか不安だつたが、すぐには彼女は小さな声で付け足した。

「ゼーシュの方が何倍もマシつてことくらいね」

良かつた。きちんとルアンザのめんどくわさに気がづいていたようだ。

俺は頷きを返しつつ、陽光の当たる床でうとうとしているニゲルを見やつた。

「ニゲルは連れて行くのか？」

「うん、しばらくマリアドに任せるとよ」と、ルアンザ。

「下手に連れて歩いて怪我でもさせたら、ゼーシュが悲しむだらう

した

「ああ、それもそうだな。分かった」
話が終わると、ネネルがわざと歩き出した。

「じゃあ、行ってくるわね」

その後ろをルアンザが元気よく付いていく。

「行つてきまーす」

「おひ、行つてらつしゃー」

部屋から一人が出て行くのを見送つて、俺は息をついた。今田もまた、暇だ。

ヴェルシはリハビリついでに城下町の見回りに出でてしまつてゐる
し、フュエリは相変わらず掃除洗濯などの仕事優先だ。

どうしようかと思つて椅子へ座ると、ニゲルがはつと夢の世界から戻ってきたところだつた。頭を振つて慌てて誤魔化す様子が愛らしい。

俺も居眠りしようかなんて思つてゐると、扉が叩かれた。

「どうぞ」

がちやつと開く扉、現われるのは金髪の美青年と美少女。二人一緒に居るところを見るのはこれで二度目だ。

「マリアド、おはよ」

「うきげんよう、マリアド」

「うきげんよう、姫」

にっこり微笑み返してファインシーナ姫にだけ返事をする。
ソールハロッショは微妙な顔をしていたが、姫でさえ気にしない様子だったので無視した。

「マリアドが退屈していると聞いたので伺つたのですけれど、あれは？」

と、ニゲルを指さす姫。

「ああ、ペットです。ニゲルって言つて、とても人懐こい魔物なんですよ」

言いつながら席を立つてニゲルを抱き上げて姫のそばへ向かつ。

姫は少し怯えた様子だったが、ソールハロッショウが平氣そつじているのを見て覚悟を決めた。

「噛みついたり、引っ搔きはしないですかよね？」

「しませんよ」「

ニゲルを姫へ差し出すと、姫がぎこちなく両腕を出して抱えた。暴れるニゲルを俺が支えてやり、どうにかこうにか落ち着くニゲル。

「きゅっ」「

「つ、な、鳴きましたわ！」

びっくりした様子の姫だが、だんだんと好奇心が刺激され始める。

「……可愛いですね、この子」

きらきらと目を輝かせ、見つめ合ひ姫とニゲル。

その様子に俺がある提案をすると、姫は喜んだ。

「でしょう？ 良ければお貸しますよ」

「え、良いんですの？ でも、ファインシーナ、動物はあまり好きじゃないのですわ」

そう言いながらもニゲルを手放そとしない姫様。好奇心にあらがえない様子は、まるで幼い子どもだ。

俺はついおかしくなつて、笑つてしまつた。

「ええ、どうぞ。ただし、部屋から出さないようにお願いします」
主はルアンザで、俺はただ預かっているだけなのだ。目を離すことはできない。

「分かりましたわ」

そつとニゲルの毛並みを撫でて、俺の引いた椅子に腰を下ろす姫。その向かいへ座つて、俺はそれまで様子を見ていたソールハロッショによつやく目を向けた。

「で、お前は？」

「オレも、マリアドが退屈していると聞いて、話し相手にでもなうかと来てみたんだが……」

「と、昨日と同じく俺の隣へ腰を下ろす。

「ふうん、別にいいよ

からかうつもりで冷たく返すと、ソールハロッショウは無言で口を閉ざした。落ち込ませてしまったようだ。

「……冗談に決まってるだろ」

と、決まり悪くなつて告げる俺。

姫の腕からニゲルが逃げだし、彼女がいつになくお転婆に後を追う。

ソールハロッショウは、まだ何も言わなかつた。ずっと口を閉ざしては、何か考え込むようにどこかを眺めている。その視線が何だか嫌で、こらえきれずに俺は言つた。

「すべてが終わつて、俺がこの世界を救つて……その後、俺はどうなると思う？」

はつとしたようにこちらを見て、少し悲しそうに彼が答えた。

「神様の元に帰るんだろう、違つかい？」

「……分からぬ」

と、俺は思わず俯いた。

ぱたぱたと室内を駆ける姫。ニゲルが時々、楽しそうに鳴く。

「自分でも、どうなるのが分からねえんだ」

「……そう」

ソールハロッショウは悲しいとか、寂しいとか、そういう言葉を口にしなかつた。俺はそれが聞きたかったのに、何故だか言つてくれない。

「それだけかよ」

「だつて、オレがどうこう言つたつて、仕方のないことだらう。分からぬなら、なおさら何も言えないよ」

「……そうだな」

無意識に溜め息が出た。

それから、ソールハロッショウがまた遠い目をして言つ。

「それに、マリアドをものに出来るなんて、最初から思つてもないからね。いざれ別れが来るのは、最初から分かつてたことさ」

やつぱり彼は大人だ。悔しいくらいに、俺よりも大人だ。

「……それとも、やつとオレの気持ちが伝わったのかな？」

と、ふいにいつもの優しげな笑みを貼り付けて、彼が俺を見た。そんなところがまた大人にしか思えなくて、イラッとした。だから俺は言い返す。

「んなわけねえだろ！ 誰がお前なんか！」

ははは、と、ソールハロッショウがおかしそうに笑う。彼もまた、何かに葛藤しているはずなのに。

「でも……すべてが終わる前までに、ちゃんととした答えを聞かせて欲しいな」

と、真剣なまなざしをするソールハロッショウに、やっぱり俺は何も返せなかつた。答えなんて、俺の心の奥の方にしか存在しなくて、それを取り出すだけの勇気がまだない。

それでは駄目なのだと、フュエリに言われた言葉を思い出す。

『ソールハロッショウ様の気持ちに、きちんと応えていただきたいんですね』

『そして、他の方たちの想いにも気づいていただけたら……と』

俺は意氣地無しだ。ヘタレだ。自分の立場さえきちんと理解しないいくせに、偉そうなことばっかり言つて、結局何も出来ない弱虫だ。

自覚があるだけにせりて辛くて、答えを後回しにした。

「……いつか、な」

「これがゼーシュの部屋の鍵だ」と、ヴェルシはルアンザにそれを手渡した。

「何かあつたら、すぐにあいつを連れて逃げる。いいな？」

「……うん、分かった」

ぎゅっと鍵を握りしめて、服のポケットへしまごこむ。

黒妖精が現わると言われた一度目の期限が、明日に迫っていた。「コヴァインが直接現われるかどうかは別としても、防御結界が破られるのは時間の問題だものね

と、ぼやくネル。

「……はやはり、コヴァインの実力が知りたいところだな」と、ソールハロッショ。

魔女と魔術士は互いに咳きあつては、いつまでも結論を出せずにいた。

「どんなに実力があつたとしても、あいつ一人でやるわけじゃないでしょ？」「

「それはそうだが、黒妖精の頂点に立つ者を知らないのはまずいだろ？？」

そんな言い合いで飽きてきたのか、ネルが彼を睨んだ。

「だいたいねえ、何であんたはいつも偉そうなのよ？ あたしの方が先に宫廷魔女になつたのよ」

どうでも良さそうな会話だ。

「たつた一年だけだろ？ それに、年齢はオレの方が上なんだから良いじゃないか

「そーいうことじやないでしょ！ っていうか、前々から言おうとしたんだけど、あたし、貴族つて好きじやないのよね」

「ああ、そうかい。公爵でもあるオレを敵に回さうといつのか？」

「敵よ、あんたは最初から敵よ！ 女の敵！」

ヒステリックな声を上げるネネル。

やれやれ、誰かが止めに入らないとまずそつだ。

「落ち着けよ、ネネル」

仕方なく彼女の方へ行つて肩に手を置いた。

するとネネルは、何を思ったのか俺まで巻き込もうとする。

「マリアド、あんただつてそういう想うでしょっつ。何か言つてやりなさいよ」

「え……そういう言われても、なあ」

ソールハロッショの顔を見て、俺は何を言つべきか考えた。しかし、何も思い浮かばない。

「つづーか、今は喧嘩してゐる場合じゃないだろ」

「このあたしに抵抗する気つ?」

「いや、そうじやなくて」

困つたな。ネネルの機嫌をどうにかしないと。

「何とでも言つうがいいさ。オレは気にしてないから」と、席を立つソールハロッショ。

「おー、ソル!」

思わず呼び止めようと腕を伸ばすと、ネネルに袖を引っ張られた。

「放つときなさい、あんな変態」

そう言われても困るだけで、俺は部屋から出て行く彼を呆れまじりに見送る。

扉が閉まつたところで、半ば無意識に溜め息をついた。

「ねえ、マリアド」

「何だよ」

仕方なく彼女の隣へ腰を下ろし、顔を向けた。

「もしも明日、何かが起こつたとしても、あんたはまだその力を使つべきではないわ

「……分かつてるよ

場合こよみとは思つたが、言い返すとまた機嫌を悪くされそうなのでやめた。

「マリードは確かに救世主だけど、その力をいつ使うのかは、あたしたちが決めるべきだわ。この世界に生きる者として、ね」

「うん」

ネネルの言葉は正しかった。俺がむやみやたらと魔法を使うのは良いことではない。反対に俺が世界を滅ぼしかねないだけに。

「だから、その時まで待ってるのよ。世界が消えてなくなる直前まで、何が何でも魔法は使っちゃ黙田」

「……うん」

でもきっと、俺は彼女の言葉を無視したくなるんだろう。だって、明日何が起こるかなんて、誰も知らないのだから。

「何となく、分かつてきただことがあるんだ」

聖堂の裏庭で、たくましく育つ花々を眺めていた。

「たぶん俺は、俺でしかないんだって。男とか、女とか、そういうものに拘るのはもうやめて、俺は俺を受け入れるだけで良いんだって」

隣で静かに聞いてくれるジャスナ。

「でもそつしたら、俺はきっと、本当の意味で前世を捨てることがある」

異世界だと思つて今までやつて來たことが、そもそも間違いだつたのだろう。

「だから俺は、フューリに言わなければ、もつと素直になれって」

風に吹かれて揺れる花。まるで鏡のように、青く澄んだ空。

ただ俺の言葉に耳を傾け、何も言わずにいるジャスナがありがたかった。

「前世のことなんてちつとも覚えていないのに、ずっとそれに縛られてた。おかしいよな、俺つて」

「……そうですね、おかしいかもしません」と、ジャスナ。

「ですが、前世があることを知っているのは素晴らしいことです。わたしでさえ、その存在は疑ってしまいますから」

「……そっか」

神様のことも、そろそろ許してやらなくちゃいけない。そして、すべて受け入れなくては。

足元の草を踏んで、一步前へ行く。

「これから俺、もつと素直になるよ。自分に正直になつて、みんなのことも考え方直す」

ネネルとかヴェルシとか、フュエリ、ゼーシュヒルアンザに、ソールハロッショ。そしてジャスナ。

「それでせめて、俺だけでも笑つていようと思つ。出来るかどうかは、分からぬけど」

少し苦笑してみせると、ジャスナがにっこり微笑んだ。

「応援します、マリアド様」

俺はこの世界に生きる人間で、ちょっと他と違うだけで、ちょっとまだ成長途中ではあるけれど、まだ時間はあるはずだから、ちょっとずつでもいいから前進していくと思つ。

立ち止まつて空を見上げると、太陽が少し傾き始めていた。

「あ、そうだ」

くるつと彼女へ振り向いて、俺は言つた。
「ジャスナも、あまり無茶しないようにな」
はつとして、恥ずかしそうに少し俯く。

「……はい、分かりました」

彼女も他とちょっと違つから、俺と似ている。だから俺は、彼女にならどんなことだつて話せる。

そんなことを考えつつ、ジャスナの頭にそつと手を置いた。

「ジャスナがまた倒れたりしたら、巫女長やネネルが心配するから

な

「……はい」

少し困つたように頷く彼女へ、にこっと笑つた。

「それは俺だつて同じなんだけどな
そしてまた、歩き出す。

「マリアド様！」

慌てて後を追つてくるジャスナ。今だからこそ感じられる平和が、何故だかとても愛おしかった。今しかないと分かつてから、俺もジャスナも笑つていられた。

きっと彼女には、きちんと云えなきやいけないことがある。それをどんな言葉で表すべきか分からなくて、ふと足を止めてしまう。ジャスナが俺を見て、首を傾げた。

「どうしました、マリアド様？」

「ああ、いや……」

彼女の顔を見られず、その先の遠い空へと視線をやる。

「ジャスナは……その、あんまり嬉しくないかもだけど、本当に妹みたいで、可愛いなと思つて」

「……い、妹だなんてそんな、わたしには恐れ多いですっ」

わたわたと両手を胸の前で振る。

そんな彼女へ、俺はまた笑つて言つた。

「それと、俺に気を遣つのも程々にしていいよ。名前だつて、呼び捨てで構わないし」

「え、そんな……っ」

あからさまに戸惑うジャスナ。落ち着かない様子でその辺をうろしては、ちらつと俺を見て息をつき、またうろひろしては、元の場所へ戻つてくる。

「分かりました。そ、その……これからは、マリアドお姉様と呼ばさせていただきますっ」

やつぱり俺は、女として見られていたらしく、心の中だけで苦笑して、俺は頷いた。

「うん、それでいいよ」

少しずつでいい、少しずつでいいから、みんなとの距離を埋めていこう。

「で、フューリーはあいつの「どひゅつてるの?」

「は?」

田を丸くするフューリーへ、俺はもう一度問いかける。

「ソーラハロッショのこと、どう思つてるんだよ?」

夕食の片付けをしながら彼は答えた。

「ああ、それはですね……何と言いますか、好きでしたよ。憧れの方でしたし」

「今は?」

「え、今ですか?」

と、俺にちょっと呆れた顔をして見せる。

構わずに俺は返答を待った。

「その……今は、ただ応援しております。ですので、私は他の方を探しているところですね」

「ふうん、そうか」

フューリーはそこまで彼に夢中だったわけでもないらしい。

「納得した、ありがと」

きっと彼はミーハーで、俺が考えていたほど真面目な奴じゃないのだろう。とても良い奴だけれど、恋愛においては平氣で浮氣をするかもしれない。そう考えてしまつと、ちょっと彼を嫌いになりそうだ。

考えを振り切つて俺は彼へ返した。

「じゃあ俺も、お前のこと応援してるわ」

「あ、ありがとうございます」

と、どこか戸惑つフューリー。

そういうえば彼は、俺のことをどう思つているのだろう? ふいに気になつて、尋ねてみた。

「ところで、お前は俺のこと、どう思つてる?」

う思つているのだろう?

ふいに気になつて、尋ねてみた。

「ところで、お前は俺のこと、どう思つてる?」

「え？ それは……えーと、そうですね」

何故だか悩み始めるメイド。さつさと答えるよ、と言いたかつたがやめた。

「その、私はどちらかといふと中性的な方が好みなので、マリアド様にはとても魅力を感じます。ですが、やはり実際に交際をするとなると話は違つてきます……」

「で、つまり？」

「つまり……その、マリアド様はどうも受け身のようですので、同じく受け身の私としては、相性が合わないかと」

あれだ、フューリーはやはり抱かれたいタイプなわけだ。誰かに抱かれたいのだから、俺では駄目というわけ。

「あと、それに加えてマリアド様には」と、何か言いかけてはつとするフューリー。

「いえ、何でもありません。聞かなかつたことにして下さい」と、片付けをさつさと終わらせ、部屋を出て行つてしまつ。何なんだ、あいつ。悪口だつて俺は聞いてやるつもりだったのに、おかしな人だ。

それから風呂に入つて、のんびりとこれまでのことを考えた。そして、これからのことを考えた。

夜が明けて、太陽が昇る。

「おはようございます、マリアド様」

「うん、おはよう」

いつものようにベッドを出て、今日も動きやすい服を身につける。窓のそばへ寄つて、城下町を見下ろした。幸いなことに、特に変化は見られなかつた。

それからフューリーの運んできた朝食を食べた。

何とも気分が落ち着かなくて、そわそわしてしまつ。

フューリーも同じなのか、俺の食事が終わるまで何度も窓外に目を

やっていた。

朝食を終え、俺は席を立つた。

「ちょっと国王んところ行つてくる」

てきぱきと片付けをしながらフューリーは言った。

「かしこまりました。どうかお気を付けて」

「おう」

廊下へ出でしばらく歩いていると、前方に小さな人影が二つ見えてきた。

「おはよう、ネネル、ルアンザ」

先に声をかけてやると、二人は俺の前で立ち止まる。

「おはよう、マリアド。こんな時間にどうしたの？」

ルアンザが相変わらず元気に「おはようございます」と、言つた。

「国王に話を聞いてこようと思つてさ」

「そう言つと思つた。迎えに来て正解だつたわね」

と、ネネル。しかしその手には白いローブが握られていた。

「……まさかそれ、着るのか？」

苦笑いを浮かべて尋ねると、宫廷魔女ははにこり笑つ。

「当たり前でしょ」

「……分かつたよ」

仕方なくそれを受け取つて、いつものように羽織つた。

城内はやはりざわついていて、誰もがみんな、そわそわしている

ようだつた。

「ここが襲撃されたり、魔物が襲つてきた場合は、すぐにゼーシュを連れて逃げるのよ

と、俺の前を歩くネネルがルアンザへ言つ。

「了解つ」

「そして街の西外れにある、あたしの実家にかくまつてもらになさい。場所はこの前教えたから分かるわよね？」

「大丈夫、任せて」

と、頼もしい返事をするルアンザだが、その様子が逆に不安をか

き立てた。

「あと、二ゲルも忘れずに連れて行きなさいね」

「分かつてゐるつて」

ネネルが溜め息をつく。どうも能天氣な返事だった。

俺はただ苦笑して、相変わらず豪華絢爛な廊下の装飾を眺める。窓から差し込む朝の光に反射して、美しい花瓶が花をいつそう輝かせる。足元を彩る絨毯も綺麗で、ふかふかだ。

ふと顔を上げると、ルアンザが急に立ち止まつた。

俺とネネルがどうしたのかと思つた直後、窓の外を見慣れた姿が急降下していく。

「来た……！」

あのでかい鳥が前庭へ降り立ち、砂埃が舞う。

ルアンザが来た道を戻り始めて、ネネルが叫んだ。

「死ぬんじやないわよ！」

「了解！」

突然訪れた場面にも、ルアンザは明るく返してゼーシュを助けに向かう。

「あたしたちも行くわよ」

「おう」

はつとして、走り始めたネネルを追つた。胸がどきどきしていた。

城外の悲鳴が耳をつんざく。

でかい鳥のはばたきで前庭に面する窓ガラスがすべて割られていった。

騎士たちが駆け回り、メイドたちが逃げ場所を探して惑つ。城下町はきっと、悲惨な状態だ。

国王たちが集まつてゐる謁見の間まで、もう少しだつた。

この階段を上がれば、あとは廊下を真っ直ぐ行くだけ　　それに、背後で響いた轟音に気を取られてしまった。

「うわっ」

思わず振り向いてしまって後悔した。一股の尾を持つ大きな狼が城内を破壊していたのだ。

「何してるの！」

ネネルに腕を引っ張られ、慌てて謁見の間へ向かう。

不安でどきどきする心臓を抑えながら、やつとの思いでたどり着くと、そこでは国王たちが玉座についていた。

「陛下、城内に魔物が侵入してきました！」

そう言つたネネルを、国王は手で制した。

「分かつていい」

それなのに何故逃げない？ 僕が思わず声を上げようとした時、

床が揺れた。城がどんどん破壊されていく！

ネネルに視線をやると、彼女は首を横に振つた。この状況でも俺は、魔法を使ってはいけないらしい。

もどかしくて、唇を噛む。

そこへ駆けてきたのはソールハロッショウだった。

「ご無事ですか、陛下！」

その彼をも手で制し、玉座から腰を上げない国王。ソールハロッショウは何か理解すると、俺たちを見た。そして杖を構える。

ネネルも杖を手にすると、国王たちを背にした。俺もまた、彼女たちに守られる位置にいる。

「俺は、どうしたらしい？」

「生き延びなさい、その為には逃げたつて構わないわ」

ただ、それだけだった。

謁見の間に現われたのは、鋭い爪を持つた鳥型の魔物数匹と、ノヴァインだった。

「おやおや、みなさんお揃いで。なんて都合の良い奴らなんでしょう」

にやにやと嫌な笑みを浮かべたまま、ゆっくり歩み寄ってくる。魔女と魔術士は何も答えなかつた。

漆黒の髪を持つ黒妖精は、部屋の中央で立ち止まつた。そして真っ直ぐな視線を俺へ向けてくる。

「久しぶり、マリアド。また会えるなんて嬉しいよ」

心から言つている言葉ではないことくらい、すぐに分かつた。

俺はただ口を閉ざし、相手の様子を伺つ。

「あれ、無視するの？ ひどいなあ」

さも心外そうにして、ノヴァインは笑つた。

「さあ、やつちやつて！」

鳥たちが一斉に暴れ出す。柱を壊し、炎を吐いて、ネネルたちに狙いを定める。

「アキュア！」

勢いよく放出された水に鳥たちは一度退散するが、すぐに舞い戻つてきた。

そこへソールハロッショウが生成魔法を放つ。

「ヴォントス・エ・イグニス、スファエラ！」

しかし無駄だつた。宙を舞う鳥たちは軽々と攻撃を避け、小さなネネルに爪を立てる。

「小さいからつてなめんじやないわよつ！」

と、杖を振り回して追い払うネネル。

その隙にソールハロッショウが炎を使ってダメージを与える。

ノヴァインはしばらくその様子を見ていたが、また俺の方を見て

微笑んだ。

「本気、出しちゃえばいいのにねえ？」

皮肉だった。宫廷魔術士といえど、空を飛ぶ相手と戦つてすぐに勝てるわけもない。

フィアンシーナ姫と王妃が手を取り合つ。国王はただ、堂々としていた。

逃げたつて構わない。

ネネルに言われたことを思い出し、俺は一歩だけ、横へずれた。

「マリアドはおれが相手してあげるよ」

と、近づいてくるユヴァイン。

そつと、そつと逃げる隙を探す俺。

「もちろん、嫌がつたりしないよね？」

「……」

ユヴァインは嫌いだ。ソールハロッシュよりも遙かに、それはもう比べものにならないくらいに、嫌いだ。

「大丈夫、今日は殺さないよ。お楽しみは後に残しておかなくちゃもう一歩、横へ。

構わずに距離を詰めてくる黒妖精。

そしてもう一歩、逃げる。後ろへ、横へ、壁際へ。

「ねえ、何か言つてよ」

「……お前に言うことなんか一つもない」

と、相手を睨んだ。

ユヴァインはおかしそうに笑うと、両手を突き出して魔法を唱えた。

「ノクティス・グラヴィタス」

がくつと、その場にいる全員の力が抜けた。

動けなくなつて床へ膝をつぐ。……重い。透明な圧力で潰されるような身体の重さだ。

あつという間にネネルが鳥たちの餌食になり、ソールハロッシュが杖を振り回すも空振りに終わる。

「ゴヴァインは俺の前まで来ると、しゃがみこんだ。
「このまま犯してやつても良いんだけど、長時間はさすがにきつ
いんだよねー」

そして急激に解き放たれる。

はつと息を吸う俺の顎を掴んで、ゴヴァインが唇を重ねてきた。
息苦しくて抵抗するが、後頭部にもう片方の手が回されていて離
れられない。前回と違つて、濃厚なキスだつた。

一体何が目的なのか、まったく分からなかつた。自分が男である
のを良いことに、力でねじ伏せようとでも言つのか？ そんなのご
めんだ！

「……どう？ 気持ちよかつた？」

俺は言葉を返さなかつた。ただ呼吸を整えて、ゴヴァインの暗く
濁つた目を見据える。

「そんな恐い目で見ないでよ。逆に燃えりやうよ、おれ
腹立たしい。

ゴヴァインの背後で鳥たちが床へ落ちていくのが見えた。ソール
ハロッショウがネネルの名を呼び、こちらへ憎しみの目を向ける。

「ああ、そうだ。忘れるこだつた」

と、ふいに立ち上がるゴヴァイン。

「国王に王妃、そして姫様、逃げるなら今内だよ？」

がたつと席を立ちそうになる一人を国王が止め、ゴヴァインが両
手を向ける。

「ダーテ・ニー・グラスピナ」

黒い棘が三人を襲い、抵抗する間もなく玉座にはりつけにされた。
鮮血が白い大理石に滴る。三人はもう、動かない。

残酷だなんて思う暇もなかつた。

すぐにゴヴァインという名の狂氣が再び俺に向けられた。

「さあ、これでやつと楽しめる。もう抵抗する気もないかな、マリ
アドちゃんは」

呆然とする俺の口ーブを脱がせ、力任せに押し倒す。

「……っ」

彼の言つ通り、俺にはもう、抵抗するだけの力がなかつた。
コヴァインの冷たい手が身体を愛撫する。その気持ち悪さに吐き
氣を覚えても、俺は動けなかつた。

「イグニ・ブルウイア！」

炎の雨がコヴァインの背を直撃し、手が止まつた。

冷め切つた顔で振り返り、コヴァインが宫廷魔術士へ言う。

「何、まだ生きてたの？ しぶといなあ、まつたく」

「マリアドから離れる！」

ソールハロッショの声は明らかに息切れしていた。きつと身体は
ボロボロだ。

「嫌に決まつてるじやん。だいたい、今の状況分かってんの？」

「……いいから、離れろっ！」

足音が床を伝わつて聞こえてくる。近づいてくる。

そういうえばこの床、こんなに冷たかつたつけ？ いつも足で
踏んでるだけだから、知らなかつた。

「あーもつ、うるさいなあ。分かつたよ、おれ優しいから、どいた
げるよ」

と、俺から離れて立ち上がるコヴァイン。

衣服を直す彼を警戒しながら、ソールハロッショが俺の方へ来る。

「マリアド」

そつと俺の頬に触れて、優しく撫でる。

その温もりがすごく心地良くて、涙が出そうになつた。ぎゅっと
ソールハロッショに抱きつきたかつたけれど、そんな余裕はなかつ
た。

杖を手放した彼の手が、俺の乱れた服をきいちなく直す。

「逃げる」

と、彼が俺を起き上がらせて言つ。

そして支えられるまま立ち上がり、俺はそこに広がる惨状に声を

失う。

血溜まりの中で横たわっているネネルと、鳥たちの死骸。駆けつけたと思しき騎士たちも、折り重なるようにして死んでいた。

「逃げるんだ、マリアド」
ソールハロッショウが俺の前へ立つて、俺は動かない足を無理矢理動かした。

「……人間つて愚かだなあ。ふふ、笑いが止まらないよ」
壁に手をつきながら扉を目指す。

「おれがマリアドを逃がすわけないじゃん。イグニフェル」
暗い炎が俺の行く手を塞いだ。これでは前へ進めない……！
後ろを振り返つて逃げ場所を探す。

「モンス・イグニフェル！」

「カヌス・アキュア」

溶岩は灰色の水に押し流されて消えた。圧倒的な差を見せつけられて、ソールハロッショウが後ずさる。

「じゃあ、これで終わりね」

と、ユヴァインは言うと、ソールハロッショウに空氣の剣を向けた。
「ヴェントス・フェロ」

目に見えない切つ先が彼の心臓を突き刺し、貫通する。

「……つ、ソル！」

駆け寄りたかったのに、足が動かなかつた。それどころか俺はその場にくずおれて、床に膝をついてしまう。

ソールハロッショウもまたその場に落ち、ユヴァインが両手を降ろす。途端に染め上げられる魔術士のローブ。

「あー、ちょっとやりすぎたかなあ。まあ、目的は達成したし、いいか」
と、ユヴァインは呟くと、俺へ笑顔を向けた。

「またね、マリアド」

こつこつと足音を響かせて歩き出すユヴァイン。大人しく待機していた狼に手を伸ばし、共に遠ざかっていく。

「……」「魔法を そうだ、魔法を使って、あいつを、あいつを殺さなきや。」

両腕を上げてコウアインの背に手の平を向ける。

「……」

あれ、でも何で唱えたら良いんだっけ、分からぬ。黒妖精は、闇の属性を使うから……だから、そう、闇と対になるのは光。

呼吸を一つして、両手を重ねた。

ぎゅっと両手を開じて、想う。今なら出来るはず、俺の持つ魔力なら、きっと……。

そしてどこからか響いてきた言葉を、口にした。

「ヴィヴィフィカ」

覚えているのは、不透明な白がどこまでも続く景色。感覚はどれも麻痺して、ただ流れていく白を見つめていた。
突然、誰かの声がして、俺は現実を思い出す。……そうだ、帰らなきや。

「ようやく目が覚めたみたいね」「
ネネルの声だ。

「ここがどこだか分かる？ マリアド」

ああ、分かるよ。俺がいつも見ている部屋だ。手入れの行き届いた綺麗な部屋の、綺麗なベッド。

そつと顔を横へ向けると、彼女の大きな胸が見えた。

「……みんな、は？」

「大丈夫、漏れなく全員ぴんぴんしてるわ」

あれ、だけど俺、みんながユヴァインに殺されて……ネネルが、生きてる？ ジャあ、ここはまさか天国？

「あなたのせいだからね。あなたが超高度魔法なんて使うから、みんな生き返っちゃったのよ」

「え？」

視線を上に上げてネネルの顔を見る。

「ソールハロッショウから全部聞いたわ、だから何も言わないで」
彼女の身体には怪我一つ無く、まるでの時が嘘みたいだった。
これが身体蘇生魔法の力、古の光の魔力か。

ああ、良かつた。

溢れ出た涙が頬を伝つてシーツに落ちた。

「……ちょっと、泣くことないじゃない」

ネネルが呆れたように微笑んで、ただ俺を見ている。

外から賑やかな音が聞こえてきた。明るい人々の声と、何やら大

きな物を動かすような音。

「どうやら、あんたは城内だけでなく街の人々まで回復せりやつたみたいね。そのせいで、一日間も田覚えなかつた。無茶なことをした代償よ」

「……そり、だつたのか」

知らなかつた。超高度魔法に代償があるなんて。

「……後悔してたわ、あいつ。ちゃんと教えとけば良かつたつて」

「うん……」

でも、きつと俺はそれを知つても、いつなることを選んだだらうな。

ネネルが溜め息をつき、椅子を立つ。

「食欲はある？ 報告するついでに頼んでくるけど」

「……うん、ありがと」

俺がにこりと笑つと、ネネルは満足げに部屋を出て行つた。

ルアンザビーシュは無事にネネルの実家にたどり着き、今はそこで居候させてもらつているらし。

魔物たちの姿もすっかり消えてなくなり、街全体が平和な状態だつた。

「他の騎士もそうだけど、ヴェルシはまた魔物の討伐に出て行つたわ。最も、この周辺の魔物は昨日で倒しつくしたそうだけど」

フュエリにスープを食べさせてもらひながら、ネネルの話を聞いていた。

「国王たちも元気にしてるわ。今は城の復興や国内の状況について会議してゐる」

「……ソルは？」

細かく切られた肉を汁と一緒に飲み込んで、尋ねた。

「あいつも国王と一緒に会議に参加してゐるわ。魔術士として、公爵として、出来る限りのことをするつて」

そつか……みんな、忙しいんだな。

「聖堂は奇跡的に無事だつたわ。あんなことがあつたから、巫女たちは一所懸命に祈り続けているわね」

「そう」

「結局、俺だけが何もせずに眠り続けていたらしい。これじゃあ、救世主失格だな。」

思わず落ち込んでしまつと、ネネルが言った。

「分かっていないようね、マリアド」

「？」

目をあげて疑問に思つ。

「あんたがみんなを生き返らせたおかげで今があるのよ。言い換えると、あんたがあの時魔法を使わなかつたら、この国は完全に終わつてた」

「……ああ、そうか」

「じゃあ、俺、少しは良いこと出来たってことかな？」

「あんたが生きてて、良かつたわ」

まだ意識のはつきりしない感覚はあるけれど、生きている感覚は嫌になるくらい実感していた。シーツの感触や室内の匂い、彼女の高い声とスープの温かさ。指が動き、首が回り、口が開ける。確かにそこにあるものが、この目で見て取れる感覚。

「……うん」

フュエリに最後の一口を口に入れてもうつて、飲み込んだ。

「ありがとう」

と、彼に感謝を伝える。

するとフュエリも、にっこり微笑んでくれた。

「それで、これからどうするんだ？」

と、再びネネルへ顔を向けた。

「とりあえず、この城から出よつかと思つわ。両親も心配してゐるし、あの子たちもあつちにいるし」

部屋の窓はすべてガラスが割れて使い物にならなくなつていた。室内を掃除した跡はあるが、壁や天井に亀裂が入つていて、いつ崩

れるか分からぬ。

城内にはもつと他に、破壊された箇所が数多くあるのだろう。

「もちろん、あんたも連れて行くつもりよ」

「……うん」

あの時のこと思い出しそうになつて、気分が悪くなつた。胃に入れたばかりのスープを吐き出してしまいそうだ。
思わず胸を押さえた俺を、ネネルとフュエリが心配そうに見つめた。

「大丈夫ですか？」

と、俺の背中に手をやるフュエリ。

頭の中に浮かぶのはみんなが動かない光景と、不敵に笑うユヴァイン。大理石の床の冷たさに混じる、血の匂い……。

狂った笑い声が急に耳元で鳴り響き、今度こそ吐き気を覚えた。両手で口を押さえて抗つたが、逆流してしまつ。

あまりの気持ち悪さに耐えきれず、すべて吐くと、布団を異臭が埋めていった。

フュエリはただ俺の背中をさすってくれていた。その優しさに涙が溢れ、何が何だか分からなくなつてくる。

「……しばらく療養した方が良いわね」

と、ネネルの静かに咳くのが分かつた。

その夜、フュエリは俺の荷物をまとめてくれていた。

「……フュエリは、俺と一緒に行くのか？」

椅子に座つてぼーつとしながら尋ねると、彼は手を止めずに答えた。

「いえ、私はここに残ります

「何で？」

てきぱきと服や靴、その他必要なものを鞄に詰めていくフュエリ。「メイドの多くが仕事を辞めて故郷へ帰つてしまつたのです。だから、この城は人手が足りていません」

「…… そうなのか」

「はい。ですから、私はこの城のメイドとして、最後まで従事をさせていただくつもりです」

それは正しいことだと思った。

「そうか、それで良いと思うよ」

「はい…… ありがとうございます」

フューリーはしばらく余念なくなるけれど、不思議とその寂しさを俺は受け入れられた。

「どうか、気をつけて」

「それはこちらの台詞ですよ、マリアド様」

と、にこり笑う。

おかしくなつて、俺も少しだけ笑つた。

歩いて行ける場所なのに、俺の体調が思わしくないので馬車で移動していた。

街の至る所が破壊されていたけれど、そこにいる人々は皆、明るい顔で作業を続けている。

広場を南へ進み、大通りを右へと曲がる。

「こっちの方に来るのは、初めてだな」

窓外の景色に目をやつたまま呟くと、ネネルが笑った。

「そうでしょうね、この辺りは住宅街だから」

路地裏には「じちや」「じちや」したアパートが建ち並び、時折屋台が流れしていく。

色んな食べ物の匂いが混ざり合って、俺は窓を閉めた。

「気持ち悪い」

「あんた、神の使者じゃなかつたら、きっと死んでたわね」と、呆れるネネル。

それは冗談ではなく本当のことだった。俺でさえこんななのだから、古代の人々の気が知れない。

「まあ、外れの方はのどかだから、ゆっくり休めると憩うわ」

まるで姉のように優しい口調で言われ、俺は頷いた。今は体調を整えることが優先だ、三度目の期限まではもう長くないのだから。

広がる畠は魔物に踏み荒らされたようで、痛々しい光景になつていた。

「マリアドさん！」

と、馬車を降りた俺に駆け寄つてくるゼーシュ。

「ゼーシュ、久しぶりだな」

「はいっ、マリアドさんをお元気そうで何よりです」

相変わらずの彼女に、俺は「ありがとうございます」と、笑みを返す。

そして歩き出そうとするが、ネネルが腕を差し出してきた。

「捕まらなくて大丈夫？」

「……大丈夫だ」

と、思わず見栄を張る。

一步踏み出して歩きだしたが、今度はゼーシュに腕を差し出された。

「ゆっくり行きましょう」

「あ、ああ、ごめん」

どうやら俺の歩みは見ていて危なつかしいらしい。ちくしょう、悔しいな。

そして少し歩くと、一軒の民家にたどり着いた。

「ただいま」

と、ネネルが扉を開けた途端、駆けてきた二ゲルが俺へ飛びつく。

「おわっ」

バランスを崩しそうになる俺をゼーシュが支え、無事に胸の中に収まつた二ゲルが嬉しそうに鳴いた。

「きゅうっ！」

「こり、二ゲル！ つて、大丈夫か？」

と、後から駆けてくるルアンザ。

「ああ、ゼーシュのおかげでどうにか」

と、俺は困りながらも苦笑した。

その後ろからネネルの父母と思しき中年の男性と女性がやつて来て、にっこり笑う。

「よく来たね、さあ中に入りなさい」

「娘から話は聞いてるわ、どうぞ楽にしてちょうだい」

「あ、はい……ありがとうございます」

そして中へとお邪魔する。

ネネルが一般家庭に育つたことは知っていたものの、思ったよりも大きな家だつた。

「まずは部屋、案内するわね」

と、階段をさつさと上がっていくネネル。

その後をルアンザとゼーシュに支えられながら追つ。ニゲルもまた、後ろから付いてきていた。

階段を上りきると、左右にいくつかの扉が見えた。

「ここが僕たちの部屋だよ」

と、ルアンザが指さすのは、手前から数えて一番田の左側にある扉だった。

そこを通り過ぎて、ネネルが立ち止まつたのは一番奥の部屋だった。

「マリアドの部屋はここよ。昔、あたしが使ってた場所ね」
取つ手を引いて開けると、シンプルなベッドが目に入る。
室内に足を踏み入れて、鞄をその辺に置いた。宿で貰つたこの
広い個室だ。

「あたしは隣の部屋にいるから、何があつたら呼んでみようだい」と、壁の向こうを手で示すネネル。

ベッドの座り心地を確かめてから、俺は顔を上げた。

「うん、分かった」

ゼーシュとルアンザが俺の両隣を占領し、ニゲルが膝の上へ乗っ
かつてくる。

「じばらぐこの部屋でのんびりしてなさい。部屋から出たくなれば、食事は運んであげるわ

「うん、ありがとう」

ネネルは口を閉やすと、窓の外を指さした。

「ちなみに、あっち側に見えるのがヴェルシの実家よ

その向こうに見えるのは、青い屋根の立派な屋敷だった。

「素敵なお家でしょ？あの子、貴族とは違つけど、代々王家に
仕える家系なのよ」

「ああ、なるほど」

あれほど立派な家である理由が分かり、納得した。だからヴェル
シも騎士として、王家に仕えているのだろう。

「他に何か聞きたいことはない?」

「うん……大丈夫、かな」

と、俺が答えると、双子が同時に言った。

「何かあれば僕が助けてやるぜ」

二人揃うと騒々しい。

「だそうだ」

と、ネネルへ苦笑を向ける俺。

彼女も苦笑いをすると、部屋を出ていった。

「それじゃあ一人とも、よろしく頼むわね」

この辺りは穏やかだ。空気も氣のせいか澄んでいるように感じられるし、街の喧噪も聞こえない。

「うん、美味しい」

と、ネネルに運んできてもらった夕食の感想を言つ。

「でしょ?」

自慢げにする彼女がおかしくて、思わずにやける。意外に母親つ子みたいだ。

「何笑つてるのよ」

「いや、何でもないわ」

自分のペースで食事に集中する。少しづつではあるが、食欲も回復してきていた。

ネネルは俺から視線を外すと、そっと窓際へ寄つた。

開け放したカーテンを閉めて、夜の冷氣を遮断する。そしてまた、俺の方へ。

「彼らは、どうやってこの世界を滅ぼすつもりかしらね」

と、憂鬱そうに呟く。

俺は何も答えなかつた。無視したのではない、返す言葉がなかつたのだ。

「あいつの連れている魔物も半端じゃない強さだし……次こそ先手

を打たなきや

「……そうだな」

何か良い案があればいいけれど、今のところは為す術がない。

ネネルは溜め息をつくと、調子を変えた。

「まあ、いいわ。あんたはとにかく、体調を戻しなさい。それから考えましょ」

「おひ

そつと開く扉の音。次に軋む床の音。

もぐもぐと寝返りを打つたら、何かがのしかかってきた。

「……おひぱい揉んじゃつそ？」

ぱちっと両手を開けてはつとする。

「ルアンザ……つ

「おはよう、マリアド」

「こひとする彼の下にいるのは紛れもなく俺で。他人が見たら明らかに勘違いされる体勢だった。

「……おはよ」

ルアンザを退けるように起き上がり、両腕を上げて伸びをした。

ああ、眠い……。

ベッドを下りたルアンザがカーテンを勢いよく開けた。途端に外

光が差し込んで眩しい。

光から顔を背け、欠伸をした。

「で？」

ルアンザは俺のそばまで来ると、じやつと耳打ちをする。

「ゼーシュがすげーの見つけたんだ

「すげーの？」

疑問符を浮かべて相手を見る。

「うん。でかいから連れてこられないんだけど、マリアドに一番こ知らせたくてさ」

と、あどけない笑顔を浮かべるルアンザ。

「……ふうん」

あまり興味も沸かなかつた為、俺はまた欠伸をする。するとルアンザに腕を引っ張られた。

「来て」

「え？ あ、ちょ、おい！」

ベッドから無理矢理出され、手を引かれるがままに部屋を出た。裸足だつた。

階段を駆け下りてそのまま外へ。

「あら」

花に水をやつていたネネルの母の横を通り過ぎ、裏へと回つた。そこから木々の並ぶ、林だか森だか分からぬ道を進んで、ようやくルアンザが立ち止まる。

「連れてきたぜ！」

「ルアンザ、マリアドさんに無理をせぢや駄目つて言つたでしょ」と、ゼーシュの声。

息を切らせながら視線を上げると、そこには純白の美しい馬が立つていた。地上で見る馬よりも身体が大きい。

「……こいつが？」

ゼーシュが俺の方に寄つてきて、ルアンザと逆に優しく手を引いてくれる。

「はい。魔物の一種なんですが、中でも聖獸と呼ばれてるやうで……」
そつと近づいていくと、その意味が分かつた。白馬の背に翼が生えていたからだ。

ゼーシュに促され、手を伸ばす。

馬にしてはやわらかな毛だつた。手の平全体で触れると、その体温が伝わってくる。

「僕たち黒妖精ですから手を出すことが許されない、とっても神聖な魔物なんだ」

と、ルアンザも白馬を撫でながら言つた。

「一説には、地下世界を見守る神の使ひつてこなされてて、なか
なか見ることも難しいんだけど」
「ゴヴァインはどうやら、すべての魔物をこちらに送つてしまつた
みたいです」

白馬は大人しかつた。

ふいに俺の顔を見て、何か訴えるよつな目をする。神の使ひつて
ことは、俺と同じ立場になるのだが……。

「お前も、もしかしてゴヴァインのじよつとしてこることを止めた
いのか？」

白馬が頷く。

そのたてがみを撫でてやりながら、俺も頷いた。

「うん、そうだな」

止めよつ、あいつの企みを。そしてこの世界を救おう。
ゼーシュヒルアンザが目を丸くして俺を見ていた。

「分かるんですか、マリアドさん」

「なあ、何て言つたんだ？」

俺は少し苦笑しながら、一人へ言葉を返す。

「いや、別に言葉が分かるわけじゃなくて……その、何となく伝わ
つたんだ。こいつの思つてること」

二人は顔を見合わせると、何故だか安心したように息をついた。
「ですよね、マリアドさんに分かるはずありませんよね」

「マリアドはどうかかつていうと人間だもんな。あー、びっくりし
た」

さりげにひどいことを言われた気がするが、俺は気にしなかつた。

「で、こいつの名前は？ もう付けたんだろ？」

ネネルは呆然としていた。

朝食を終えてすぐに白馬の元へ連れてきたわけだが、彼女は我が目を疑うかのように呆然としていた。

「これ、飛ぶの？」

「当たり前じゃん！」

と、ルアンザが声を張り上げる。

魔女は少し考える様子を見せ、次に俺を見た。

「……それで、どうするつていうのよ？」

「こいつは聖獣だ。で、空が飛べる。」
「……こいつならコヴァインたち黒妖精は殺さないから、情報収集がぐつとやりやすくなる」

「……そうなの？ ルアンザ」

と、黒妖精を見やるネネル。

「ああ、マリアドの言つ通りだぜ。それにアルブスも協力するつて言つてる」

白馬アルブスは答えるようにまばたきをした。

ネネルが息をつき、先を促す。

「で、具体的にはどうするつもり？」

「もちろん、ゼーシュとルアンザがこいつに跨つて、空から情報を集めるのさ」

「……そう、それならいいわ。でも気をつけなさいね、二人とも」と、ネネルに忠告される双子。

「はい」

「分かってるよ」

アルブスが誰に言われるでもなく両足を折つて身体を低くした。
そこへ慎重に跨るゼーシュとルアンザ。

「これで、ちょっとは前に進めそうだな」

「ええ、そうね」

「人がその背に乗ると、アルバスがゆっくり立ち上がった。

「それでは、早速行つてきますね！」

「行つてくるな。 飛べ、アルバス！」

数歩地面を駆けてから、ふわりと風に乗つて翼をはためかせる。あつという間にアルバスは空高く駆けていき、二人の姿も見えなくなつた。

二人に置いて行かれたニゲルと部屋で遊んでいたら、ネネルが俺を呼んだ。

「マリアド、ちょっと来て！」

立ち上がつて部屋を出る。

「何だよ？」

ニゲルに後を追われながら階段を下りると、久しぶりに見る顔がリビングで待つていた。

「マリアドお姉様！ お元気そつで何よりです」
ジャスナだ。

「ああ、久しぶり」

俺の前へ来て心配げな顔をするジャスナ。

「お身体の具合はどうですか？」

「うん、今日は良い感じかな」

その様子を見ながら、ネネルがもう一人の客人に呴くのが聞こえた。

「いつからお姉様になつたのかしら？ 今まであんたしかそう呼ばれてなかつたのに」

「ふふ、そうだつたな。二人の間で何かあつたんだろう」
と、すっかり健康を取り戻したヴェルシがおかしそうに笑う。どうやら、ジャスナにお姉様と呼ばれるのは、俺と彼女だけらしい。

「それで、今日はどうしたんだ？」

「はい、陛下直々の命で、巫女たち全員、故郷へ帰るよつ言われたのです」

と、ジャスナは少し寂しそうにした。

「ですから、わたしは今日からヴェルシお姉様のお家にお世話をなることになりました、挨拶をしに参りました」

「そつか、なるほどな」

聖堂で世界のために祈るのも良いけれど、国王は彼女たちを聖堂から解放してやることを選んだらしい。

俺は納得し、ジャスナの頭を軽く撫でてやった。

「じゃあ、これからはこつでも会えるな」

「はいっ」

ふいに家中を見回してヴェルシが尋ねた。

「ところで、あの二人は？」

さつきまで俺の足元にいたはずの二ゲルを、いつの間にか彼女が抱きしめていた。

「空を飛んで情報収集してゐるわ

「空？」

と、首を傾げるヴェルシ。

「あつちの世界で聖獣とされる魔物を見つけたから、それを使ってあいつらの作戦を知りうつていうことよ」

ネネルがそう説明をすると、二ゲルが後押しするように鳴いた。

「きゅうきゅう…」

思わずそちらに顔をやり、微笑ましくなる。

つい笑い声を漏らしてしまい、俺は三人の視線を集めた。

二ゲルまでもが俺を見て首を傾げる。

「ああ、いや……何か、良いなと思つてわ」

この世界の、この今の、この平和が愛おしかった。

彼女たちに俺の想いが伝わったかどうかは知らないが、ジャスナは微笑んでくれた。

「あの、ヴェルシお姉様に懷いてるのって、二ゲルちゃんですよね？」

そういや、ジャスナは二ゲルと会うのはこれが初めてだったな。

「そつそつ。可愛いだろ？」

「はい……魔物なのに、全然恐くないです」

と、不思議そうにする。

魔物は魔物でも、ニゲルやアルブスのよう人に懐くやつもいる。人に従うやつもいるし、人を襲うやつもいる。コヴァインのように、魔物を人殺しの道具にするのは耐えられないが、魔物にもそれだけ多様性があるということだ。

「魔物について研究するのも、面白いかもしませんね」と、ジヤスナはくすり笑つた。

「いや、まだ確証は持てないんだけど……」

その夜、ルアンザは帰つてくるなり、自分が模写した地図をテープルに広げた。

現在地を確認し、西南に広がる森の中央辺りを指さす。

「ここだつたよな？」

「うん」

と、頷ぐゼーシュ。

ルアンザは筆を取ると、そこへ丸い印を付けた。

「それは何なの？」

「描きかけの魔法陣だ。それがここにあつたんだ」

はつとして、思わずみんなと顔を見合わせてしまつた。

ルアンザは筆を置いて真剣な口調で言つ。

「たぶんコヴァインは、魔法陣を他の場所にも描かせているはずだ」

「それでどうなるんだよ？」

「一斉に魔方陣を起動させるんだよ」

と、ルアンザが俺を見た。

「たぶん、こうやって一直線に結ぶんだと思う

大陸の中央、テリュス山脈の一部を通つて指で横線を描く。

「起動のきっかけはコヴァインの魔法陣だと思つから、その場所さえ分かれば先手を打てる」

ネネルはただ、その地図を眺めていた。

魔法陣による魔法で世界を焼き尽くす、か……言われてみれば、

なかなかに現実的な方法だ。

しかし、それをどうやって阻止するところのだろう？「ゴヴァイ

ンに近づくのは危険じゃないか？ ただでさえ、俺は……次会った

時、彼に何をされるか分かったものじゃないのだ。

「じゃあ、あんたたちは明日も情報収集ね。あたしたちはここで作戦を練りましょう」

と、ネネルが話をまとめて席を立つた。焦ることはない、その態度が言っていた。

明くる朝、空は晴れていた。

身体の調子が昨日よりも良くなっていることを感じ、今朝は自分から部屋を出た。

そして階段を下りていくと、黒い頭が一つ、玄関へ向かうのが見えた。

食卓の方へ行き、朝食中のネネルに声をかける。

「どうしたんだ、あの二人」

母親の手作りパンを頬張りながらネネルは言った。

「ちょっと旅に出てくるわづよ」

「旅？」

その向かいへ腰を下ろすと、台所に立っていた彼女の母が俺の朝食を用意してくれた。

「ええ、嫌な予感がするから、おおまかに世界を回つてくるって」「ふうん……で、いつ帰るって？」

「明日の夜」

グラスに牛乳が注がれ、独特の匂いが鼻を突く。

「だから旅か」

と、喉を潤そとグラスを持ち上げたら、ネネルがふと俺の顔を見た。

「その牛乳、セリンの家のだから

どうでもいい情報だった。

びっくりさせるなよと思いつつ、口を付ける。そういえば、牛乳を飲むのってこれが初めてかも。食事中に飲むのは水か紅茶で、夜はアルコールがほとんどだ。特にこの家では当たり前のようアルコールが出される。

「……濃いな

「お腹、下さないようにね」

と、ネネルがからかうように言った。

むかつぐが、何か言い返す気が起きないので話題を変えた。

「で、今日は？」

ネネルは口の中を空にしてから、目を上げて考へる。

「とりあえず、どうやって対処するか考えましょ。午後からは種

時くわよ

「種？」

何かの比喩かと思つて聞き返す。

「そう、種。ヴェルシの庭が魔物に荒らされちゃつて、ひどい状態なんですね。だからみんなで、土を耕して新しく種を時くのよ」

「ああ、そういうこと」

何でこんな時に、と思つたが、考えてみればそうして身体を動かすのは、俺にとつては良いリハビリになる。

「今日は天気も良いし、それが終わったらお茶会でもしましょ。て、ジャスナが言つてたわ」

「そうか……良いかもな」

いつしてのんびりしていられるのも明後日までだ。それなら、今は出来るだけ現実から離れて、みんなで楽しもうと思つた。

じょうりで水をやるジャスナの後をゆっくりと追う。

種を蒔いたのは昨日のことなのに、早くも芽が出始めていた。水を浴びたその姿は力強く、まるで太陽を睨んでいるかのようだった。

「また荒らされないと良いけどな」

ぽつりと呟くと、ジャスナが俺を振り返った。

「そうですね、何にも邪魔されずに育つて欲しいです」

そしてまた水やりを再開し、歩き出す。

足で踏みつぶせそうな、普段は見落としがちな小さな芽。この世界には人間だけでなく、こうした小さな命を始めとして、たくさん命がひしめき合っている。たぶん、俺がやろうとしていることは、それらすべてを守ること、救うことなのだ。

「……結構、責任でかいよな」

思わず苦笑した。失敗するとは思えないが、あまりにも重すぎる荷物だった。万が一失敗したら、どんなことをしても償いきれない。ジャスナは聞こえていなかつたのか、それとも聞こえなかつたふりをしているのか、何も反応しなかつた。

花壇をぐるっと一周し、彼女はじょうりに残った水を適当なところにかけた。

それから顔を上げて俺へ言つ。

「ちょっと休憩にしましょ、マリアドお姉様」

「うん、そうだな」

お姉様と呼ばれるのにも慣れてきて、俺は彼女へにっこり微笑う。そして屋敷内へ入るうと玄関へ向かうと、見知った顔がこちらへ近づいてくるのが見えた。

「あ……」

思わず立ち止まってしまう。ジャスナもそれに気がつくと、慌てて身だしなみを気にし始めた。

「こちらまで来たところで彼が立ち止まる。久しぶりに見るその顔は、俺を見てどこか戸惑っているように見えた。

「久しぶり、マリアード」

相変わらず優しい顔で、どこか安心したように口元を緩めるソールハロッショ。

「おう、久しぶり」

それなのに、何故だか分からぬけれど、久しづく。久しづくに会うからなのか、他に理由があるからなのか、まだ俺には分からない。

「つまり、原理としては防御結界と同じだけれど、その効果は正反対というわけだ」

屋敷の広間で、ソールハロッショは呟いた。

テーブルに置かれた地図は、印が一つ付けられたきりだ。

「普通なら、その魔方陣を壊すしかないが……」

「無理ね、時間がないもの。それに、いくつ魔方陣が作られてるのかも分からぬ」

と、腕組みをしながらネネルが返す。

ソールハロッショは頷くと、地図を見ながら考えを次々と口にする。

「きつかけの魔方陣を壊すか、途中で魔力の流れを遮るか……出来たとしても、多少の犠牲はやむを得ないな」

ゼーシュとルアンザの持ち帰る情報次第で、こちらの考えはがらつと変わる。

今はまだ、確かな可能性のない推測をして、待っているしかなかつた。

「それにも、これだけの規模でやるっていうんだから、相手はかなり本気よね」

と、ネネル。

腕を解いて前屈みになると、地図の端から端を指で示した。

「海を挟んではこるけれど、場合によつてはそれすらも焼き飛ばされるわよ」

「文字通り、火の海になる可能性もあるといつことだ。

「……確かにそうだろうね」

と、ソールハロッショ。

魔力は魔方陣の数、魔法を使用する者の数だけ威力を増す。世界を滅ぼすぐらいだから、きっと簡単な数字じゃない。

ネネルが息をつき、ソールハロッショは彼女の顔を見た。何か通じ合つようにして、ふいと互いに目を逸らす。

「やっぱり今は、待つしかないんじゃねえの」

と、俺が口を出すと、彼女たちはそれぞれ適当に頷いた。

何となくそれが気に食わなくて、広間の端でニゲルと遊んでいるヴェルシとジャスナに目をやつた。俺も混ぜてもらおうかと思い、席を立とうとする。

すると、俺より先にネネルが立ち上がった。

「先に家、帰つてるわね」

と、広間を出て行つてしまつ。出遅れた。

タイミングを逃してもやもやしている俺に、彼が声をかけてくる。

「ごめん」

唐突だった。

「何がだよ？」

と、俺が返すと、ソールハロッショは申し訳なさそうな顔をした。「忘れていたわけじゃないんだ。ただ、実際に使わることになるとは思わなくて、言い出せなかつた」

超高度魔法のことだった。

彼はそれに代償があることを俺に言わなかつたせいで、俺が丸一日眠つていたことに責任を感じていた。

「本当にごめん……」

と、彼が俯く。

俺はどう返そが迷つていた。だつて、それはもう過ぎたことだ

し、俺は今、いつして元気にやれているのだ。今さら謝られても、困る。

「謝ることじやねえよ。別に俺、何ともないしわ」
できるだけ明るく言つたつもりだったが、ソールハロッショは顔を上げなかつた。

記録では、古代に身体蘇生魔法を行つていた者はみな、早死にしたといつ。小さな怪我であればその代償は小さくて済んだが、死者を生き返らせるには相当な魔力を消費した。それはつまり、俺が陥つた状況は当然で、むしろやりすぎなくらいだったということ。

「あの時、オレは君を守れなかつた。それに加えて、マリアドにあ

れほどの超高度魔法を使わせてしまつた

「…………うん」

気にしてないと言つたかったけれど、今はただ彼の話に耳を傾けた。

「君が田を覚ましたと聞いても、すぐに、会いに行く気になれなくて……遅くなつてしまつて、ごめん」

何度謝るつもりだらう。

珍しく本氣で落ち込む彼が、痛々しかつた。俺のことで苦しんでいるだけに、こっちまで息が詰まりそうだ。

深呼吸を一つして、俺はソールハロッショへ言つた。

「気にしてねえよ。全然俺、気にしてないから……だから、顔上げるよ」

向こうつにゅっくりと顔を上げて、彼が俺を見る。

「許して、くれるのかい？」

「当たり前だろ。つか、許すとか許さないとかじやねえよ」

と、俺はちょっとだけ彼の方へ身体を向けた。

「もう終わつたことなんだから、気をしたつてしまふがねえだろ」
ソールハロッショは曖昧に頷いた。まだ納得がいかないらしい。

「…………そうだね、マリアド」

と、ポケットを探つてためらう。何だ？ 取り出すなりさつと

取り出せばいいのに。

ふと俺の目を見つめて、ソールハロッショウが席を立つ。

そして、俺の前まで来てひざました。

「どうか、受け取って欲しい」「

と、ポケットからそれを出す。

その手の中にあるのが指輪だと気づき、呆然とする俺。これって

もしかして、プロポーズか？ え、ちょっと待てよー。

ソールハロッショウは遠慮がちに微笑むと、俺の右手をとつて優しく薬指に指輪をはめた。

「魔法に対する防御力を上げる指輪だよ。彼の前では無力かも知れないけれど、無いよりはマシだと想つ」

「へ？ 防御？」

どうやらプロポーズじゃなかつたようだ。びっくりした。超びっくりした。

「あの時のよう、相手に屈して欲しくないんだ」

「……あ、ああ」「

そうだった。彼は俺がユヴァインに向をされたか知つていてるのだ。

……思い出したくなくて、両手をぎゅっと閉じた。

察したソールハロッショウが立ち上がり、そつと俺を抱きしめる。

「もう一度と、マリアドを傷つけさせないよ」

あの時求めた体温に、俺は安堵の息を吐いた。俺には彼がいる、みんながいる。今度こそ、次こそあいつを阻止しよう。それで、この世界を守りきりう。

2 僕になら

日が暮れた頃、ソールハロッシュは自分の家へ久しぶりに帰ると
言つて、去つて行つた。

ゼーシュとルアンザはまだ帰つて来ていなかつた。

「……何となくムカつくわね、その指輪」

と、ネネルは俺の右手を見つめて言う。

「何でだよ」

と、俺は言葉を返したが、ネネルは無視してどこかへ行つてしまつた。まったく何なんだ。

仕方がないので一人の帰りを待とうと思つて居間にいたが、夕食を終えても彼らは帰つて来なかつた。

何かあつたんじゃないかと俺たちが心配し始めた翌日の朝。

「ただいま！」

「ただいま帰りました！」

と、元気な声が二つ。

ネネルは戻つてきた二人の顔を見るやいなや、怒鳴り始めた。

「何してたのよ、あんたたち！ 帰つてくるのが遅いわよ！…！」

彼女は俺よりもひどく心配していたようだ。

ちらつと顔を見合わせる双子だが、すぐにルアンザが口を開いた。

「それよりも大変なんだよ！」

何やら切羽詰まつた表情だったので、何か言おうとするネネルを遮つて俺は問う。

「大変つて、何が？」

「地下の奴ら全員が、強制的にこっちに送られてるんだ」

ネネルがはつとし、俺も笑うのをやめた。

ヴェルシの屋敷へお邪魔して、広間で顔を突き合わせる。

「魔方陣はここ、やつぱり僕の予想通り一直線に並んでいた」と、次々に印を付けていくルアンザ。その数はざつと五十くらいだろうか。

そして現在地である城下町より北東、都市から少し離れた辺りに一重の印をつけた。

「ゴヴァインは、ここを起點にしようとしてる」

「その辺りって、あたしが奴と遭遇した場所だわ。まさか、下見でもしてたってわけ？」

と、ネネル。

「そういうことかもな。一度、地下の世界に戻つてると、俺は口を開いた。

あの時のゴヴァインにはまだ、戦う意志などなかつたのだろう。ただこちらの世界を見に来ていたわけだ。でも、どうしてあいつ自ら？

ふと疑問がわき上がり、無意識に首を傾げてしまつ。すると、ルアンザがネネルを見た。

「あいつと会つた時、ゴヴァインは何してたか分かる？」

「何つて……すれ違つたときに違和感を覚えただけよ？ だから相手を追つて……そうだわ、あたしが張つた防御結界を見てた！」

玄関から来訪者を告げる鐘が鳴り、ヴエルシが席を立つた。

ルアンザはしばらく考え込み、俺たちはただ彼の言葉を待つ。そしてヴエルシがソールハロッショを連れて戻つてくると、一度そちらに目をやつてからルアンザは口を開いた。

「たぶんあいつは、大地そのものを破壊しようとしてる」思わずはつとした。

「防御結界の魔力の流れを見極めて、その隙間から自分の魔力を流し、すべての魔方陣へ繋げるんだ」

ソールハロッショが静かに空いた席へ着き、地図を眺める。

「焼き尽くすのは表面上で、本来の狙いは大地を内側から破壊するということだね？」

「そうだ。だからあいつは僕たち黒妖精だけでなく、すべての妖精族をこの世界に送り込んでる」

「あの、その……大地が破壊されてしまつたら、世界はどうなるんですか？」

と、ジャスナが控えめに尋ねた。

「地上の大地は無くなるだろ？ そして、地下の世界は壊れた大地に埋もれる」

埋もれる ？

それはつまりどうこいつことなんだ、と、俺が問う前に黒妖精は言い切つた。

「ユヴァインは両方の世界を、同時に滅ぼそうとしてるんだ」だから大変なことになつてるんだよ。と、苦々しく付け加える。ネネルとソールハロッショウがそれぞれに溜め息をついた。俺も同じ気持ちだが、やがてそれは怒りに変わる。

「そんなこと、絶対に許さねえ」

何が何でも止めてやる。それであいつをひとつまえて、罪を償わせるんだ。

「落ち着いて下さい、マリアドさん」

と、ゼーシュが優しく言葉をかけた。その後にニーゲルが俺の足元へ来て一声鳴く。

はつとして、俺は息をつくとニーゲルを抱き上げた。

「それで、止めるにはどうしたら？」

と、ヴェルジが問う。

「ユヴァインに魔方陣を発動させないのが一番だけど、他の魔方陣はすでに横に繋がつているから、それだけで威力を發揮するかもしない」

「一つ壊したところで、別の魔方陣がちょっとでも魔力を宿していれば意味無いものね」

元々、魔方陣は単体で魔力を宿すものだ。その時は何も起こらなければ意味ないが、ずっと放つておくことは出来ない。

ふいにソールハロッショウが地図の、南の方を指さした。

「彼の居場所を世界の中心とするなら、その反対はここだ。大陸ではないが、いくつか島が浮かんでいる」

そこは小さな国だつた。人口も少なく、文化的発展が遅れている途上国だ。

「まさか……反対側から攻めよつて言つの？」

と、ネネルが横目に彼を睨む。

ソールハロッショウは表情を変えずに、堂々と説明をした。

「島と言つても、海底で大陸とは地続きになつてゐるだろう？ そ
れなら、相手の魔力が広がる前に反対側から魔力を流せば、大地が
壊されるのを阻止することが出来る」

「でも時間が合わないと無理よ？ だいたい、いつあいつが魔方陣
を発動させるかも分からぬのに」

と、ネネルは提案を却下しようとしたが、ルアンザがそれを遮つ
た。

「出来るかも」

「え？」

身を乗り出して地図を示す。

「時間はどうでも良いよ、すべての魔方陣が発動してからでも遅く
ない。だつて、マリアドになら、大地を蘇らせることだつて出来る
だろ？」

みんなの視線が俺に集まつた。確かに、俺ならそれも出来なくは
ないだろう。ただ……。

「 そうだな、それで行こう」

と、俺は言葉を発した。

何も知らないルアンザが頷いて、

「よし、決まりだ！」

と、叫ぶ。

ソールハロッショウが反対しようとするのをネネルが手で制し、何
も知らないゼーシュが言った。

「ですが、ゴヴァインはどうするんですか？ 現われると知つていて、見逃すわけには行かないでしょ？」

「そうだ、彼を捕まえて、もう一度と危険なことが出来ないようにならなければ。」

「そうね……本来なら宫廷騎士団に頼むところだけれど」

「無理だうな。陛下は騎士団にも帰郷を許し、城の警備すら手薄になつていて」

と、ヴェルシが返す。

それにこのことを知つてているのは俺たちだけ。

「仕方ないわね、戦力を二つに分けましょ」

ネネルがそう言つて双子の顔を見た。

「ゴヴァインを捕まえるにはどうしたら良い」と思つて。

「可能なら、ぼこぼこに殴つて氣絶させる」

と、即答するルアンザ。ビルやら彼もまた、ゴヴァインに対して怒りを感じているらしい。

「魔法で、どうにかできたりは？」

と、逆に聞き返すのはゼーシュだ。相変わらず対照的な一人である。

ネネルは腕組みをして考え始めた。相手の実力をすでに知つているだけに、宫廷魔女としてどう対処すべきか悩んでいるようだ。

一方のソールハロッショは、憂鬱そうにみんなから視線を外していた。

「あの、わたしなら……一時にその方の意識を失わせられます

と、突然ジャスナが言ひだした。

「しかしジャスナ、それは

「良いんです、ヴェルシお姉様。これはわたしにしか、出来ないこ

とですから」

いつになく力強い声で言い切る巫女。確實に肉体と精神を分離させられるのは彼女だけだった。

その覚悟を聞いて、ネネルがルアンザへ問う。

「ルアンザ、相手の動きを鈍らせる魔法、使えるわよね？」

「え、うん。ユヴァインに効くかは分からぬけど」

「短い時間で構わないわ。その隙にジャスナがあいつに近づければ、

それで完璧なもの」

3 世界の中心へ

ルアンザとジャスナがユヴァイン確保に向かうことが決まり、ゼーシュが言った。

「僕も一緒にきます。ルアンザだけだと不安だし、万が一失敗しても助けられるように付いていきます」

彼女らしい選択だつた。

残るは宫廷魔女と魔術士、宫廷騎士団の第一隊長。どれも一般人からすると手強い人物なわけだが……。

「移動手段はどうなんだ？ やっぱリアルブスか？」

と、俺が尋ねると、双子が同時に頷いた。

「そうなるだろうな」

「そうなるでしょ？」

時間はもう残り少ない。当然、馬車を使う余裕はなく、自由に空を駆けられるアルブスが最適だつた。

「でも北へは今から出れば十分間に合つわ。アルブスが必要なのはそっちだけでしょ？」

と、ネネルが言うと、ルアンザが即答した。

「確かにそうだけど、マリアドを送つて戻つてくる余裕はあると思う。こつちは、急げば半日もかからないだろうし」

「……じゃあ、あたしはここに」

「と、何故か戦力から外れようとするネネル。

「そう言えば、ネネルは高いところが苦手だったな」と、ヴエルシがくすつと笑うと、魔女が切れた。

「別に苦手じゃないわよ！ ちょっと恐いけど、別に空を飛ぶくらいい……が、我慢できるわよ！」

彼女は高所恐怖症だつたらしい。それならアルブスに乗りたくない気持ちも分かる。

しかし、今はそれどころじゃないのだ。

現在の状況を思い出し、ネネルが重たい溜め息をついて諦める。
「……っ、分かつたわよ。あたしはジャスナのお守りに付くわ」
嫌々なのがとてもよく伝わってきて、俺はちょっと苦笑してしまつた。

そうして話がようやくまとまり、俺たちは今日の夕方に出発することになった。目的地までは約一日、そこで一泊して当田を迎えるといふわけだ。

アルバスは一度こちらへ戻つてきて、小柄な四人を乗せて今度は北へと出発する。帰りももちろんアルバスだが、先に四人を送つてから俺たちの元へ迎えに来てくれるようだ。一方通行の旅路に、ならなければいいんだけどな。

あまり大きくない鞄に最低限の荷物を詰めて、部屋を出た。居間ではネネルが夕陽に照らされ、独り、憂鬱そうにしていた。そつと向かいに腰かけて、庭の方から聞こえる双子の声に少しの間耳を貸す。

「説明が足りなかつたんだわ」

と、呟くネネル。

俺はそれでも構わずに言った。

「最初からきつと、こうなることが決まってたんだよ。俺はただの神の使者で、世界を救つたらそれで終わりだ」

「……寂しくないの？」

「どうだろ……よく分かんねえや」

俺がそう言つて笑うと、ネネルは急に立ち上がりつて俺の前まで來た。

そしてちゅつと俺の額へ口づける。

「おまじない。あんたが後悔しないよう」

はつとして彼女の表情を見よつとしたときには遅く、さつさと背を向けて出て行つてしまつた。

これまでずつと偉そうで、何かと冷ややかな態度をとつてば

かりの彼女だつたが、本当はすぐ優しい人なのだろう。

額にそつと指先で触れ、俺は椅子を立つた。

「ありがとな、ネネル」

足下に置いた鞄を手にとつて、俺も歩き出す。

家の前では、すでにヴェルシとソールハロッショウが待っていた。アルブスが俺を見てゆっくりと瞬きをする。分かつてゐるよ、アルブス。もう何も言わなくていいから、俺を世界の中心へ連れて行つてくれ。

「しつかり捕まつてないと落ちちゃうからな」と、ルアンザが俺へ言つた。

「おう、分かつた」

「どうか気をつけて下さい、マリアドさん」と、ゼーシュまで。

俺は一人へ笑つて見せ、前後の脚を折つて待機するアルブスの背に触れた。

「よろしくな、アルブス」

そしてまた、白馬は俺へ言つのだ。本当に良いのか？ と。良いんだよ、アルブス。俺はお前と違つて、一時的な神の使者なんだ。俺は俺の仕事をやるだけさ。

アルブスが頷いたのを確認し、俺はその背に跨つた。……思ったよりも座り心地が悪い。いや、馬なのだから当たり前か？

「マリアドを頼んだわよ」

と、ネネルがソールハロッショウに言つ。

富廷魔術士はいつものように笑いながら返した。

「言われなくても分かつてゐるさ」

俺の様子に彼も平静を装うと決めたらしい。

「それじゃあ、行つてくるよ」

と、アルブスへ乗るソールハロッショウ。

後ろに座つた彼が、俺の腰に両腕を回してきてびくつとした。

「……嫌だつたかい？」

「うん。お願ひだからあんまりくつくな」

と、振り向いて返す。

ソールハロッショは残念そうにするが、ちよつとだけ距離をとつた。

その後ろにヴェルシが跨つて、若干窮屈になる。

「大丈夫か、アルバス？」

さすがに大人三人はきついんじやないかと思つて尋ねたら、アルバスは構わずに立ち上がつた。

ぎゅつとその首に両腕を回し、抱きつく。

ネネルたちに見送られながら、アルバスは天へと駆け出した。

日が暮れて夜空を星と月が彩る。

速度に慣れてくると、あまり強く抱きつかずとも平氣なことが分かつてきた。

そのためか、ヴェルシは途中から反対方向に座つて後方を眺めていた。恐くないのかと思つたが、彼女は乗るコツを掴んでいるのか、むしろ楽しそうにしている。

ふいにソールハロッショが俺を強く抱きしめてきた。

「少しの間だけ、こいつしていてもいいかな……？」

と、俺の耳元に囁く。

「気が済んだら離れるよ」

と、俺はただぶつきらぼうに返した。

彼の想いが痛いほどに伝わってきたから、嫌だなんて言えなかつた。

「ありがとう」

ぎゅつと俺を抱きしめて、重たい息を吐く。

俺はまだ、何も答えられない。応えたくても、それどころじゃない。俺には考へることがたくさんあって、覚悟を決めたはずの今も不安で、心配で、胸がどきどきと痛む。

もう戻れないと分かっていて、俺はどうしようもなく臆病になつていた。きっとネネルは、そんな俺を理解していたからおまじないをくれたのだろう。 最期の最後まで、俺が後悔しないようにと。 双子の月が遠くから俺たちを眺めていた。ポルクスが一段と遠ざかつて、やがてカストールの陰へと隠れるのが分かる。 もうすぐ太陽が昇る 。

その島はのどかな所だった。きっとリゾート地として賑わう」と
だつてあるだろつ、暖かな気候の土地だ。

けれども今は、誰もがびりびりしているように思えた。当然か、
明日死ぬ命なのだから。

アルバスを見送った後、街から外れて出来るだけ開けた場所を探
した。

そして見つけたのは草が所々に生えた空き地だった。人気もなく、
万が一魔物が現われても、十分に戦える広さのある場所だ。

宿へ戻る途中、ヴエルシが俺へ言つた。

「人間以外の種族がこの世界に来ているのは、確かみたいだな」

「ああ、そうだな」

それは俺も感じていた。

俺たち人間の中にそれらはたくさん紛れ込んでいて、時折草の陰
から羽を生やした小さな生き物が飛び出してくる。

コヴァインはこれらすべての命を、無に還そつとしていた。

海は穏やかだつた。

風があまり強くないせいか、ふわふわとした優しい空気が流れて
いる。俺たちを照らす太陽も、いつもと変わらず輝いていた。

あれから一ヶ月が経つたとは思えないほどに穏やかだつた。まる
で何もなかつたのではないかと、錯覚してしまいそうなくらいに。

そうしてぼーつとしていた俺に、ソールハロッショウが声をかけて
きた。

「マリアド、この辺りならやりやすいんじゃないかな」
と、地面がむき出しになつていい箇所を示す。

そちらへ歩いて行き、そつとその場にしゃがみこんだ。片手で触
れて、さらさらした砂を軽く払つ。

「うん、そうだな」

伝わってくる大地の力。生命を育む力強い鼓動。

頭上を見上げると青い空が見えた。どこまでも、どこまでも続く青い空、そして海。

手を離して、俺はそこにぺたんと腰を下ろした。もうすぐこの世界に起きるであろうことが、恐い。

この世界の反対側で、ネネルたちはきっと、コヴァインが現われるのを待っている。

ふいに何かの鳴き声が響き、ヴェルシが剣を抜いた。

それぞれが耳を澄ませて状況の把握に努める。

魔物かと思ったが、違う。

俺は次々に聞こえてくるそれらが、すべての生物たちの悲鳴であることに気がついた。鳴いている、鳥が、犬が、魔物が、植物が。思わず周囲をきょろきょろする俺に、ソールハロッショウは頼もしく言った。

「気にしなくていい、マリアドは自分のことだけ考えるんだ」

「ずずつと何か動くような音がして、地面がぐらりと揺れ始める。はつとして両手を地面にぴつたりくつつけた。手の平から、まがまがしい魔力の流れの、大地を這うイメージが伝わってくる。

動物たちが、大人しくしていた魔物たちが暴れ出す……！」

そしてどこからか現われた魔物たちが、ヴェルシたちに襲いかかった。

その内の一體をヴェルシが真つ二つに切り裂いて、ソールハロッショウが水圧で他の魔物を遠ざける。

分かつてしまつと恐かったが、今はそつちに気をとられていてはいけない。

魔物のことは二人に任せて、俺は神経を集中させようと努めるが、地面の揺れのせいでなかなか上手くいかなかった。

大陸が、魔力に耐えきれず割れるのが見えた。

コヴァインの発動させた魔方陣がぎらぎらと光っている。

剣を手に飛び出すゼーシュ、その隙にランザが闇の力でコヴァインの身体を拘束する。

ジャスナがコヴァインの両手をとつて、あの時と同じように意識を、精神を神の待つ天界へ。

すかさずネネルの小さな足が魔方陣を壊し、魔力の流れが急に止められた。

しかし、そこから一度流れ出た魔力はすべての魔方陣を起動させ、黒妖精たちは世界の終わりへ向けて歓喜する……。

俺は両目を閉じて、深呼吸をした。右手の薬指にはめた指輪が俺の身体全体を包み込む。

神経を手の平に集中させて、すべての魔力を大地の中へ。

「デウス・ヴィヴィフィケト！」

俺の中の魔力が大地のそれと結合して膨らんだ。

その風船を割らないよう、慎重に力を放出していく。少しでもすればたら、きっと俺の魔力は暴走してしまうだろう。最終的には避けられないとしても、被害は最小限に！

もう一度深呼吸をして、今度は深く大地の中へ魔力を潜り込ませた。

大地が涙するようにぐらぐらと揺れる。その意思を、その本来の姿を、俺の魔力で取り戻す！

左右の手の平に力を込め、大地へすべての魔力を放つ。

「つ、くそ……！」

上手くいかないからではない、上手くいっているからこそ、俺は叫んだ。

「くつそおおおおお——つ……！」

頭の中に聞こえてくる。

悲鳴を上げて、混乱のあまり泣き喚いて、それぞれの大切なものを必死で守ろうとする声が。

俺の魔力が大地に跳ね返されて周囲に強風を巻き起こした。自らの力に飛ばされそうになりながら、必死で大地にしがみつく。

何が何だか分からなくなつて、ただ大地の叫びにとらわれても、俺は手を離さなかつた。ここにはすべてがあるから、この世界には愛おしいものがたくさん　！

地中を進んでいた魔力が光を生みだし、ユヴァインの魔力にぶつかった。黒く渦巻くその力を、俺は最後の力を振り絞つて光の色へと染め上げていく。

白く、白く、大地をもう一度再生させる。この世界を構成する、神なる大地を　！

そして俺の意識は途絶えた。

「よくやつたな、マリアド」「
気がつくと、目の前に神様がいた。

俺は妙に穏やかな気持ちで、ただそこにいた。

「これで世界は救われた。大地は本来の力を取り戻し、妖精族は再び人間たちと手を取り合って暮らしていくことになるだろ？」「うう、そうか」

足元に見えるのは、俺がついこの前まで在った場所。

「初めはどうなるかと思ったが、無事に務めを果たしてくれて何よりだ」「

神様もまた、世界を見下ろしていた。

「さぞかし辛かつただろ？」「

と、問う神様に、俺は言う。

「意外と、そうでもなかつたぜ」「

「そうか？ ひどく苦労しているように見えたが……」

俺の肉体は、静かな部屋のベッドに寝かされていた。

周囲にはみんながいて、先ほどから暗い雰囲気で満ちているのが分かる。誰もが口を閉ざして、何人かが思い出したようにふと俺を見つめる。

改めて自分の姿を目で見て、何だかくすぐったくなつた。俺つてあんな外見してたのか、自分で思つていたよりも全然女じやないか。そりやあ、ドレス着させられたり、女扱いされたりするのも当然だよな。

しかし、改めて考へると、俺があそこにいたのはたつた一ヶ月だけだつた。それはあまりにも短く、充実しすぎた一ヶ月間だつた。たくさんの出逢いがあつて、それと同じだけの……。

「 そういうや、前に言つてたよな？」「 と、俺は顔を上げて神様を見た。

「ああ、褒美の件か。我は嘘を言わん、お前の好きな世界へ転生させてやるぞ」

「うん……それじゃあさ」

もう一度足元を見下ろして、俺は神様へ頼んだ。

「俺が救世主だった世界に、まったくあの頃と同じ姿のままで、平和を取り戻した今へ転生させてくれ」

神様が片方の眉を上げてみせた。

「すると、救世主としての力は失われてしまうが、それでも良いのか？」

「ああ、構わないさ。一人の人間であるなら、それだけで十分だと、俺がにっこり笑つて言い返すと、神様は呆れたように頷いた。

白い白い世界から、急に地上へと落とされる。

「マリアド？」

誰かが俺を呼び、はつと両手を開けた。

「うそ……死人が、起きた」

呆然と咳くネネルに構わず、俺は上半身をゆっくり起こす。そしてにこっと笑つて見せた。

「ただいま、みんな」

途端にぽろぽろと涙をこぼすジャスナ、ゼーシュ、ルアンザ。誰も何も言えずにいるのを察して、フュエリが少し涙声で言つ。

「おかえりなさいませ、マリアド様」

その言葉にヴエルシとネネルがはつとする。

ソールハロッショはそばへ寄ると、力強く俺を抱きしめた。

「おかえり、マリアド……！」

「うん……ただいま」

大人しく抱きしめられていると、ネネルがまだ信じられない様子で尋ねた。

「何で、何で帰ってきたのよ？」

だから俺は、明るい声で言つ。

「言ひ忘れたことがあるんだ。ネネルには悪いけど、俺、後悔していることが一つだけあってさ」

ソールハロッショウが力を抜いて俺を解放した。

みんなの視線を感じながら、俺ははつきりと言つ。

「俺、ずっとソルのこと嫌いだつて言つてたけど……本当は、好きだ」

彼が呆然とし、俺はすぐに言葉を継ぐ。

「だけど、それ以上にみんなが好きだ。お前たち、全員が」

「つ、マリアド！」

「お姉様 つ！」

ルアンザが反対側から抱きついてきて、その横からジャスナが腕を出してくる。いつの間にやら二ゲルまで飛び込んできて、ちょっと暑苦しい。

ゼーシュはルアンザに呆れた顔を向けながらも、こちらへ来て笑つた。

「おかえりなさい、マリアドさん」

本当はきっと、ゼーシュも抱きつきたいはずだ。空いていた手をそちらへ出すと、思った通り、彼女は俺の手を取つた。ぎゅっと握つて、静かに涙する。

ヴェルシが安堵したように微笑んで、俯いているネネルへ言つ。「こんな時くらい、素直になつたううだ？」

「つ……マリアドの馬鹿！」

と、ソールハロッショウを押し退けて抱きついてくる小さな魔女。

「馬鹿つて何だよ」

そう言い返しながらも、俺は彼女の体温に身を任せた。彼女は最初から最後まで、ずっと世話になりっぱなしだったから、怒られるのもしょうがないことだ。

フュエリが眼鏡を外して涙を拭い、ソールハロッショウが珍しく戸惑つた様子を見せる。でも俺は無視した。

この世界に戻つてきて、本当に良かつた。

近々行われる予定だった俺の葬儀は中止になり、国王たちは俺の復活を心から喜んでくれた。

「フィアンシーナ姫なんて、わざわざ俺の前まで来て言つのだ。
本当に良かつたですわ、マリアドが戻つてきてくれて」

そして、俺の頬にちゅつとキスをする。

何だか恥ずかしかつたけれど、嬉しかつた。生きてこることが、こんなにも新鮮だなんて。

「それでマリアド、ソールハロッショウに告白したのですつて？」

「……え？」

何て耳の早い人なんだ、と、俺が愕然としたのは言つまでもないだろう。

地上には妖精族が現われ、人間と共に暮らしていた。一部の妖精族は地下の世界へ帰つたらしいが、それをきっかけに地下と地上を行き来する人間も現れ始めているらしい。

「だから僕たちは、そうした人たちを支援しようと思つんですね」と、ゼーシュは言った。真つ直ぐな視線だった。

「妖精族にもいろいろあるし、僕たちみたいなハーフだってこれらは増えるだろ?」

ルアンザはまるで、未来を見透かすかのようにそう言った。

確かにこれからはそういう時代だ。人間たちは妖精族と混じり合つて、この大地の上で共生していくのだろう。

「まだどこかにひつそりと隠れてる妖精なんかもいるだろ? し、互いに協力し合えるってことを教えようと思つ」

「魔物たちのことも、そのすべてが恐いわけじゃないと、一人でも多くの人に伝えようと思つます」

「きゅう、きゅきゅう!」

ゼーシュに抱かれていたニゲルが、彼女の言葉を応援するように鳴いた。

あれからアルブスは、自分の使命は終わつたと感じたのか、いつの間にか姿を消してしまつたそうだ。魔物の中でも聖獸と呼ばれるだけあり、とても賢く、頼もしい仲間だつた。

「そつか、それは良いことだな。お前たちじゃなきや出来ないよ」と、俺は頷いて笑う。

「それで、そのついでつてわけでもないんだけどさ」

と、ルアンザはゼーシュを見やつた。

「二人で、母さんを探しに行こうと思つ

「……そうか」

辛そうに俯くゼーシュ。

ルアンザは彼女の肩をそっと抱くと、はつきり言った。

「だから、いつこの町に戻つてこれるかは分からぬ。もしかすると、すぐこは帰つてこられないかも知れない。だから、ゼーシュは騎士団を辞めるよ。」

行方不明の母親を捜すのは、きっと容易じやない。ただでさえ、双方の世界があるべき形に落ち着くまでに、何年かかるか分からぬのだ。一人のやうとしていることは、途方もない時間を必要とするだろつ。

「でも僕、手紙書きます。返事は受け取れませんが、必ずマリアドさんに手紙を送ります。」

「うん、分かつた。待つてるよ、お前からの手紙。」

そう俺が返すと、ゼーシュは堪えきれず両手を潤ませた。俺はちよつと微笑ましく思いながら、ぽんぽんとその頭を撫でてやる。

「つ……はい」

ニゲルがまた「きゅうつー」と、鳴く。彼女を励まそうとしているらしい。

「がんばれよ、お前」

「おう！ マリアドもがんばれよな」

へへつとルアンザが笑う。何をがんばるんだか分からぬけど、気にしないことにした。

どこからか現われた妖精族は、城下町の復興を手伝つと言つてくれた。

国王はそれをありがたく認めるに、その翌日から復興作業はぐつと速度を上げて進み始めたらしい。

「で、フュエリは新たな恋を見つけたわけだ」

窓外を見下ろすと、黒妖精らしき青年とフュエリが何やら会話しているのが見えた。

その青年は城の庭を片付けてくれているらしいが、それにしてはとても爽やかな笑顔だ。フュエリの好きそうなタイプというか。

「ゴヴァインは反省しているそうよ。『だけかもしれないけどね』両手を別々に縛られ、魔法を使えないようにされたゴヴァインは今、城の地下牢に投獄されていた。

「彼と共に謀した黒妖精たちの何人かは自首してるそудし、脅威は完全に去つたと言えるわね」

「そつか……良かった」

窓の外から目を離して彼女を見やる。

「これで俺は、本当の意味で神の使者という肩書きから解放されたわけだ」

すると、ネネルは紅茶を一口飲んでから尋ねた。

「でも、それって本当なの？ 実はまだ、魔法が使えたりしないの？」

「しねえよ。そんなに気になるなら確かめてみるか？」

と、俺は両手を前へ出して重ねた。

ネネルがびくっと身を縮め、俺は魔法を唱える。

「ヴェントス！」

巻き起こつたのはそよ風だけだつた。ネネルの長い髪を揺らして、あつという間に消えていく。

「……もつたいない」

と、ネネルは咳いて身体の緊張を解いた。

俺はもう、ただの人間だ。救世主ではあるけれど、能力は人並みである。

「だから言つたろ？ 俺はもう、ただのマリアドなんだよ」

ヴェルシは騎士団に戻り、復興を手伝つていた。

「大変そうだな」

と、俺が思わずのんきなことを口にしても、彼女は怒らなかつた。「マリアドも手伝つてくれると、こちらとしてはとてもありがたいんだがな」

とはいえ、妖精たちのおかげで復興作業は早くも最終段階だ。

破壊された建造物は建て直しが始まり、広場では普通に子供たちが妖精族と遊び回っている。

俺はそれを、直接自分の目で見てきていた。

「悪いけど、今日は様子を見に来ただけだから

「そうか。気が向いたらまた来てくれ

と、ヴエルシ。

「うん。じゃあ、またな」

作業の邪魔にはなりたくないから、さっさとその場を離れる。ちらつと振り返ると、ヴエルシが作業を再開するところだった。

平和な世界だ。

戻ってきたはいいものの、俺は人間として、一人の生きる者として、何をすべきか分からなかつた。

ゼーシュとルアンザのように人々を支援できればいいが、それは俺のやるべきことではない。

ヴエルシのように復興を手伝つのも良いが、それもやがては終わってしまうだろう。その後、俺はどうなる？

どんなに考えても見つけられなくて、もどかしかつた。

ジャスナは聖堂の前で悩んでいた。

「フィアンシーナ姫様が旅へ出るところなのです。それの従者を募集していく、わたしもお供しようかと……」

相変わらず真っ白な巫女衣装が風になびく。

「ですが、わたしには巫女としての務めもありますし、どうしたらいいか」

悩む彼女に、俺は言った。

「自分がやりたいと思うことをやればいい。旅に出てしたいことがあるなら、それを選べばいい」

「……そうですね」

と、息をつくジャスナ。

本当なら俺も、自分がやりたいことをやるべきだった。しかし、それが見つからない。分からぬ。

「わたし……思うんです」

と、彼女は口を開いた。

「黒妖精でなくとも、魔物と心を通わせるとは出来るのではないか、と。もしも、その最初の一人が自分であれば良いな、と思うんです」

「ジャスナなら、出来そうだよな」

と、俺は笑った。心優しい彼女なら、きっとどんなに凶暴な魔物もいつかは心を開くだろう。

それなのにジャスナは自信なさそうに言つ。

「まだ分かりません、マリアドお姉様。今まだ、そうであれば良いと思うだけです」

でも、そう思つのだつたら、それを叶えることだつて夢じやないはずだ。

「俺は、ジャスナが旅に出ても構わないよ。ちよつと寂しくなるけ

ど、ジャスナがそれで幸せなら、俺は止めない
ジャスナがはつとして、俺を見た。

「……ゼーシュさんとルアンザさんが旅立たれた今、わたしまで行くわけには」

「良いんだよ、俺のことは気にするなつて」

頭を撫でてやると、ジャスナは涙目になつて俺へ抱きついた。

「ごめんなさい、マリアドお姉様……」

そうして彼女も、自分の道を見つけて旅へ出る覚悟を決めるのだ。

「それにしても、どうして旅へ？」

と、俺が尋ねると、フィアンシーナ姫はにっこり笑つて言つた。
「目的は国内の視察ですわ。後片付けで忙しい父の代わりに、フィ
アンシーナが國中を周り、全国民と会つてきますの」

さすがに全国民というのは無理だろうが、俺は納得した。

「そういうことだったんですね。でも、それにはずいぶん時間がかかるんじゃ？」

「そうですわね、早くても一年はかかるでしょう」

と、姫。

まだ国内は不安定で、それを姫自らが顔を見せることで、少しでも人々の支えにならうというわけだ。

俺だって、出来るものならそれがしたい。姫と一緒に旅へ出たい。
けれども、俺に何が出来る？

「月に一度、父上へ報告書を出すことにはなつてますけれど、城下の者たちにはやはり、寂しい思いをさせてしまいますわね」

何も出来ない。俺はもう強力な魔法を使えないし、他には何も思
い浮かばない。ジャスナのように、魔物と心を通わせようとも思わ
ない。

ただ俺は、旅立つ彼女たちを見送るだけだ。

「そうですね……確かにちょっと、寂しくなります
と、俺が言葉を返すと、姫は笑つた。

「マリアドまでやう言つて下さるの？ フィアンシーナ、とつても嬉しいですわ」

焦りそつになる自分を押し殺し、俺はただ愛想笑いを浮かべた。

自分の部屋へ戻る途中、ソールハロッシュに出会った。

「忙しそうだな」

と、俺が声をかけると、何十枚もの紙を抱えた彼が笑う。
「そうでもないよ。幸いに、この国には金がたくさんあるからね」

ソールハロッシュは引き続いて経済的支援を行っていた。

その内に魔術士としての仕事へ戻るらしいが、公爵でもある彼のことだから、しばらくは忙しそうだ。

「そつか……」

やはり俺には何も出来そうにないと、思わず落ち込む。とりあえず部屋へ戻つて考え直そうかと思つていたら、ソールハロッシュが言つた。

「何か考えごとかい？」

「え……いや、うん」

俯いてから足を止め、床を見つめる。

ソールハロッシュは俺の隣まで来ると、優しく言つた。

「悩みがあるなら、オレが聞くよ」

今までは俺の方がみんなより上で、そつじやなくなつて初めて、俺は自分の本当の無力さを知つた。

「別に、悩みつてわけじゃ……ない」

「そうは見えないけれど？」

すべてお見通しだつた。

溜め息をついて、俺は彼を見上げた。

「今の俺には、何が出来ると思う？」

目を丸くして、真面目に考へ始める美青年。

「何つて言われても……そうだな」

すぐに答えは出そうになかったので、ふいとそっぽを向いた。相変わらず窗外は人々の活気で賑わっている。

「確かに、学校が今建て直しの最中で、仮の校舎を借りて再開したとか。でも、妖精族の子どもまで受け入れたせいで、人が足りないらしいよ」

と、ソールハロッショウがにこっと笑う。

それはつまり、学校の臨時教師というか……講師というか。

「子どもを相手にするのか？」

「あとは……がれきの撤去作業や荒らされた庭の片付け、年配の方の家に行って話を聞く仕事なんもあるけど、それは一種の医療行為だね」

残された選択肢は重労働か医療行為というわけらしい。もちろん前者はお断りだし、身体蘇生を実際にやってしまった俺が今さら医療行為というのも変だ。

「一応聞くけど、他には？」

「魔物退治とか？」

「無理だ」

「仕方ない、学校でボランティアするか。何もしないよりはマシだし、もしかするとそこで見えてくるものもあるかもしね」

「分かった。俺、学校行くわ」

と、覚悟を決めると、彼が満足そうに頷いた。

「そう言つと思つたよ。だから最初に勧めたんだ」

「え、何で？」

「何か理由でもあるのかと尋ねたら、ソールハロッショウはいつもみたいにふざけた答えを返す。

「今から慣れておけば、いつオレたちの子どもが出来ても困らないだろう？」

俺はにっこり微笑むと、ぎゅっと拳を握りしめた。そして彼の腹を思いつきり殴る。

「勝手に言つてろ、この変態！」

f
i
n
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1659r/>

男で女な神の使者

2011年8月29日03時41分発行